

四国縦貫自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告
20

吉水遺跡

2002

徳島県教育委員会
財団法人 徳島県埋蔵文化財センター
日本道路公団

三王山

雄江町

雄新町

三郎山

新村谷川

長岡集落

和歌山

美濃

三郎山

岸田町

三郎川

三郎山

三郎山

雄新町

中流

三郎山



序 文

本書は四国縦貫自動車道（美馬～井川間）の建設に伴い、平成7年度と8年度に実施した美馬郡美馬町に所在する吉水遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。

吉水遺跡は吉野川中流域北岸、讃岐山脈南麓の河岸段丘上に位置しており、主に弥生時代と室町時代の遺構・遺物が確認されました。今回の調査を通して弥生時代の集落と室町時代の寺院に関係すると考えられる建物跡の検出や法具『輪宝』が採取された事など、地域の歴史を解明していく上で数多くの貴重な成果を上げることができました。

本書が調査研究の一資料として活用され、埋蔵文化財保護の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査の実施、報告書作成にあたり、日本道路公団をはじめ、関係諸機関並びに地元の皆様に多大のご協力、ご指導を頂きました。ここに深く感謝いたしますと共に、今後とも御支援賜りますようお願い申し上げます。

平成14年3月

財団法人 徳島県埋蔵文化財センター

理事長 松村 通治

例 言

1. 本書は平成8年(1996)度実施した四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2. 吉水遺跡(美馬郡美馬町所在)の調査報告書を収録した。
3. 発掘調査は日本道路公団四国支社から徳島県が委託を受け、徳島県からの委託により、財団法人徳島県埋蔵文化財センターが実施した。
4. 発掘調査及び報告書作成についての実施期間は次の通りである。
 - 試掘調査 平成7年5月9日～平成7年5月19日
 - 発掘調査 平成8年4月1日～平成8年10月31日
 - 整理業務 平成12年4月3日～平成13年3月31日
5. 遺構の表示は徳島県埋蔵文化財センターが定める発掘調査基準による記号を用いた。
凡例
SA 掘建柱建物跡 SB 竪穴住居跡 SD 溝 SK 土坑
SO 炭窯 SP 柱穴 SX 不明遺構
6. 方位は国土座標第IV座標系の北、高さは東京湾標準潮位(T.P.)を表す。
7. 本書で用いた土層及び土器の色調は小山正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』1996年度版によった。
8. 遺物記号・挿図番号・図版番号は通し番号とし、本文・挿図・表・図版と一致する。
9. II-第4図の地形図は建設省国土地理院発行の1/25,000の地形図「貞光」を縮小・転載使用したものである。
10. 調査にあたっては、次の機関の指導・協力を得た。

徳島県教育委員会	日本道路公団四国支社	同協工事事務所
徳島県土木部縦貫道推進局	同中央事務所	美馬町
11. 本書の執筆はIを菅原康夫、その他を横田温生が担当し全体の編集を行った。写真は遺物を横田が、遺構は調査担当者が撮影した。

本文目次

I	調査の経緯	1
1	調査にいたる経緯	1
2	調査の経過	6
(1)	調査の経緯	6
(2)	発掘調査の方法	7
(3)	調査日誌抄	7
II	遺跡の立地と環境	8
1	地理的環境	8
2	歴史的環境	9
III	調査成果	18
1	基本層序	18
2	遺構と遺物	18
(1)	弥生時代	18
	竪穴住居跡	18
	掘立柱建物跡	21
	土坑	23
	柱穴	24
(2)	包含層出土遺物①	26
(3)	中世	39
	掘立柱建物跡	39
	溝	54
	土坑	74
	炭窯	93
	不明遺構	95
	柱穴	95
(4)	包含層出土遺物②	111
IV	まとめ	165

挿 図 目 次

第 1 図	調査地位置図	6	第 38 図	遺構配置図 (中世)	37
第 2 図	グリッド配置図	7	第 39 図	SA1001実測図	39
第 3 図	吉水遺跡周辺の地形分類図	11	第 40 図	SA1002実測図	39
第 4 図	吉水遺跡周辺の遺跡分布図	12	第 41 図	SA1002-P1実測図	40
第 5 図	遺構配置図	13	第 42 図	SA1002-P1出土遺物実測図	40
第 6 図	遺構配置図 (弥生時代)	15	第 43 図	SA1002-P5実測図	40
第 7 図	基本土層柱状図	17	第 44 図	SA1002-P5出土遺物実測図	40
第 8 図	SB1001実測図	19	第 45 図	SA1003実測図	40
第 9 図	SB1001出土遺物実測図	19	第 46 図	SA1004実測図	41
第 10 図	SB1002実測図	20	第 47 図	SA1004-P2実測図	44
第 11 図	SB1002出土遺物実測図	20	第 48 図	SA1004-P2出土遺物実測図	44
第 12 図	SB1003実測図	20	第 49 図	SA1004-P3実測図	44
第 13 図	SB1004実測図	21	第 50 図	SA1004-P3出土遺物実測図	44
第 14 図	SA2001実測図	21	第 51 図	SA1004-P4実測図	44
第 15 図	SA2002実測図	22	第 52 図	SA1004-P4出土遺物実測図	44
第 16 図	SA2003実測図	22	第 53 図	SA1004-P7実測図	44
第 17 図	SA2004実測図	23	第 54 図	SA1004-P7出土遺物実測図	44
第 18 図	SA2004-P8実測図	23	第 55 図	SA1004-P10実測図	45
第 19 図	SA2004-P8出土遺物実測図	23	第 56 図	SA1004-P10出土遺物実測図	45
第 20 図	SK1018実測図	24	第 57 図	SA1004-P14実測図	45
第 21 図	SK1018出土遺物実測図	24	第 58 図	SA1004-P15実測図	45
第 22 図	SK1028実測図	24	第 59 図	SA1004-P15出土遺物実測図	45
第 23 図	SK1028出土遺物実測図	24	第 60 図	SA1004-P16実測図	45
第 24 図	SP1288実測図	24	第 61 図	SA1004-P16出土遺物実測図	45
第 25 図	SP1288出土遺物実測図	24	第 62 図	SA1004-P17実測図	46
第 26 図	包含層出土遺物実測図(1)	25	第 63 図	SA1004-P17出土遺物実測図	46
第 27 図	包含層出土遺物実測図(2)	26	第 64 図	SA1004-P19実測図	46
第 28 図	包含層出土石器実測図(1)	26	第 65 図	SA1004-P19出土遺物実測図	46
第 29 図	包含層出土石器実測図(2)	27	第 66 図	SA1004-P24実測図	46
第 30 図	包含層出土石器実測図(3)	28	第 67 図	SA1004-P31実測図	46
第 31 図	包含層出土石器実測図(4)	29	第 68 図	SA1004-P31出土遺物実測図	46
第 32 図	包含層出土石器実測図(5)	30	第 69 図	SA1004-P34実測図	46
第 33 図	包含層出土石器実測図(6)	31	第 70 図	SA1004-P34出土遺物実測図	46
第 34 図	包含層出土石器実測図(7)	32	第 71 図	SA1005実測図	47
第 35 図	包含層出土石器実測図(8)	33	第 72 図	SA1005-P2実測図	49
第 36 図	包含層出土石器実測図(9)	34	第 73 図	SA1005-P2出土銅銭(1)	49
第 37 図	包含層出土石器実測図(10)	35	第 74 図	SA1005-P2出土銅銭(2)	49

第 75 图	SA1005-P3 夹测图	49	第 117 图	SK1007 夹测图	74
第 76 图	SA1005-P3 出土遗物夹测图	49	第 118 图	SK1007 出土遗物夹测图	74
第 77 图	SA1005-P5 夹测图	49	第 119 图	SK1019 · SD1018 夹测图	75
第 78 图	SA1005-P5 出土遗物夹测图	49	第 120 图	SK1019 出土遗物夹测图	76
第 79 图	SA1005-P6 夹测图	51	第 121 图	SK1023 · SK1024 夹测图	76
第 80 图	SA1005-P9 夹测图	51	第 122 图	SK1023 出土遗物夹测图	76
第 81 图	SA1005-P9 出土遗物夹测图	51	第 123 图	SK1024 出土遗物夹测图	76
第 82 图	SA1005-P10 夹测图	51	第 124 图	SK1025 夹测图	77
第 83 图	SA1005-P12 夹测图	51	第 125 图	SK1025 出土遗物夹测图(1)	78
第 84 图	SA1006 夹测图	51	第 126 图	SK1025 出土遗物夹测图(2)	79
第 86 图	SA1006-P1 出土遗物夹测图	53	第 127 图	SK1025 出土遗物夹测图(3)	80
第 87 图	SA1006-P4 夹测图	53	第 128 图	SK1025 出土遗物夹测图(4)	81
第 88 图	SA1006-P4 出土遗物夹测图	53	第 129 图	SK1025 出土遗物夹测图(5)	82
第 89 图	SA1006-P7 夹测图	53	第 130 图	SK1025 出土遗物夹测图(6)	83
第 90 图	SA1006-P9 夹测图	53	第 131 图	SK1025 出土遗物夹测图(7)	84
第 91 图	SA1006-P9 出土遗物夹测图	53	第 132 图	SK1025 出土遗物夹测图(8)	85
第 92 图	SD1001 · 1002 夹测图	54	第 133 图	SK1025 出土遗物夹测图(9)	86
第 93 图	SD1004 夹测图	54	第 134 图	SK1025 出土遗物夹测图(00)	87
第 94 图	SD1004 出土遗物夹测图(1)	54	第 135 图	SK1025 出土遗物夹测图(01)	88
第 95 图	SD1004 出土遗物夹测图(2)	55	第 136 图	SK1025 出土遗物夹测图(02)	89
第 96 图	SD1004 出土遗物夹测图(3)	56	第 137 图	SK1025 出土遗物夹测图(03)	90
第 97 图	SD1004 出土遗物夹测图(4)	57	第 138 图	SK1029 夹测图	91
第 98 图	SD1004 出土遗物夹测图(5)	58	第 139 图	SK1029 出土遗物夹测图	91
第 99 图	SD1004 出土遗物夹测图(6)	59	第 140 图	SK1030 出土遗物夹测图	92
第 100 图	SD1007 夹测图	61	第 141 图	SK1031 夹测图	92
第 101 图	SD1007 出土遗物夹测图	63	第 142 图	SK1033 夹测图	93
第 102 图	SD1011 夹测图	64	第 143 图	SK1033 出土遗物夹测图	93
第 103 图	SD1011 出土遗物夹测图	65	第 144 图	SO1001 夹测图	94
第 104 图	SD1012 · SD1013 夹测图	66	第 145 图	SO1002 夹测图	94
第 105 图	SD1012 出土遗物夹测图(1)	65	第 146 图	SX1001 夹测图	96
第 106 图	SD1012 出土遗物夹测图(2)	67	第 147 图	SX1002 夹测图	96
第 107 图	SD1012 出土遗物夹测图(3)	68	第 148 图	SX1002 出土铁製品夹测图	96
第 108 图	SD1012 出土遗物夹测图(4)	69	第 149 图	SX1003 夹测图	97
第 109 图	SD1012 出土铁製品夹测图(5)	69	第 150 图	SX1003 出土木製品夹测图(1)	98
第 110 图	SD1013 出土遗物夹测图(1)	70	第 151 图	SX1003 出土木製品夹测图(2)	99
第 111 图	SD1013 出土遗物夹测图(2)	71	第 152 图	SX1003 出土木製品夹测图(3)	100
第 112 图	SD1013 出土銅錢(3)	72	第 153 图	SX1003 出土木製品夹测图(4)	101
第 113 图	SD1013 出土铁製品夹测图(4)	72	第 154 图	SP1142 夹测图	102
第 114 图	SK1030 · SD1014 夹测图	73	第 155 图	SP1167 夹测图	102
第 115 图	SD1014 出土遗物夹测图	73	第 156 图	SP1222 夹测图	102
第 116 图	SD1017 夹测图	73	第 157 图	SP1236 夹测图	102

第158图	SP1357实测图	102	第199图	SP1389实测图	108
第159图	SP1379实测图	102	第200图	SP1398实测图	109
第160图	SP1385实测图	102	第201图	SP1404实测图	109
第161图	SP1403实测图	102	第202图	SP1405实测图	109
第162图	SP1409实测图	102	第203图	SP1410实测图	109
第163图	SP1412实测图	102	第204图	SP1419实测图	109
第164图	SP1413实测图	102	第205图	SP1444实测图	109
第165图	SP1414实测图	102	第206图	SP1454实测图	109
第166图	SP1417实测图	103	第207图	SP1473实测图	109
第167图	SP1418实测图	103	第208图	SP1478实测图	109
第168图	SP1443实测图	103	第209图	SP1483实测图	109
第169图	SP1448实测图	103	第210图	包含层出土遗物实测图(1)	110
第170图	SP1479实测图	103	第211图	包含层出土遗物实测图(2)	111
第171图	SP1480实测图	103	第212图	包含层出土遗物实测图(3)	112
第172图	SP1485实测图	103	第213图	包含层出土遗物实测图(4)	113
第173图	SP1142出土遗物实测图	104	第214图	包含层出土遗物实测图(5)	114
第174图	SP1167出土遗物实测图	104	第215图	包含层出土遗物实测图(6)	115
第175图	SP1222出土遗物实测图	104	第216图	SK1025出土遗物实测图(7)	116
第176图	SP1236出土遗物实测图	104	第217图	包含层出土遗物实测图(8)	117
第177图	SP1357出土遗物实测图	104	第218图	包含层出土遗物实测图(9)	118
第178图	SP1379出土遗物实测图	104	第219图	包含层出土遗物实测图(10)	119
第179图	SP1385出土遗物实测图	104	第220图	包含层出土遗物实测图(11)	120
第180图	SP1403出土遗物实测图	104	第221图	包含层出土遗物实测图(12)	121
第181图	SP1409出土铜钱	105	第222图	包含层出土遗物实测图(13)	122
第182图	SP1412出土遗物实测图	105	第223图	包含层出土遗物实测图(14)	123
第183图	SP1413出土遗物实测图	105	第224图	包含层出土遗物实测图(15)	124
第184图	SP1414出土遗物实测图	105	第225图	包含层出土遗物实测图(16)	125
第185图	SP1417出土铁製品	105	第226图	包含层出土遗物实测图(17)	126
第186图	SP1418出土铁製品	105	第227图	包含层出土遗物实测图(18)	127
第187图	SP1443出土遗物实测图	105	第228图	包含层出土遗物实测图(19)	128
第188图	SP1448出土遗物实测图	105	第229图	包含层出土遗物实测图(20)	129
第189图	SP1479出土遗物实测图	106	第230图	包含层出土遗物实测图(21)	130
第190图	SP1480出土遗物实测图	106	第231图	包含层出土遗物实测图(22)	131
第191图	SP1485出土遗物实测图	106	第232图	包含层出土遗物实测图(23)	132
第192图	SP1093实测图	108	第233图	包含层出土遗物实测图(24)	133
第193图	SP1112实测图	108	第234图	包含层出土遗物实测图(25)	134
第194图	SP1250实测图	108	第235图	包含层出土遗物实测图(26)	135
第195图	SP1265实测图	108	第236图	包含层出土遗物实测图(27)	136
第196图	SP1288实测图	108	第237图	包含层出土遗物实测图(28)	137
第197图	SP1311实测图	108	第238图	包含层出土遗物实测图(29)	138
第198图	SP1378实测图	108	第239图	包含层出土遗物实测图(30)	139

第240図	包含層出土遺物実測図(31)……………	140	第254図	包含層出土遺物実測図(45)……………	154
第241図	包含層出土遺物実測図(32)……………	141	第255図	包含層出土遺物実測図(46)……………	155
第242図	包含層出土遺物実測図(33)……………	142	第256図	包含層出土遺物実測図(47)……………	156
第243図	包含層出土遺物実測図(34)……………	143	第257図	包含層出土遺物実測図(48)……………	157
第244図	包含層出土遺物実測図(35)……………	144	第258図	包含層出土遺物実測図(49)……………	158
第245図	包含層出土遺物実測図(36)……………	145	第259図	包含層出土遺物実測図(50)……………	159
第246図	包含層出土遺物実測図(37)……………	146	第260図	包含層出土遺物実測図(51)……………	160
第247図	包含層出土遺物実測図(38)……………	147	第261図	包含層出土遺物実測図(52)……………	161
第248図	包含層出土遺物実測図(39)……………	148	第262図	包含層出土遺物実測図(53)……………	162
第249図	包含層出土遺物実測図(40)……………	149	第263図	包含層出土遺物実測図(54)……………	162
第250図	包含層出土遺物実測図(41)……………	150	第264図	包含層出土遺物実測図(55)……………	162
第251図	包含層出土遺物実測図(42)……………	151	第265図	包含層出土遺物実測図(56)……………	163
第252図	包含層出土遺物実測図(43)……………	152	第266図	包含層出土遺物実測図(57)……………	164
第253図	包含層出土遺物実測図(44)……………	153			

目 次

図版 1	(1) 調査前風景……………	200	図版 10	出土遺物(9)SA1004~1006 ……	209
	(2) 完掘状況……………	200	図版 11	出土遺物(10)SD1004 ……	210
図版 2	(1) SD1011検出状況……………	201	図版 12	出土遺物(11)	
	(2) SK1025遺物出土状況……………	201		SD1004・SD1007・SD1012 ……	211
	(3) SD1002本掘出土状況(西より)……………	201	図版 13	出土遺物(12)SD1012・SD1013 ……	212
	(4) SD1002本掘出土状況(南より)……………	201	図版 14	出土遺物(13)SK1019・SK1029 ……	213
	(5) SO1001完掘状況(南より)……………	201	図版 15	出土遺物(14)SK1025……………	214
	(6) SO1001完掘状況(東より)……………	201	図版 16	出土遺物(15)SK1025……………	215
	(7) SO1002検出状況……………	201	図版 17	出土遺物(16)SK1025……………	216
図版 3	(1) SX1003出土状況……………	202	図版 18	出土遺物(17)SK1025……………	217
	(2) SB1001石籬出土状況……………	202	図版 19	出土遺物(18)SK1025……………	218
	(3) SB1002石包丁出土状況……………	202	図版 20	出土遺物(19)SK1025……………	219
	(4) 包含層縦型石匙出土状況……………	202	図版 21	出土遺物(20)SK1025……………	220
	(5) 包含層石籬出土状況……………	202	図版 22	出土遺物(21)SK1025……………	221
図版 4	出土遺物(1)SB1001……………	203	図版 23	出土遺物(22)SK1025……………	222
	出土遺物(2)SB1002……………	203	図版 24	出土遺物(23)SK1025……………	223
	出土遺物(3)包含層……………	203	図版 25	出土遺物(24)	
図版 5	出土遺物(4)包含層……………	204		SX1003・SP1379・SP1409・SP1443…	224
図版 6	出土遺物(5)包含層……………	205	図版 26	出土遺物(25)包含層……………	225
図版 7	出土遺物(6)包含層……………	206	図版 27	出土遺物(26)包含層……………	226
図版 8	出土遺物(7)包含層……………	207	図版 28	出土遺物(27)包含層……………	227
図版 9	出土遺物(8)包含層……………	208	図版 29	出土遺物(28)包含層……………	228

図版 30	出土遺物(29)包含層	229
図版 31	出土遺物(30)包含層	230
図版 32	出土遺物(31)包含層	231
図版 33	出土遺物(32)包含層	232
図版 34	出土遺物(33)包含層	233
図版 35	出土遺物(34)包含層	234
図版 36	出土遺物(35)包含層	235
図版 37	出土遺物(36)包含層	236
図版 38	出土遺物(37)包含層	237

図版 39	出土遺物(38)包含層	238
図版 40	出土遺物(39)包含層	239
図版 41	出土遺物(40)包含層	240
図版 42	出土遺物(41)包含層	241
図版 43	出土遺物(42)包含層	242
図版 44	出土遺物(43)包含層	243
図版 45	出土遺物(44)包含層	244
図版 46	出土遺物(45)包含層	245
図版 47	出土遺物(46)包含層	246

表 目 次

第 1 表	四国縦貫自動車道（美馬～井川） 埋蔵文化財調査地一覧表	4
第 2 表	弥生時代遺構一覧表（SB）	166
第 3 表	弥生時代遺構一覧表（SA）	166
第 4 表	弥生時代遺構一覧表（SK・SP）	167
第 5 表	室町時代遺構一覧表（SA）	167
第 6 表	室町時代遺構一覧表（SD）	168
第 7 表	室町時代遺構一覧表（SK）	169
第 8 表	遺構一覧表SO	169
第 9 表	中世遺構一覧表（SX）	169
第 10 表	中世遺構一覧表（SP）	170
第 11 表	出土遺物観察表 弥生土器	171
第 12 表	出土遺物観察表 中世土器	173
第 13 表	出土遺物観察表 磁器	181

第 14 表	出土遺物観察表 石塔	182
第 15 表	出土遺物観察表 石器	183
第 16 表	出土遺物観察表 軒丸瓦	185
第 17 表	出土遺物観察表 丸瓦	185
第 18 表	出土遺物観察表 軒平瓦	192
第 19 表	出土遺物観察表 平瓦	192
第 20 表	出土遺物観察表 熨斗瓦	196
第 21 表	出土遺物観察表 切隅瓦	197
第 22 表	出土遺物観察表 雁振瓦	197
第 23 表	出土遺物観察表 不明瓦・鬼瓦	197
第 24 表	出土遺物観察表 鉄製品	198
第 25 表	出土遺物観察表 銅製品	199
第 26 表	出土遺物観察表 銅銭	199

I 調査の経緯

1 調査にいたる経緯

四国縦貫自動車道第10次区間（脇～美馬）の路線延長は11.7kmで、昭和63年5月18日施行命令が出され、昭和63年6月17日に路線発表された。当該区間については県教育委員会文化課（現文化財課、以下県教育委員会と呼ぶ）が昭和62・63年度に分布調査を実施し、15遺跡106,000㎡を調査対象として、平成4年4月23日付けで日本道路公団高松建設局（現四国支社、以下JHと呼ぶ）と埋蔵文化財の取扱いに関する協議（文化庁協議）を終えた。平成4年度は第7次区間（徳島～脇）の調査最終年度と重なったが、用地交渉が開始され、当年度末より一部地点において試掘調査に着手し、6年度より本調査を開始した。

第11次区間（美馬～川之江）の路線延長は42.3kmで、平成2年11月19日施工命令が出され、平成3年1月21日に路線発表された。当該区間は県教育委員会が平成4年度に分布調査を実施し、39遺跡323,195㎡を調査対象として、平成5年9月24日付けで文化庁協議を終えた。平成6年度試掘調査に着手し、7年度より本調査を開始した。

この区間は平成9年度に第10次区間、10年度に第11次区間のうち美馬～井川池田の供用目標が設定された。県教育委員会は6年度に第7次区間の調査実績（調査班数16.5班、調査対象68遺跡360,000㎡に対して実調査面積133,464㎡、実掘率37%）を勘案して、当該区間に必要な調査班数を12班（1班構成、調査員2・調査補助員2）と算出した。4・5年度は用地取得状況にも顕著な進捗はなく、そのため第10次区間の一部において本調査が実施されにすぎない。

6年度は全区間で用地取得が進み、10次区間の5カ所で本調査を実施したのをはじめ、両区間の21カ所で試掘調査を展開した。

県教育委員会はセンターから提出された6年度の試掘調査結果や用地取得状況を基に、7年度を10次区間3班、11次区間6班の計9班体制で調査することを決定した。しかしこれは、10年度中の供用時期を前提としたJHの調査人員配置要望（10次区間必要班数11班・11次区間必要班数16班、7年度要望班数15班）とは大きな懸隔を生じた。

さらに人員確定後に試掘調査が行われた美馬町業師遺跡・坊僧遺跡では調査対象区域外に遺跡が拡がる見込みとなり、約22,000㎡の追加調査の必要性が生じた。併せて第11次区間の用地取得が進捗した。そのため10次区間の調査を優先させると、11次区間は試掘調査を実施するにとどまり、本調査に着手できない状況が懸念された。このためJHから県教育委員会に対して度重なる増班要請がなされた。

7年度は県立埋蔵文化財総合センター開設に伴い、調査関係は一課二係制が二課四係制に改正され、調査第二課調査第一係がJH事業を担当することになった。県教育委員会は年度早々に必要班数を見直して26.5班と修正し、調査第二課内の事業の調整にとどまらず、第一課事業も割愛し、調査班の捻出に向けての調整をセンターに要請した。その結果、7年度を当面12班で対応することとなった。

7年度は第10次区間の調査を概成させ、第11次区間については試掘調査を先行させる方針により、調査班の配置を変更したため、全体の実掘面積は当初計画よりも減少したものの、調査計画が大幅に変動

した。また11次区間で本調査を実施した三野町丸山遺跡では約8,500㎡が追加調査が必要となったのをはじめ、一部の調査において大幅な遅延を生じたため、さらに調整を行い休日まで調査員を投入する事態となったが、さほどの効果を上げるまでには至らなかった。

加えて試掘調査の結果、美馬町荒川遺跡、吉水遺跡、三好町土井遺跡、大柿遺跡などでは、当初見込みを上回る調査面積が確実になったため、県教育委員会は工事工程上、調整可能な調査箇所を平成8年度に先送りすること決めた。こうしたことから、必然的に平成8年度が事業ピークを迎える見込みになった。JHと次年度体制について協議を進めていた県教育委員会は、年末までに8年度を35班体制で臨むことを決定し、不足人員を若干の専門職員採用と30数名の教員派遣で対応することを決定した。

この大量の教員派遣計画に対して、平成8年2月10日付文化財保存全国協議会から徳島県知事・徳島県教育長宛「四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査及び文化財保護行政の適正化を求める要望書」、同年3月6日付考古学研究会から「四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の調査体制にかんする質問書」、同年3月28日付日本考古学協会埋蔵文化財保護対策委員会から「四国縦貫自動車道建設に伴う文化財保護行政ならびに埋蔵文化財発掘調査に関する要望書」が提出された。

これに対し県教育委員会は県教育長名で考古学研究会に同年3月22日付、日本考古学協会埋蔵文化財保護対策委員会には同年4月15日付で回答している。

8年度は調査体制が一新された。県教育委員会に埋蔵文化財担当参事(センター常務理事兼事務局長)を設置し、文化財課の埋蔵文化財担当係の強化を図ると共に、前年度に続いてセンターの組織改正が行われた。調査関係では7年度の事務分掌が全面的に改正され、三好町に埋蔵文化財センター西部事務所が設置された。調査第二課調査第一係は西部事務所勤務となり、8年度は新設の所長(センター常務理事兼次長)以下143名、9年度は95名体制、8年度最大稼働時35班(通年28.5班)、9年度最大稼働時24班(通年20.5班)、計49班で事業に対応することとなった。

第1表に年次ごとの進捗状況を示した。8年度は、第11次区間美馬〜井川池田間の調査に目途をたてることを最大の主眼とした。8年度前半に10次区間及び前年度からの継続調査の完了、用地の取得がまとまった11次区間の中規模遺跡の概成、後半での大規模遺跡への効果的稼働を目指した。

吉水遺跡に係る試掘調査業務、発掘調査業務、報告書作成業務体制は以下のとおりである。

試掘調査・発掘調査業務体制

平成7年度

事務局

所長	筒井 豊祐	事務局 長	柴田 広
総務課 長	小林 敬治	調査第二課課長兼調査第一係長	島巡 賢二
総務課 主事	三木 和文	総務課 技師	青木 雅和
総務課臨時補助員	扶川 道代・福本 桂子		
調査担当	吉水遺跡(試掘)	石井 伸夫・中南 弘史	

平成8年度

事務局

所長	筒井 豊祐	事務局 長	庄野 徳保
事務局 次長	谷 一郎	総務課 課長	長江 仁
調査第二課課長	菅原 康夫	主査兼調査第一係長	南 信義
総務課 主事	集堂 正士	総務課 技師	青木 正和・笠井 達雄
総務課臨時補助員	扶川 道代・福本 桂子		
西部事務所 所長	谷 一郎(常務理事兼事務局次長兼務)		
次長	菅原 康夫(調査第二課長兼務)		
縦貫担当係長	南 信義(調査第二課第一係長兼務)		
臨時 補助員	森 礼子		
調査担当	吉水遺跡(本調査)	宮本 和宏・志摩 誠一	

報告書作成業務体制

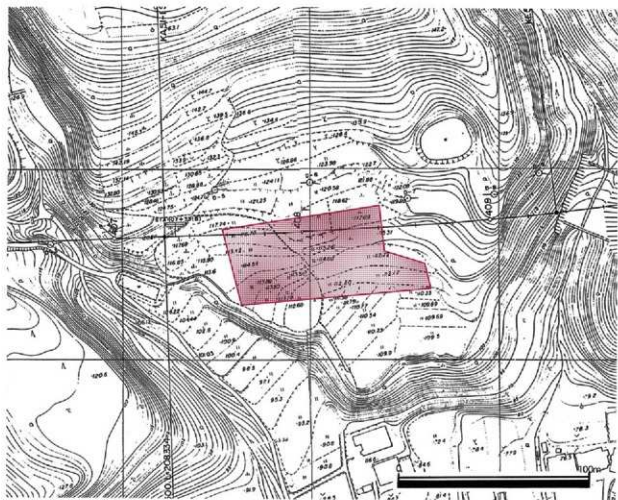
平成12年度

整理普及課長	島巡 賢二
整理係 係長	西谷 泰幸
整理 担当	横田 温生

第1表 四国縦貫自動車道(脇～美馬・美馬～川之江)埋蔵文化財調査地一覧表

番号	遺跡名	所在地	表 面 積 (m ²)							備 考	
			美馬藩	4年度	5年度	6年度	7年度	8年度	9年度		10年度
1	原(I)	美馬郡脇町北庄	380		380						
2	原(II)	美馬郡脇町北庄	1,560		1,560						
3	鶴瀬	美馬郡脇町北庄	1,544		240	1,304					
4	佐城(I)	美馬郡脇町脇町	565	165	400						
5	佐城(II)	美馬郡脇町脇町	779	89	70	620					
6	佐城(III)	美馬郡脇町脇町	146	146							
7	田上(I)	美馬郡脇町田上	891			873	18				報告書第27集所収
8	田上(II)	美馬郡脇町西田上	9,258			4,610	4,478	170			報告書第27集所収
9	田上(III)	美馬郡脇町西田上	6,062		150	1,822	4,090				報告書第27集所収
10	井口	美馬郡脇町井口	150		150						
11	薬師(薬師)	美馬郡美馬町芝坂	9,335			330	9,005				報告書第34集所収
12	薬師(芝坂)	美馬郡美馬町芝坂	6,937			41	4,613	2,283			報告書第34集所収
13	坊僧(坊僧)	美馬郡美馬町坊僧	12,455		750	56	11,649				報告書第34集所収
14	坊僧(中風)	美馬郡美馬町坊僧	229			154	75				報告書第34集所収
15	坊僧(東段)	美馬郡美馬町坊僧	5,850			116	5,734				報告書第34集所収
16	坊僧(西段)	美馬郡美馬町坊僧	63			63					報告書第34集所収
17	池ノ浦	美馬郡美馬町池ノ浦	26			26					
18	滝ノ宮	美馬郡美馬町滝ノ宮	2,563	350	500		1,713				
19	下突出	美馬郡美馬町中横尾	2,600				2,600				
脇～美馬			61,393	750	4,200	10,015	43,975	2,453			
20	荒川	美馬郡美馬町荒川	17,782				202	15,530	2,050		
21	吉水	美馬郡美馬町吉水	3,820				120	3,700			本報告書所収
22	西屋敷	美馬郡美馬町中西	288				288				
23	中山	美馬郡美馬町中山	172				172				
24	西大在古	美馬郡美馬町突路	153				108	45			
25	清水	三好郡三野町清水	10,692			692		10,000			
26	塩塚	三好郡三野町清水	2,332			310	72	1,950			
27	加茂野宮(II)	三好郡三野町加茂野宮	300			300					
28	加茂野宮(I)	三好郡三野町加茂野宮	340			340					
29	大谷尻	三好郡三野町北原	4,595			95	4,500				

番号	遺跡名	所在地	表 面 積 (m ²)							備 考	
			実測面積	4年度	5年度	6年度	7年度	8年度	9年度		10年度
30	丸山	三好郡三好町勢力	14,760				11,110	3,650			
31	花園	三好郡三好町太刀野	3,456				356	3,100			
32	太刀野山(Ⅱ)	三好郡三好町アミダ堂	157			103	54				
33	太刀野山(Ⅰ)	三好郡三好町アミダ堂	450			450					
34	台	三好郡三好町足代	1,203					1,203			
35	宮ノ原(Ⅱ)	三好郡三好町足代	345					345			
36	宮ノ原(Ⅰ)	三好郡三好町足代	898					898			
37	東原	三好郡三好町足代	16,365			217	323	15,825			
38	西原	三好郡三好町足代	10,853			157	616	8,153	1,927		
39	円通寺	三好郡三好町足代	42,453				808	30,375	11,270		報告書第28集所収
40	土井	三好郡三好町昼間	35,830			140	378	19,520	15,592		報告書第38集所収
41	大柿	三好郡三好町昼間	53,012				1,562	22,960	28,490		
42	八幡	三好郡井川町八幡	1,250				20	1,230			報告書第29集所収
43	井内	三好郡井川町西井川	277					277			報告書第29集所収
44	井出上	三好郡井川町西井川	6,336				30	6,306			
45	相知	三好郡井川町西井川	15,500				120	15,380			
46	坊	三好郡井川町西井川	420					120	300		報告書第29集所収
47	須賀	三好郡井川町西井川	3,869					689	3,180		報告書第29集所収
48	末	三好郡井川町西井川	240					240			報告書第29集所収
49	お塚	三好郡池田町トウゲ	5,314			354	1,238	3,722			
50	供養地	三好郡池田町クヤウジ	1,811			111	1,700				
51	山田(Ⅱ)	三好郡池田町ヤマダ	1,515			285	1,230				
52	山田(Ⅰ)	三好郡池田町ヤマダ	703			53	650				
53	馬路	三好郡池田町馬路	970						320	650	
54	源氏岡	三好郡池田町馬路	175							175	
55	林	三好郡池田町佐野	130						130		
56	和田	三好郡池田町佐野	1,220					1,220			
57	森常	三好郡池田町初草	90						90		
58	高毛	三好郡池田町高毛	25						25		
美馬～川之江			259,901			3,607	25,007	167,088	63,374	826	
計			321,294	750	4,200	13,622	68,982	169,541	63,374	826	



第1図 調査地位位置図

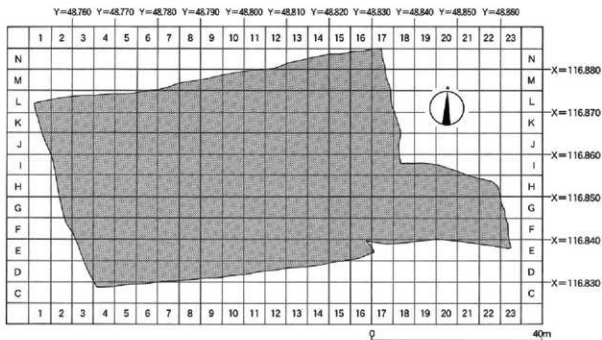
2 調査の経過

(1) 調査の経緯

本遺跡は、四国縦貫自動車道建設予定地の試掘調査を行い弥生時代と中世の遺物を採取した。試掘調査は平成7年5月9～19日、4,540㎡を対象面積とし重機によるトレンチ掘りで行った。その結果、安定した包含層の検出と多量の遺物を採取したため、本調査の必要性があるとの結論に達した。

本調査は3,700㎡の調査区を設定、平成8年4月1日から発掘調査を実施し、まず重機を用いて西延長部分の表土掘削から開始した。約5ヶ月で中央部までの調査が完了し、8月27日から東拡張部分の掘削に入った。調査期間中には、雨のため作業中止になる日があったが、全体としては順調に調査が進み平成8年10月31日までにすべての調査を終えることができた。

検出した遺構は竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝、炭窯、土坑、柱穴等、出土した遺物は石器、弥生土器、土師質土器、銅銭、銅製品、鉄製品、木製品等である。



第2図 グリッド配置図

(2) 発掘調査の方法

調査を始めるにあたっては、埋蔵文化財センター発掘調査統一基準にない、第IV系国土座標に沿って5×5mのメッシュを設定し、調査区南側より北側へアルファベットを、西側から東側へアラビア数字を配した。南北方向はA～N、東西方向は1～23があるため南西隅がA-1、北東隅がN-23というように南西隅を基準にその組み合わせで各グリッドを表示した。

なお整理の段階において、グリッド番号については発掘現場と同様のものを活用してきた。南北方向A・Bラインにおいては遺構に直接関係がないため掲載していない。

(3) 調査日誌抄

1996年

- 4月1日 発掘調査の準備にかかる。
- 5月2日 調査地点現地測量(請負業者)。
- 5月16日 機械掘削開始。
- 5月28日 調査区東側トレンチあける。
- 6月3日 西側延長部分重機掘削開始(400m)。
- 6月17日 遺構面直上まで包含層掘り下げ開始。
- 7月8日 遺構検出を始める。
- 7月16日 遺構内掘削を始める。
- 7月30日 平面図作成にかかる。



- 8月27日 東側拡張部分人力掘削開始。
- 9月2日 空撮準備。
- 9月6日 空撮(第1回 中世遺構面)。
- 10月2日 遺構面精査。
- 10月25日 空撮(第2回 弥生遺構面)。
- 10月31日 調査完了、現場撤収。

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

徳島県は四国東部に位置し、総面積は4,140km²、四国島の22%を占めている。四国4県では平均的な大きさだが全国的にみると、47都道府県中36位で決して大きな県とは言えない。しかも県面積の80%以上が山地であり平野の部分は段丘・扇状地を含めても2割ほどにすぎない。

県内の地形は大きく次の3域に分けることができる。1. 四国で最も広い流域面積をもつ吉野川の流路周辺。2. 吉野川北部讃岐山脈。3. 吉野川南部四国山地。それぞれが東西方向に併走している。これは中央構造線をはじめ南に位置する御荷鉢構造線、仏像構造線が県内を東西に走っているためと考えられる。構造線は岩石が破碎されて地質が弱くなっており、風雨に浸食されやすく川や谷になりやすく、反対に構造線と構造線の間の部分は、浸食から免れて高い山地として残る。この中央構造線に沿っている河川が吉野川であり、高い山地が狭義の四国山地、剣山地、海部山地である。また西部ほど標高が高いのは、地質時代第4紀に剣山を中心とした山地が隆起した結果だと考えられている。

水源を石鎚山(1,981m)東方の瓶ヶ森山(1,897m)に源を発する吉野川は急峻な四国山地を横切り北流し、池田町で90度向きを変え中央構造線に沿いほぼ東流、紀伊水道に注ぐ。その流域は四国4県にまたがり、幹線流路延長194km。流域面積は3,750km²に達し一級四国三郎ともよばれる大河である。上流域は年間平均降水量が3,000mmを超える多雨地域で台風常襲地域でもあり、南方洋上から暖かい湿った空気が四国山地に吹き込む形で記録的な集中豪雨が度々発生する地域となり、吉野川の基本高水のピーク流量は岩津地点で24,000m³と我が国最大級のものとなっている。また流路内人口約65万人を擁し、四国4県の社会・経済および文化の基盤をなしている。地形の特徴から幹線流路延長194kmのうち、水源から池田までの約116kmが上流部、池田から岩津までの約38kmが中流部、岩津から河口までの約40kmが下流部とされる。

吉水遺跡は徳島県北西部美馬郡美馬町に所在する。美馬町においても徳島県と同様、山地が占める割合が大きく63%である。美馬町字「吉水」は、町西中央部、讃岐山脈南麓に位置する。竜王山(1,059.9m)を最高峰とする讃岐山脈は、全体的に500～1,000mの定高性を有している。南北に狭く(10～15km)、東西は100kmに及び、山脈の南を中央構造線、北を江畑衝上・長尾衝上断層による急斜面で限られた地塁山地である。東西に一直線に延びる山脈の主脈は中央部・西部が高く、東にいくにしたがって高度を減じ鳴門海峡に没している。起伏量は四国山地に比べて小さく、早壮年期山地の山容を示し、これらの山々を水源とする溜谷の鍋倉谷川、中野谷川、高瀬谷川等はほぼ南北に流路をとる幼年谷で流域面積は小さい。また、地質は中世代白亜紀に海底に堆積した砂岩・泥岩などからなる和泉層群で岩質がもろく、雨水・河水によって浸食されやすい。そのため南麓には山脈から押し出された土砂が堆積して数多くの小規模な複合扇状地が発達しており、美馬町の平地も殆どがこの扇状地である。

本遺跡は吉野川中流域北岸、讃岐山脈より流れ出る中野谷川の西約500mの低位段丘上に立地する。標高115m前後で北は讃岐山脈の斜面、東と南は中野谷川が造り出した沖積扇状地や谷底平野及び崖麓である。西は低位段丘面が長く広がる。

2 歴史的環境

美馬町域では現在30数カ所の遺跡が確認されている。主に讃岐山脈南麓の扇状地先端部から段丘上にかけてである。旧石器・縄文時代の遺跡としては、最近の発掘調査により明らかにされた坊僧遺跡(東段地区)が上げられる。標高145m前後の段丘上で坊僧池の西に位置する。この遺跡では、石器の製作時に残る石屑が集中する地点が3ブロック検出され、うち2つのブロックが旧石器時代のものであり、遺物点数は1,138点を数える。主な石器としてはナイフ型石器18点をはじめ削器、掻器、角錐状石器、石核等が採取されている。縄文時代の1ブロックにおいては遺物点数122点で石鏃8点の他、剥片や砕片が採取された。石材はいずれもサヌカイトである。その他、弥生時代の遺物である柱状片刃石斧や太形始刃石斧も出土している。このように石器ブロックが複数検出されたのは県内では初めてのことであり、旧石器時代研究を進める上で重要な資料とされる。⁽¹⁾

縄文時代の遺跡としては野村谷川西の薬師遺跡があり、薬師地区で後期の屋外炉が検出され、芝坂地区では晩期の突帯土器を大量に出土した埋没谷が見つかり、段丘上位面の藪草周辺に縄文集落の存在が予想されている。また、吉水遺跡の1km余り東に位置する荒川遺跡においては、嫁坂谷川兩岸の急斜面に最大1.2mの厚さで膨大な量の縄文土器及び石器が堆積していた。主体は後期前葉であるが、中期の土器も多量に含む。しかし、その量にもかかわらず、台地上では当該期の遺構は殆どみられなかった。弥生時代の遺構は竪穴住居等が検出され、後期に属すると考えられている。⁽²⁾

古墳時代の遺跡については、吉水遺跡の東部から南部にかけて、古くから知られる多くの墳墓が存在し、貴重な資料とされる。東から概観すると、坊僧池の南約600mに位置する宗重古墳群がある。讃岐山脈南麓の段丘の先端部に築かれた古墳群で、昭和17年国史跡に指定された「段の塚穴」と、「真鍋塚」で構成される。段の塚穴は標高約70m、東に太鼓塚、西に棚塚の二基の円墳から構成され「段の塚穴古墳群」とも称され、「段の塚穴型石室」の由来となっている。古くから「家具の岩屋」と称され家具貸しの伝説で知られてきた。東の太鼓塚の墳丘規模は東西径約37m、南北33m、高さ10mである。石室は四国最大級の規模で南に開口しており、全長約13.1m、高さ4.25mの壮大な横穴式石室である。幅は玄門部で約1.3m、奥壁3.1mで玄室中央部が大きく広がりをもつ。まさに平面プランが太鼓塚の名にふさわしい馴染みの典型的な例である。石材は一部に和泉砂岩を併用しているものの、殆どが結晶片岩を用いている。少なくとも吉野川南岸から運び込んだものと考えられる。西の棚塚は太鼓塚の北西隣、墳丘掘間で27mの近距離に位置する。規模は直径約20m、高さ7mを測る。太鼓塚と同じく南に開口する石室を有し、全長約8.7m、高さ2.8mを測る。平面プランは羽子板状、幅は玄門部で約0.9m、奥壁1.9で奥壁幅が最大となり、太鼓塚よりかなり狭い。石材は基本的には結晶片岩を使用、部分的に和泉砂岩が補われている。棚塚はその名にあらわれているように、奥壁近くに石櫓を付設しているが、櫓は奥壁に接しておらず、強化を意図したものと考えられている。この2基の古墳の規模や出土遺物⁽³⁾から長期間追葬が行われていたことがわかり、被葬者達の権力の大きさを窺うことができる。⁽⁴⁾

真鍋塚は段の塚穴の西下の段丘状に位置している。封土はすべて流れてしまい、墳丘については不明であるが、横穴式石室が南に開口する。羨道部は破壊され1.3m程度しか残っていない。玄門部は幅44cmの立石で区画し、玄室の長さ約3.9m、幅2.3m、高さ2.3mである。棚塚とよく似た平面プランであり、石材は基本的に結晶片岩だが和泉砂岩との併用とも考えられている。

段の塚穴の南西約1.5kmに位置するのが郡里廃寺である。標高約70mの扇状地上にある白鳳時代から平安時代の寺院跡である。寺域は東西約94m、南北120mの長矩形で、創建時には4周を土塁で囲んでいた可能性があり、その後幅2m前後の石敷をめぐらせていたことが判明した。金堂跡では土壇が発見され、塔跡では、八角形の心柱痕、心柱には腐り止めの根巻石が配されていた。出土遺物は土師器・須恵器などの他、獸脚付盤、瓦類では篋書の戲画瓦や軒丸瓦・軒平瓦がある。⁽⁵⁾

郡里廃寺の南には寺院が並んでおり、その一つ願勝寺が古墳跡として知られる。付近には七人塚、姫塚、小塚などの多くの古墳が存在し、郡里廃寺周辺の古墳群中の一群「願勝寺古墳群」とも称されるべき様相を呈している。願勝寺一号墳は上部構造は破壊されているものの、封土は高さ約3m、直径7~8mの円墳で、横穴式石室である。石室の全長5.5m、幅は玄門部で1.0m、奥壁1.7mを測る。石材は大部分が砂岩である。注目されるのは、玄室中央に結晶片岩を用いた全長1.9mの箱式石棺を玄室に直交させて構築していることである。出土品は、耳環6点、玉類41点、小刀3点、須恵器の平瓶・椀・杯等で、遺存の副葬品だけでも豊富なものである。

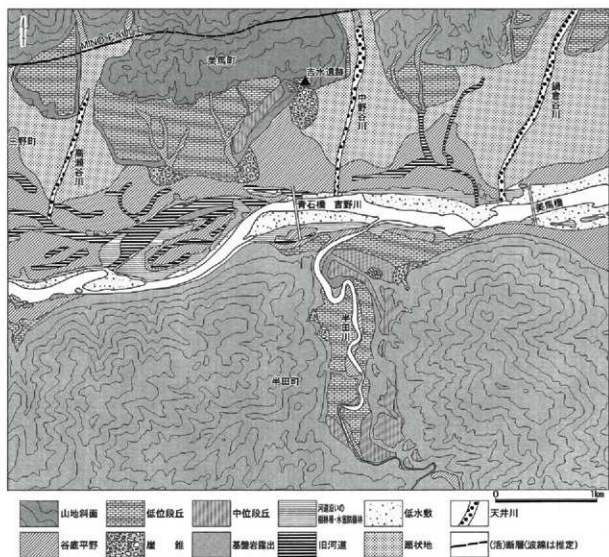
郡里廃寺の約2km西、中野谷川の東側に位置する荒川古墳群がある。荒川古墳、海原古墳、平野古墳の三基でうち二基が石棚を持っている。荒川古墳は低位段丘上南端にあり、径約15mの円墳で横穴式石室、南に開口する。石室は全長約8.6m、玄室長3.4m、幅2.6m、高さ2.9mを測る。結晶片岩の一枚岩を鏡石とし、棚を付設する石室である。海原古墳は荒川古墳の300m北、標高約83m、低位段丘上に位置し、直径15m程度の円墳とされる。段の塚穴型の石室を持つ後期古墳で、玄室平面プランは扇張形である。現存全長約8.4m、玄室は長さ4.36m、奥壁幅2.15m、最大幅2.25m、最大高2.8mを測る。玄室東側壁の上半部をまったく失った状況にもかかわらず、5枚の天井石は一枚の落石もなく互いにバランスを保っているということは、段の塚穴型石室の強固さ、石室構築技術の精巧さを示す一例であるとされている。石材は砂岩を主体として結晶片岩を併用し、床一面に砂岩の敷石が敷き詰められている。特徴は石棚を有すること、奥壁近くに高さ50cm程度の結晶片岩の仕切石が設けられていること、玄門部に扉石を持つこと等である。出土遺物は金環、玉類、人骨、須恵器、土師器等である。海原古墳の250m北側には、平野古墳がある。横穴式石室で南に開口、玄室は長さ約2.1m、幅1.9m、2.1mである。石材は天井以外は砂岩を使用、玄門部が狭く、壁面は砂岩を5段に積むのが特徴とされている。

以上、美馬町内の主に古墳と寺跡について略述してきたが、古墳は主として吉野川を見下ろす河岸段丘上の突端に築造されており、古墳時代の大規模な集落や水田は、吉野川沿いの沖積地に埋没していると考えられている。

古水遺跡はこうした歴史的環境のもとにある。

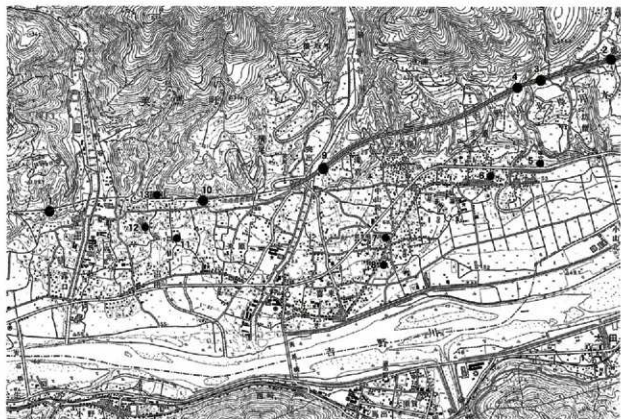
《脚注》

- (1) 東地区は坊僧遺跡4地区のうちの1つで、1995年度徳島県埋蔵文化財センターが調査した。現時点では整理作業が終了しており、平成13年度末報告書刊行予定である。
- (2) 荒川遺跡は1996年同センターが調査、平成16年度末報告書刊行予定である。
- (3) 太鼓塚古墳は1950年代に石室開口部脇に見つかった須恵器の一群、昭和35年(1960)に玄室内で見つかった鉄製品が出土遺物として残る。須恵器は6世紀後葉以降7世紀中葉までの各段階を含み、鉄製品には金銅装の馬具、他四国でも非常に希少な鍔金具が含まれる。欄塚の出土遺物は知られていない。(「徳島県の地名」より引用)



第3図 吉水遺跡周辺の地形分類図

- (4) 美馬町周辺には、段の塚穴と同じ方法で築造された古墳が数多く分布する。これを『段の塚穴型石室』と呼ぶ。太鼓張りまたは末広りの平面プランに天井石を斜めに持ち送り、いわゆる穹窿式天井を構成するという特徴を持つ。『段の塚穴型石室』の古墳の広がりから、一大勢力を想定する見解がある。しかし、現在のところ背景となる生産基盤などの面からも検討を加え、その勢力の存在について実証するには材料は乏しい。
- (5) 郡里廃寺は古くから「立光寺跡」と呼ばれ、古代寺院の寺跡とされてきた。昭和42、43年の調査で塔を東、金堂を西に配する法起寺式伽藍配置を有する県内最古級の白鳳時代の寺院跡であることが確認された。一説には長宗我部の兵火に罹り焼失したといわれるが、その後の郡里の寺院の興隆から考えると、遅くとも平安の中期頃には廃絶したものとして推定される。昭和51年国史跡として指定され所在地名をとり「郡里廃寺」と改められている。また、地名「郡里」は古代の美馬郡衙であったことに由来し官立寺院的要素が強いとされるが、在地豪族との関連や段の塚穴等の被葬者との関連も否定できない。
- 出土遺物の軒丸瓦は、有稜花端円形形式の八葉複弁蓮華文、鋸歯文縁で花弁端円形形式の十二葉単弁蓮華文など十数種類、軒平瓦は有顎式の重弧文と偏行唐草文・均整唐草文などである。

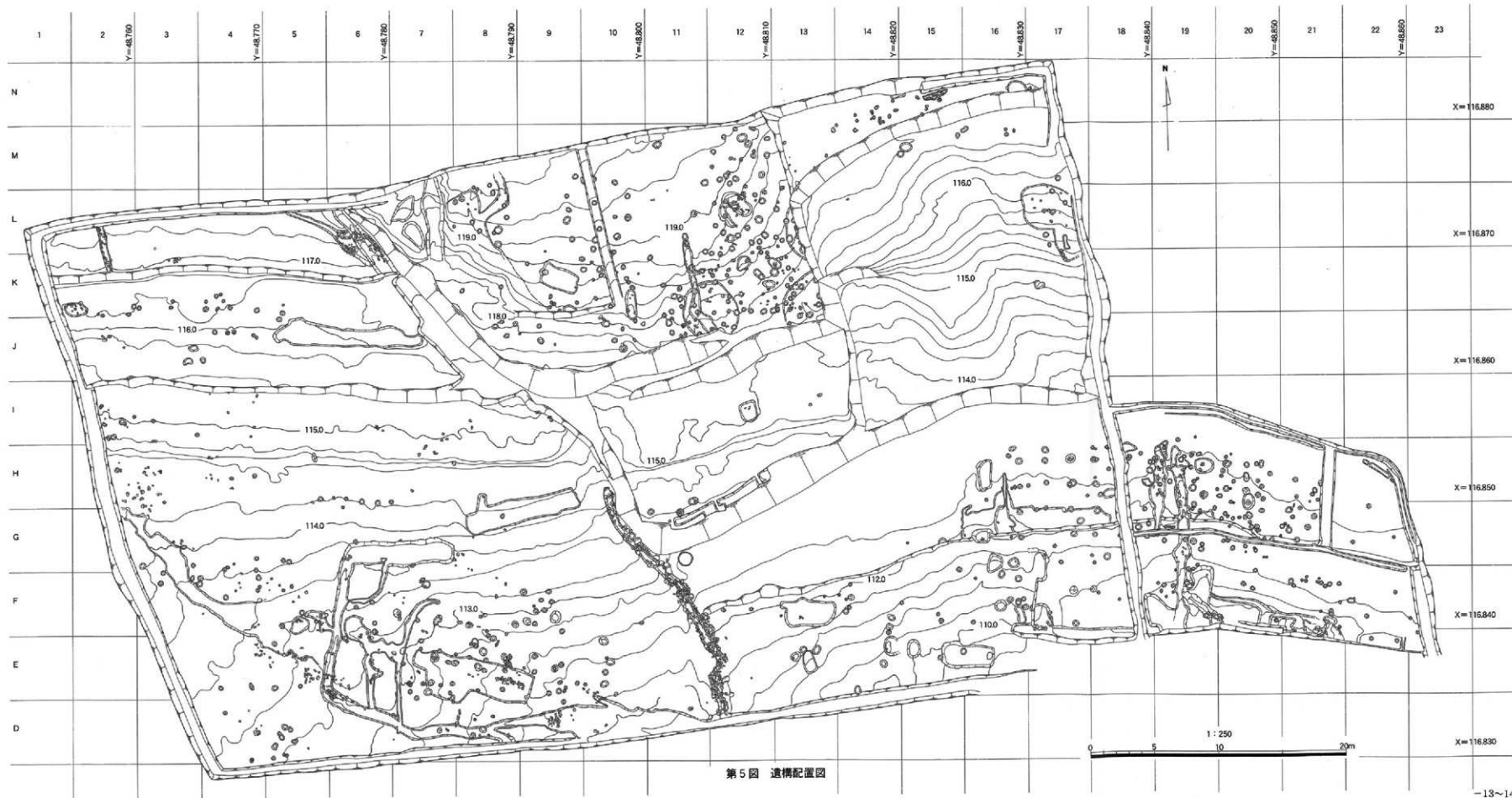


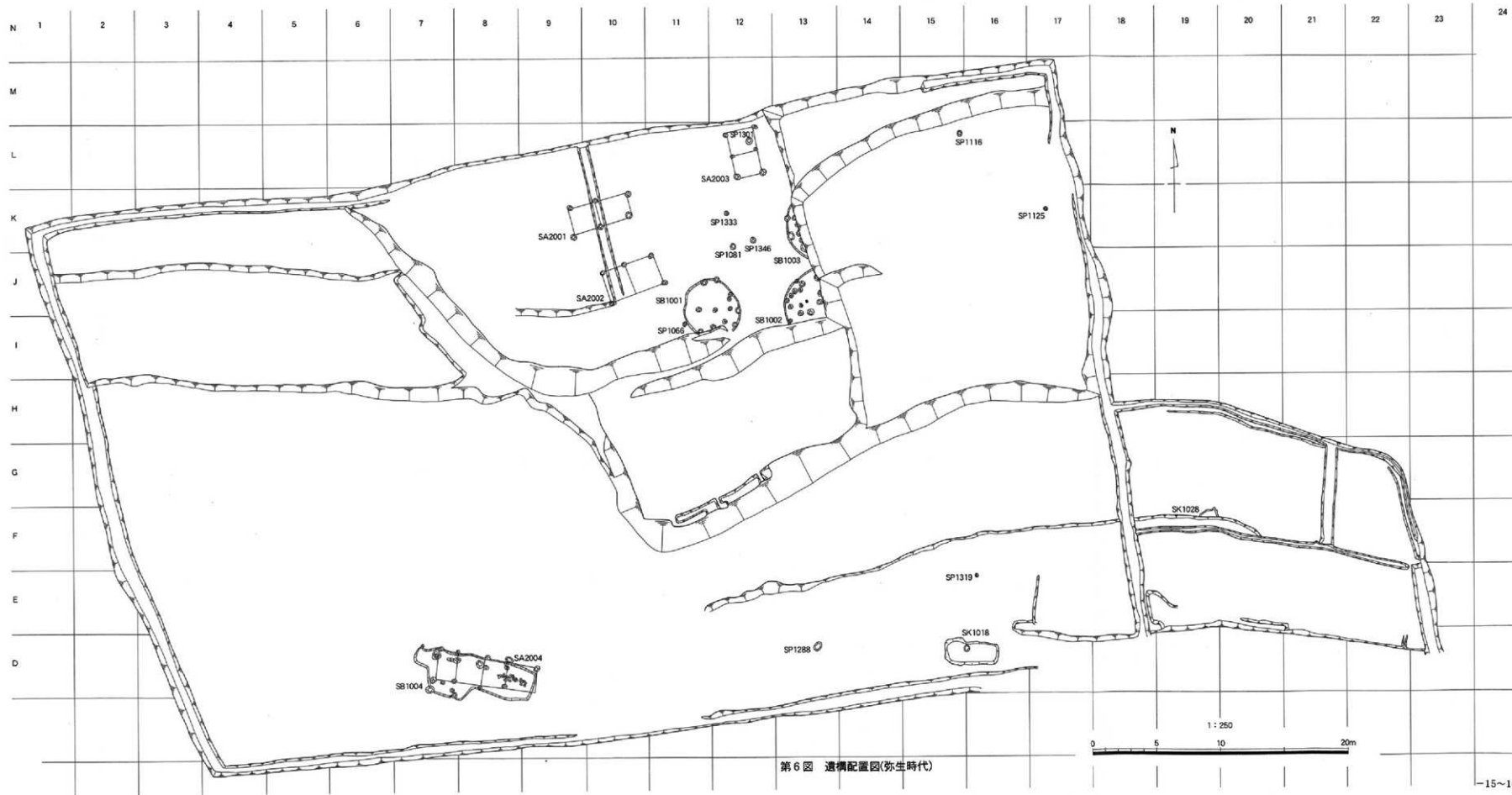
第4図 吉水遺跡周辺の遺跡分布図

- | | | | |
|---------|---------------|---------------|---------|
| 1 吉水遺跡 | 3 坊僧遺跡 (坊僧地区) | 4 坊僧遺跡 (東段地区) | 5 段の塚穴 |
| 2 薬師遺跡 | 7 郡里廃寺 | 8 願勝寺 | 9 滝ノ宮遺跡 |
| 6 真鍋塚 | 11 荒川古墳 | 12 海原古墳 | 13 平野古墳 |
| 10 荒川遺跡 | | | |

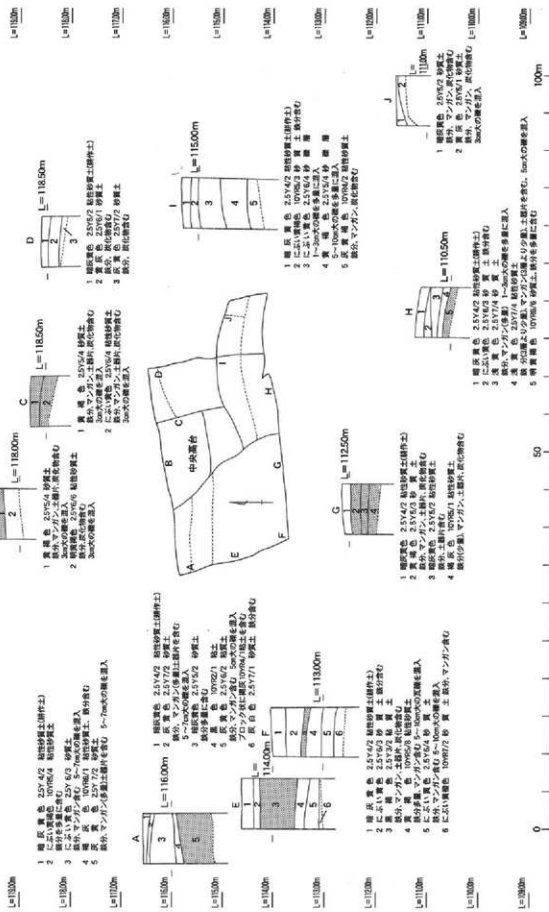
参考文献

- 自然の歴史シリーズ④徳島「自然の歴史」 奥村 清・村田 守・西村 宏・小澤 大成 共著、コロナ社 1998.
- 「吉野川百年史」 建設省四国地方建設局 徳島工事事務所、1993.
- 「川と人間 - 吉野川流域史 - 東 潮 著者代表、淡水者 1998.
- 「吉野川流域水害地形分類図⑧」 建設省四国地方建設局 徳島工事事務所、1995.
- 「美馬町史」 美馬町、1988.
- 徳島市民双書・19「徳島の遺跡散歩」 天羽 利夫・岡山真知子 著、徳島市立図書館 1985.
- 徳島県埋蔵文化財センター調査報告書第34集
「四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」 17
薬師遺跡・坊僧遺跡 徳島県埋蔵文化財センター他、2001.
- 「日本の古代遺跡 37 徳島」 菅原 康夫 著、保育社 1998.
- 「徳島県の地名」強度歴史大事典 日本歴史大系 三好昭一郎 監修・編集委員代表、平凡社 2000.
- 「徳島県の歴史」歴史シリーズ36 福井 好行 著、山川出版社 1982.





第6圖 遺構配置圖(弥生時代)



第7図 基本土層柱状図

Ⅲ 調査成果

1 基本層序

本遺跡の調査区は東西に延びるかたちで設定され、面積は3,700㎡である。調査区は北から南にかけては傾斜しているため、堆積作用よりも流失作用の方が激しかったと推定される。調査前は水田として利用されていたが、削平を受けたり客土を盛られている地点もある。調査区中央高台の東側は削平を受けており包含層は遺存していない。

弥生時代の遺物包含層は鉄分・マンガンを含む黄褐色2.5Y5/4砂質土、またはにぶい黄色2.5Y6/4粘性砂質土である。中世の遺物包含層は鉄分・マンガンを含む黄褐色～黒褐色系砂質土または粘性砂質土である。層圧は一定しておらず各地点において違いをみせる。

2 遺構と遺物

検出された遺構は総数552遺構である(第6図)。内訳は竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡10棟、溝17条、木炭焼成窯2基、土坑33基、柱穴483基、不明遺構3基である。弥生時代と中世の遺構が同一遺構面で混在する箇所について、時期の判明するものについては各時代の項目で概説すると共に遺構一覧表で略述した。(第2～10表)。

調査地は田地造成のために細かく区画された棚田で南が低い。調査前には少なくとも12区画されており、調査区北側中央部分の標高が一番高く118～119m前後で、東西30m×南北15mあり、南側との比高差は約2m、東西部分とは2～3mある。この区画を中央高台と呼び主に弥生時代の遺構が検出された。崩落等により一部削平を受けているものの遺構の密度は高く、竪穴住居跡3軒をはじめ溝、土坑、炭窯、柱穴等が検出されている。調査区西の北側上二段では掘立柱建物跡、溝、土坑、柱穴等が検出されているが時期の特定できる遺構、遺物は少ない。南側一段では溝5条を中心に掘立柱建物跡、土坑、柱穴等が検出されており、遺構の密度は高い。弥生と中世の遺構が混在する地点である。また中央南部から東部(拡張部)にかけては掘立柱建物跡3棟の他、溝、炭窯等中世の遺構が数多く並ぶ。

(1) 弥生時代

弥生時代の遺構としては竪穴住居跡4軒、掘立柱建物跡4棟、土坑1基、柱穴1基を掲載した。中央高台部分に殆どが集中するが、調査区南側より竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、柱穴が検出されそれぞれ弥生時代の遺物が出土した。

竪穴住居跡 SB (第8～13図)

4棟の竪穴住居跡が確認された。そのうち3棟は中央高台部分に集中しており、他の1棟は調査区南西部より検出された。中央高台部分の竪穴住居は弥生時代後期に属するものと考えられるが、崩落や田地造成のための削平があり遺構の遺存状態はよくなかった。そのため遺構上部は残されており深さは残

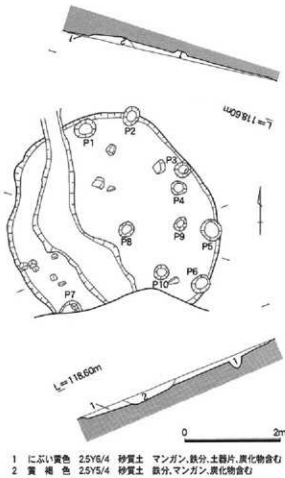
存部のみの計測のため浅く、正確な遺構の確認はできなかった。また、南西部の1棟は平面形が方形状のもので、他の3棟とは時期差があるものと考えられる。

竪穴住居跡 SB1001 (第8図)

中央高台部K・L-11・12グリッドで検出された住居跡である。規模は直径4.40m、深さが約16cm。埋土は1層にふい黄色砂質土である。平面形はほぼ円形と考えられる。遺構内中央部の西をSD1005によって切られ、南端は田地造成のための削平を受けているためすべてを検出することはできなかった。柱穴10基が確認され、遺構上部より石器3点と多数の弥生土器細片が出土した。図化できたのは石器3点と弥生土器1点である。

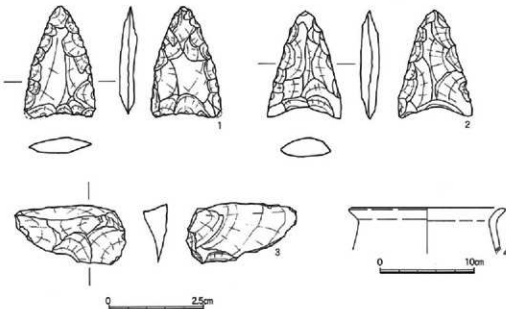
出土遺物 SB1001 (第9図)

1～3はサヌカイト製の石器で1・2は石鏃、3は剥片である。1・2は表裏面とも細かな押し彫りによる調整加工が施されており、凹基式と考えるが、1の抉りは浅く端部は僅かに欠損する。法量、出土レベルはほぼ同じで、側縁長2.9cm、幅1.9cm、厚さ0.5cm、重さ2.4g、出土レベルは117.934mを測る。4は弥生土器甕の口縁部である。緩やかに外反させ、端部は丸い。口径は16.4cm、調整は不明である。



- 1 にふい黄色 25Y6/4 砂質土 マンガン、鉄分、土器片、炭化物含む
2 黄褐色 25Y5/4 砂質土 鉄分、マンガン、炭化物含む

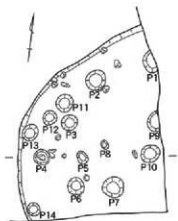
第8図 SB1001 実測図



第9図 SB1001 出土遺物実測図

竪穴住居跡 SB1002 (第10図)

中央高台部K・L-13グリッドで検出された住居跡であるが、1/4程度の残存で殆どが削平を受けている。規模は復元値で径約6.4m、深さは28cm、平面形は円形状と考えられる。埋土は1層黄褐色粘性砂質土である。遺構内より柱穴14基が検出され、石器1点が出土した。

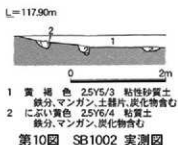


出土遺物 SB1002 (第11図)

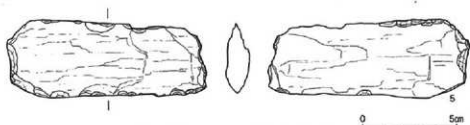
5は紅麻片岩製の打製石包丁であり、端部に弱い抉りをもつ。長さ10.3cm、幅4.1cm、厚さ1.2cm、重さ578gで一側縁の一部は両面から調整されている。完形品で縦断面形は凸レンズ状を呈する。

竪穴住居跡 SB1003 (第12図)

K・L-13グリッドで確認された住居跡である。中央高台部の東隅に位置するが、その一部を残すのみであり全体の形状は明らかではない。深さ8~26cmを測り、埋土は1層黄褐色粘性砂質土である。柱穴は7基確認され、5基は一直線上に並び、埋土はにぶい黄砂質土である。弥生土器の小片が出土したが、図化できない。



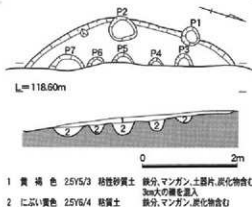
第10図 SB1002 実測図



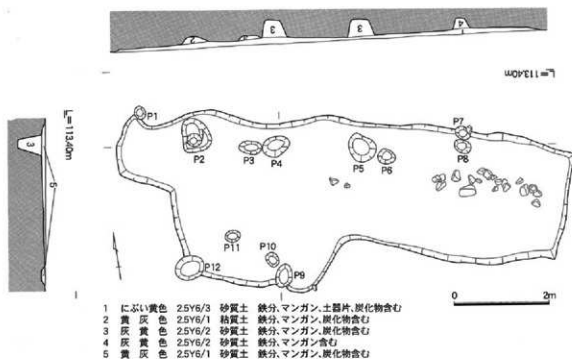
第11図 SB1002 出土遺物実測図

竪穴住居跡 SB1004 (第13図)

調査区南西D・E-7~9グリッドで検出された住居跡で、1~3号竪穴住居跡の30m程南西に位置する。規模は長軸9.68m、短軸2.48m、深さ12cm、平面プランは不整形形状を呈する。埋土は1層にぶい黄色砂質土である。南側縁の中央よりやや西に3.4×1.6mの突出部分が認められる。柱穴が12基検出されたが、この住居に付随するものかどうかは分からない。柱穴の埋土は黄灰または灰黄色砂質土、住居内より弥生土器甕の体部が出土しているが図化できなかった。SA2004と重複する。



第12図 SB1003 実測図



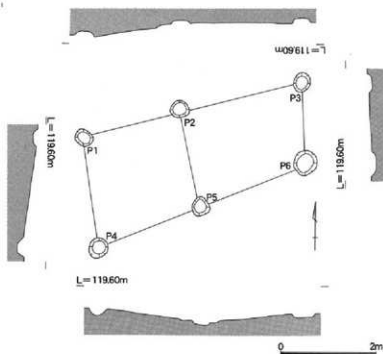
第13図 SB1004 実測図

掘立柱建物跡 SA (第14~19図)

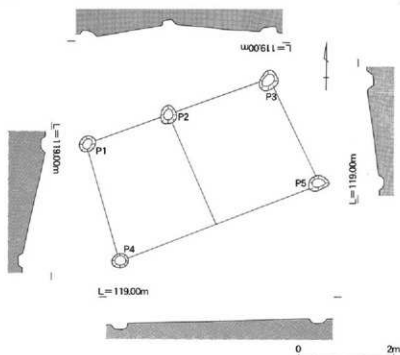
検出された掘立柱建物跡は4棟あり中央高台部分に3棟、調査区南西部より1棟検出されている。SA2004-P8より弥生土器甕が出土している。

掘立柱建物跡 SA2001 (第14図)

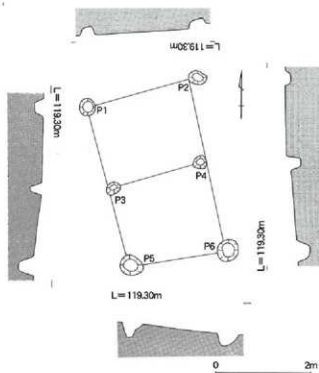
中央高台、L-9・10グリッドで検出した6基の柱穴により構成される。竪穴住居跡SB1001~1003の北西に位置し、南側のSA2002と近接する。梁間1間(2.2m)×桁行2間(4.7m)で棟方向はN-84°-E、等高線に平行である。柱間寸法は、梁間1.8~2.2m、桁間2.0m~2.4mを測る。柱穴は平面不整形円形状を呈し、径39~54cmを測る。埋土は1層にぶい黄色砂質土で、柱痕をとどめるものはない。



第14図 SA2001 実測図



第15図 SA2002 実測図



第16図 SA2003 実測図

掘立柱建物跡 SA2002 (第15図)

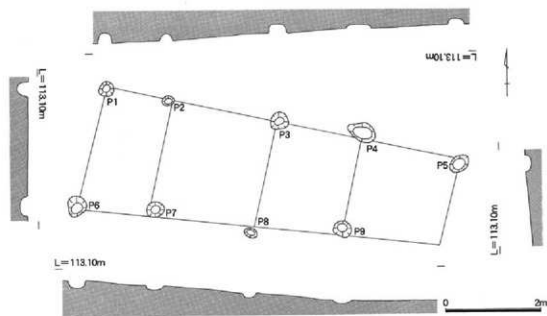
中央高台、K-10・11グリッドで検出した5基の柱穴により構成されるが、P2に対峙するピットは検出できなかった。竪穴住居跡SB1001の北西隣に位置し、北側にはSA2001が近接する。梁間1間(2.5m)×桁行2間(4.3m)で棟方向N-68°-E、等高線にはほぼ平行である。柱間寸法は、梁間2.4~2.6m、桁間1.8m~2.2mを測る。柱穴は不整円形状を呈し、径34~46cmを測る。埋土は1層にぶい黄色砂質土で、柱痕をとどめるものはない。

掘立柱建物跡 SA2003 (第16図)

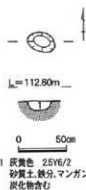
中央高台、M-12グリッドで検出した6基の柱穴により構成される。1~3号竪穴住居の北側に位置し、梁間1間(2.2m)、桁行2間(3.6m)で棟方向N-13°-Wである。柱間寸法は、梁間1.9~2.3m、桁間1.6m~1.9mを測る。柱穴は不整円形状を呈し、径30~49cmを測る。埋土は1層灰黄色砂質土で、柱痕をとどめるものはない。

掘立柱建物跡 SA2004 (第17図)

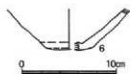
調査区の南西部、D・E-7~9グリッドで検出した9基の柱穴により構成されるが、P5に対峙するピットは確認できなかった。竪穴住居痕SB1004と重なって検出されており、レベルに大きな違いが無いため前後関係は明らかにできない。梁間1間(2.3m)、桁行4間(7.7m)で棟方向N-75°-Wである。柱間寸法は、梁間2.0~2.3m、桁間1.4m~2.2mを測る。柱穴は平面不整円形状を呈し、径26~63cmを測る。埋土は1層にぶい黄色砂質土で、柱痕をとどめるものはない。柱穴P8から弥生土器が出土している。



第17図 SA2004 実測図



第18図 SA2004-P8 実測図



第19図 SA2004-P8出土遺物実測図

柱穴と出土遺物

SA2004-P8 (第18-19図)

長軸30cm、短軸21cm、深さ8cmを測り、平面楕円形状を呈する。覆土は1層灰黄色粘質土である。6は弥生土器甕又は壺の底部で、底径6.4cm、にぶい橙色を呈す。

小片で摩滅しており調整は不明である。

土坑 SK1018 (第20図)

調査区南、中央よりやや東寄りE-15・16グリッドで検出した。規模は長軸4.1m、短軸1.7m、深さ0.1mを測り、平面プランは隅丸長方形で、全体に緩やかな落ち込みを見せる。埋土は1層灰黄色砂質土、覆土中より弥生土器1点が出土している。

出土遺物 SK1018 (第21図)

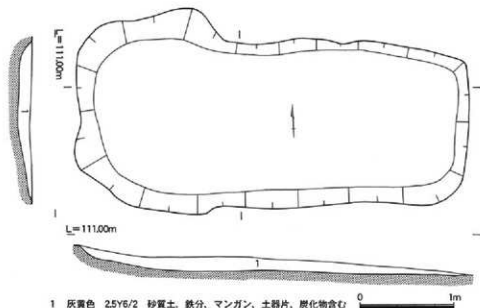
7は弥生土器甕の口縁部である。端部は方形状で、外面にタタキ目を口縁部近くまで残している。

土坑 SK1028 (第22図)

調査区南東部、G-19グリッドで検出した。南側を溝により削られているため全体の形状を明らかにすることはできない。残存する規模は短軸1.6m、深さ0.1cmで、断面形態は船底状を呈する。埋土は1層暗灰黄色砂質土、覆土中より弥生土器甕が1点出土している。

出土遺物 SK1028 (第23図)

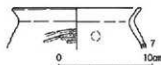
8は弥生土器甕の底部である。薄壁でやや大きく外方に開いている。摩滅のため調整は不明である。



1 灰黄色 2.5Y6/2 砂質土、鉄分、マンガン、土器片、炭化物含む

0 1m

第20図 SK1018 実測図

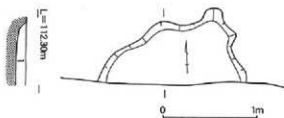


第21図

SK1018 出土遺物実測図



L=112.60m



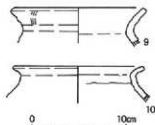
1 端灰黄色 2.5Y6/2 砂質土、鉄分、マンガン、炭化物、土器片含む

第22図 SK1028 実測図



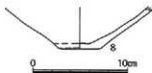
1 にぶい黄色 2.5Y6/4 砂質土

第24図 SP1288 実測図



第25図

SP1288 出土遺物実測図



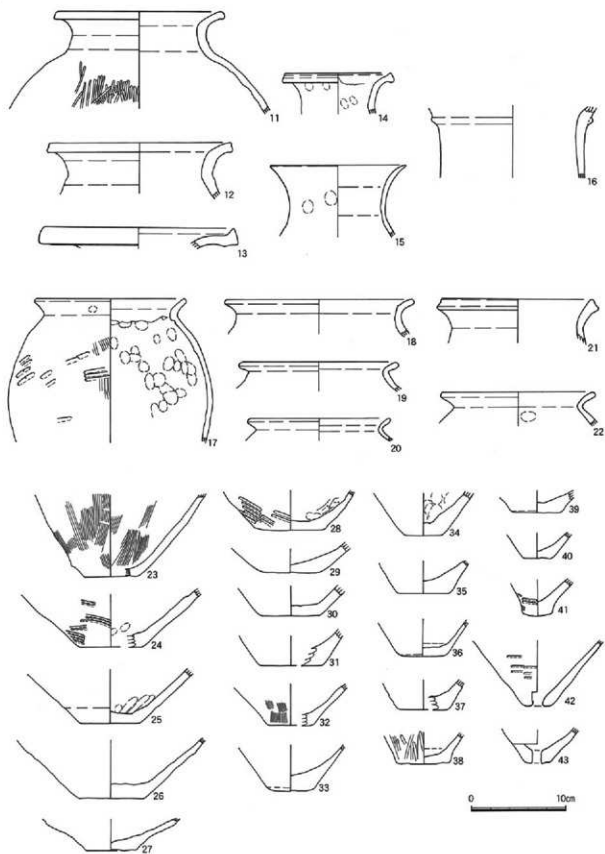
第23図 SK1028 出土遺物実測図

柱穴 SP1288 (第24図)

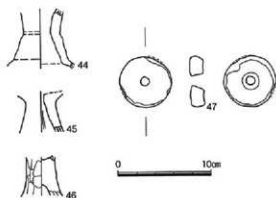
調査区南側中央部、E-13グリッドで検出した。長軸74cm、短軸56cm、深さ16cmで緩やかに落ち込む。埋土は1層にぶい黄色砂質土、覆土中より弥生土器製の小片が4点出土している。

出土遺物 SP1288 (第25図)

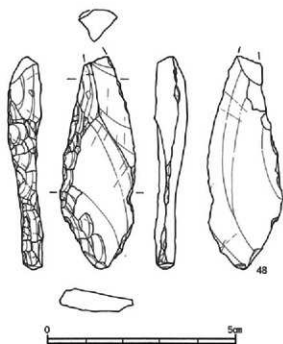
9・10は弥生土器製の口縁部である。端部は方形、10の器壁は粗く口縁部を短く外反させる。



第26图 包含层出土文物实测图(1)



第27図 包含層出土遺物実測図(2)



第28図 包含層出土石器実測図(1)

(2) 包含層出土遺物①

弥生土器 11~47は弥生土器である。

甕 11~16は甕の口縁部、頸部である。11は頸部を僅かに内傾させ、口縁部外反、端部を方形におさめる。体部のタテヘラミガキが顕著である。13は口縁部を大きく外反し端部上端をつまみあげ、端面を方形に仕上げている。14は口縁端部の上下を僅かに拡張し2条の擬凹線を施す。15は尖った端部をもつ。16は頸部上位に断面三角形の突帯を張りつける。

甕 17~22は甕の口縁部、体部である。17は口縁部と体部との境を肥厚させ内面にユビオサエと接合痕、外面にタタキとタテハケの痕跡が見られる。20は薄壁の口縁部で胎土中に角閃石を含む。

紡錘車 47は紡錘車で0.9~1.3cmの孔をもつ。

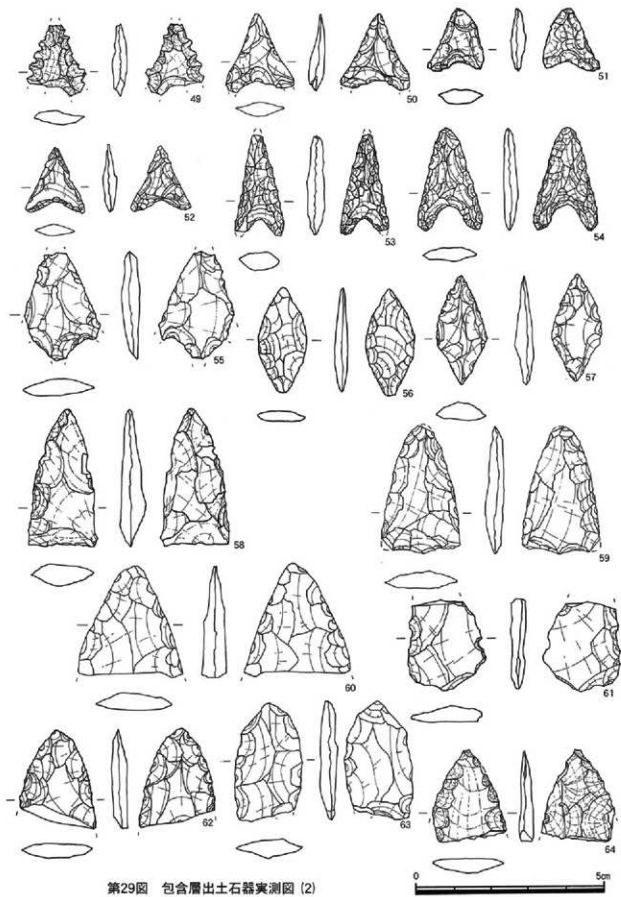
底部 23~43は弥生土器甕、甕、鉢の底部と考える。タテハケの痕跡を残すもの 23・32、外面にタタキの痕跡を残すもの 24・28・41・42、ヘラミガキを施すもの 38、内面にユビオサエを施すもの 24・28・34、ユビナデを施すもの等がある。42・43は甕で径10mmの孔をもつ。44~46は高杯の脚部である。

石器

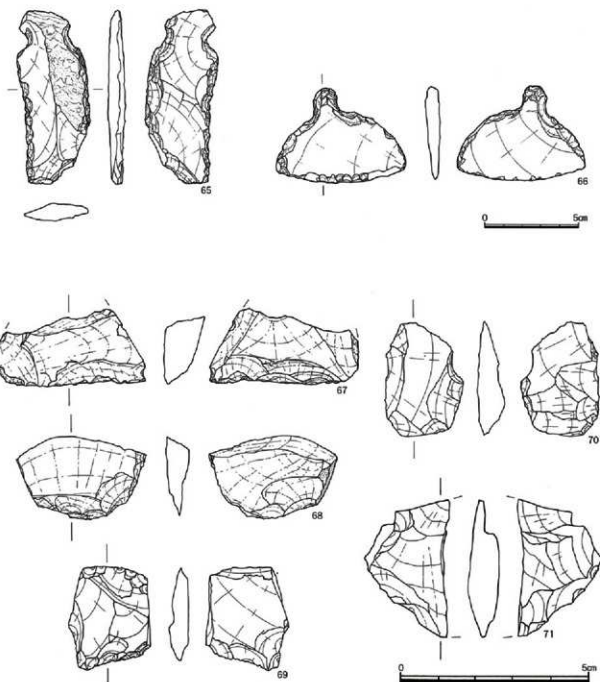
包含層から出土した石器は旧石器~弥生時代と幅の広いものであるが、出土数が僅かで出土層の違いが見られないためまとめて掲載した。

48はサヌカイト製のナイフ形石器で先端部を欠損する。基部片縁に細かい調整が見られる。

49~64はサヌカイト製の打製石鏃である。凹基式、凸基式、平基式がある。49~55は凹基式で49~54は無茎、55は有茎である。凹基の形状は全体に深く52・53はV字状、他はU字状である。49は先端部と基部、また一側辺の一部を欠損しているが、側辺は鋸歯状に細かく調整加工されている。50は全面に突帯調整されている。基部を欠損し、側辺は弱い内彎弧をなす。51の逆刺は僅かに左右非対称である。

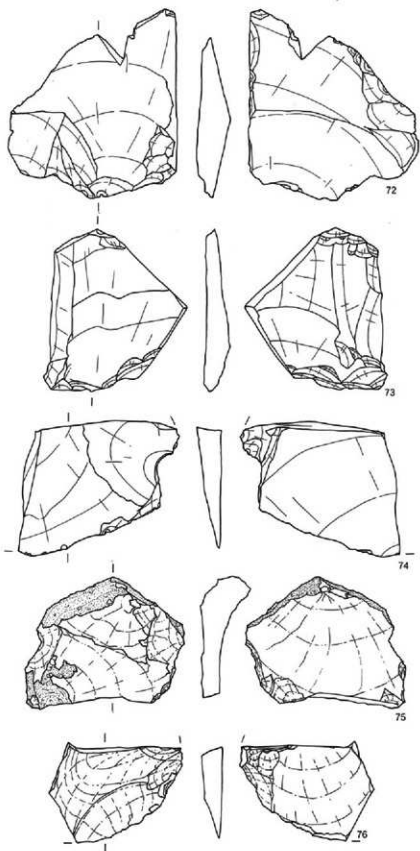


第29图 包含層出土石器実測图(2)

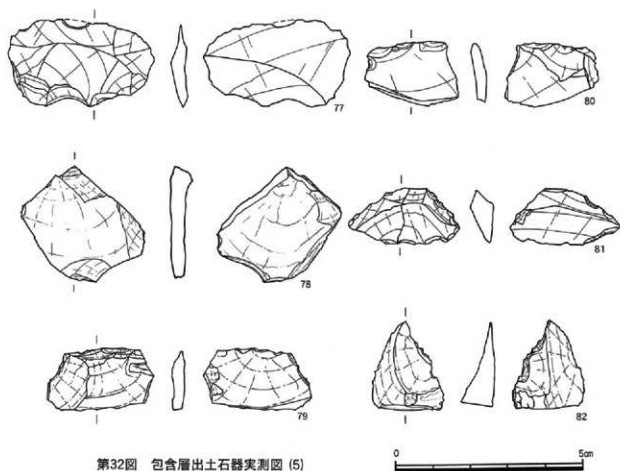


第30図 包含層出土石器実測図(3)

52・53は基部がV字状で細かい調整が見られ、直線的な側辺をもつ。53は先端部と逆刺の一方に欠損部をもつが、表裏面とも縁辺には細かな調整加工が施されている。側辺は直線的に延びる。54の基部は大きく抉られておりU字状のくぼみになっている。両側面、側辺とも調整は細かい。55は有茎式と考えるが、先端部と両逆刺、茎も欠損しておりその形状は明らかにできない。弱い挟りに茎をもつものとする。56・57は凸基無茎式の石鏃である。56は有茎式とも考えられるが基が弱く、凸基の形状は丸い。57の凸基は尖らせ、最大幅は全長の中央よりやや基端にかたよる。58・59は平基式の石鏃である。側辺の形状は弱い外彎弧をえがく。側辺部と基部に両面から細かい調整が見られ、その幅は基端部において



第31图 包含層出土石器実測図(4)



第32図 包含層出土石器実測図 (5)

もっとも広い。60～64も石礫やその未製品と考えるが先端部や基部欠損のため明らかにできない。

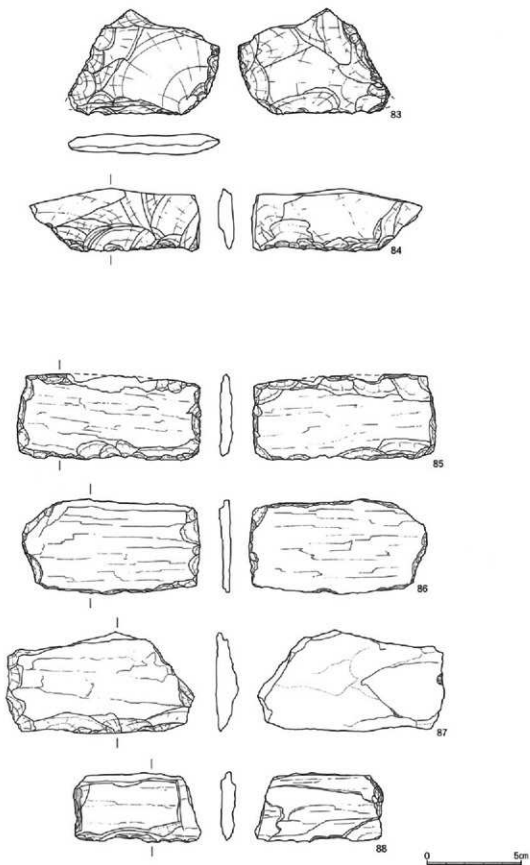
65・66はサヌカイト製の石匙で65は縦型、66は横型である。65はやや幅広で最大3.6cm、先端は切られたように直線的である。側辺及び先端を両面調整し刃部を作り出しており、一部に自然面を残す。つまみ部も大きく最大幅2.6cmと大きい。66はサヌカイト製の横型石匙である。刃部には新しい剥離があり調整は不明部分が多いが、つまみ部分には表裏面とも細かな調整加工が施されている。

67～71は楔形石器である。67・69は下辺に両面より細かい調整を加え、刃部を作り出す。他の刃部の調整は弱く、両端を折断したものが欠損したものか定かではない。

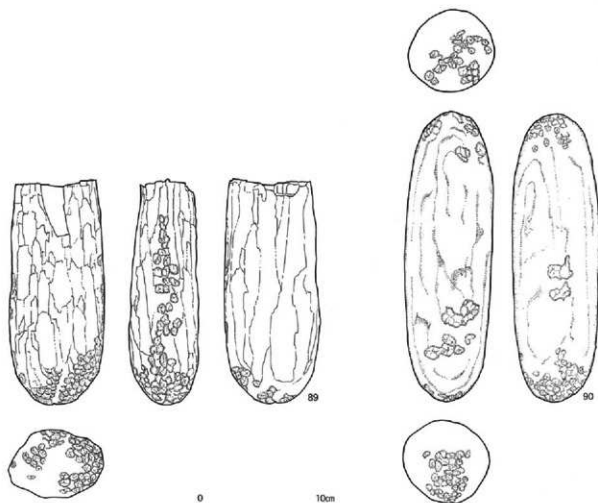
72～82は剥片である。72は石包丁とも考えたが細かい調整はみられないため剥片として捕らえた。74は両面共に主要剥離面がある。75は自然面を多く残す。77は背面に主要剥離面を残す。78は自然面を一侧辺に残し、主要剥離面が大きい。80は一侧縁に調整が見られる。81は一侧縁を両面より調整する。82はチャート製の剥片である。

83・84はサヌカイト製のスクレイパーである。三辺に刃部を作り出し、末端部欠損する。84は直線上の刃部を作り出し、両面から調整を加える。

85～88は石包丁である。85は扁平な自然礫を素材とした石包丁である。86は薄手で幅広の剥片を素材とし、直線的に刃部を作り出す。87は結晶片岩製の石包丁である。一侧縁に片面より刃部を作り出す。88は紅礫片岩製の石包丁であり、一端部と刃部に弱い挟りをもつ。刃部は主に片面から調整されている。



第33圖 包含層出土石器実測圖(6)



第34図 包含層出土石器実測図 (7)

89・90は結晶片岩を素材とした石棒である。89は長さ18.8cm、最大径7.6cmを測り先端部分と一側縁部に敲打痕がある。90は長さ22.9cm、最大径6.8cmを測り両先端部分に敲打痕が見られる。

91は敲打痕や擦痕は無い。台石として使用されたものと考えられる。石材は結晶片岩である。

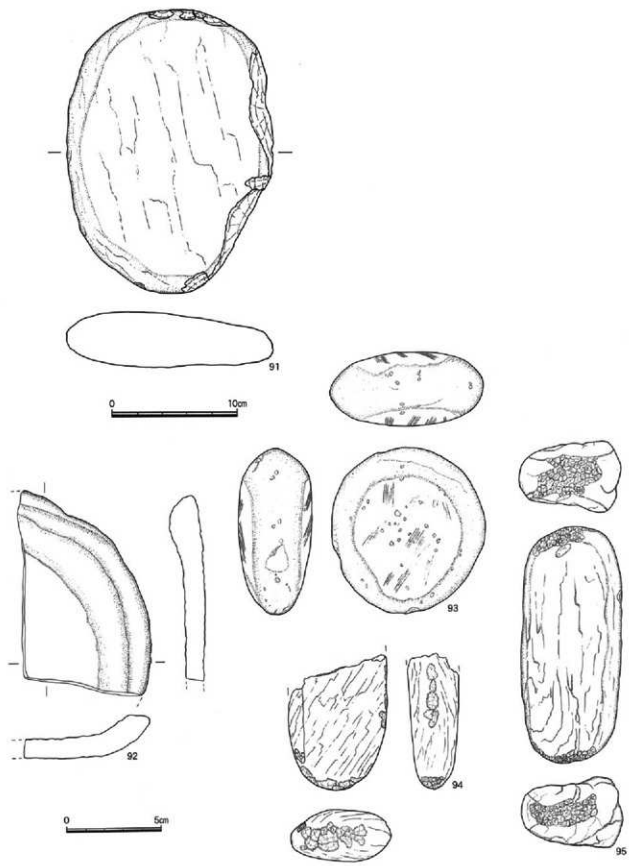
92は扁平な砂岩製の石臼である。

93は長さ8.7cm、幅8.0cm、厚さ3.9cmの扁平な結晶片岩製の磨石で、表面は滑らかである。敲打痕を認めるが判然としない。

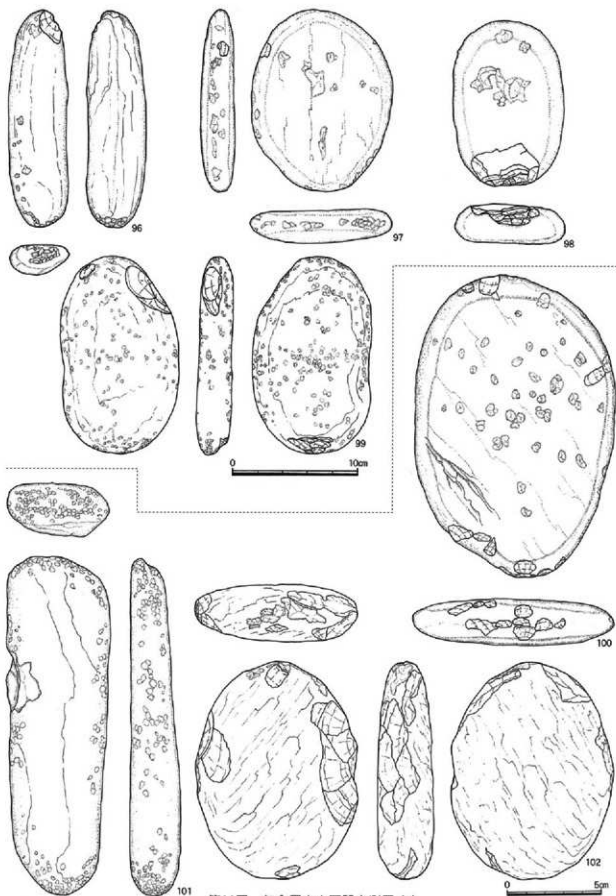
94・95は敲石である。結晶片岩を素材とする。94は片側縁と先端部に敲打痕を残す。95は上下先端部に敲打痕が多く認められる。扁平な自然礫を使用する。

96～102は加工痕は認められるものの判然としない。

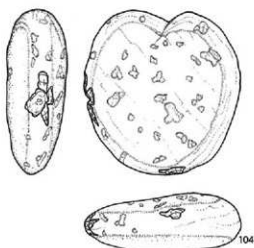
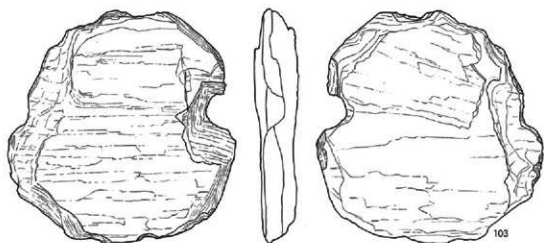
103～107は石錘として使用されたと考えられる。103は扁平な大型の自然礫で端部2ヶ所に挟りが見られる。



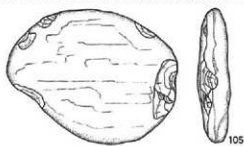
第35图 包含層出土石器実測図(8)



第36图 包含層出土石器実測図(9)

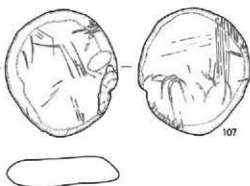


0 10cm



106

105



107

0 5cm

第37图 包含層出土石器実測図 (10)



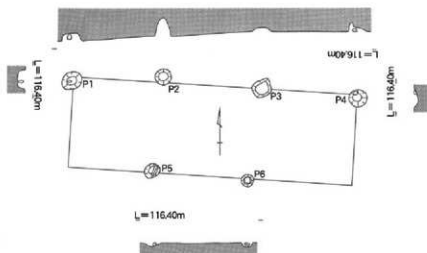
第38図 遺構配置図(中世)

(3) 中 世

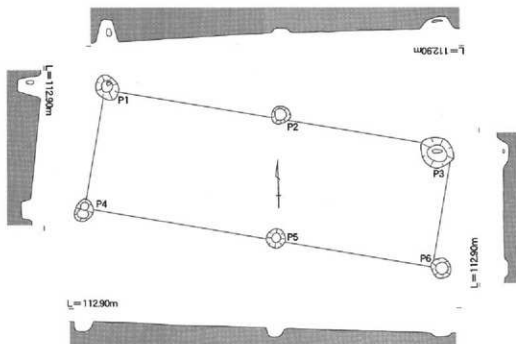
中世の遺構として掘立柱建物跡6棟、溝9条、土坑6基、炭窯2基、不明遺構3基、柱穴37基を掲載した。
掘立柱建物跡 SA (第39～143図)

掘立柱建物跡 SA1001 (第39図)

調査区北西部、J・K-4・5で検出した6基の柱穴により構成されるが、P1・P4に対峙するビットが検出できなかった。梁間1間(1.9m)、桁行3間(6.0m)、面積11.6㎡で棟方向N-87°-W、等高線に平行である。柱間寸法は、梁間1.9m、桁行1.8m～2.1mを測る。柱穴は平面不整形円形状を呈し、径39～54cmを測る。埋土は黄灰色砂質土で、柱根をとどめるものはない。



第39図 SA1001 実測図 0 2m



第40図 SA1002 実測図 0 2m



L=113.00m



1 灰黄色 25Y8/2
砂質土、鉄分、マンガ、
灰化物含む

第41回 SA1002-P1 実測図



L=113.30m

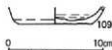


1 黄灰色 25Y6/1
砂質土、鉄分、マンガ、
灰化物含む

第43回 SA1002-P5 実測図



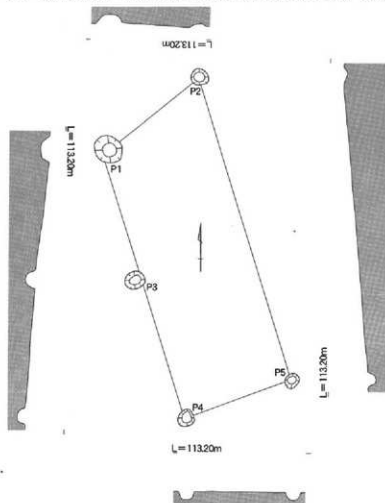
第42回 SA1002-P1 出土遺物実測図



第44回 SA1002-P5 出土遺物実測図

掘立柱建物跡 SA1002 (第40図)

調査区南、E・F-8~10グリッドで検出した6基の柱穴により構成される。SA1003と重複する。梁間1間(2.6m)、桁行2間(7.5m)、面積19.3㎡で棟方向N-81°-Wである。柱間寸法は、梁間2.4~2.6m、桁行3.6~4.0mを測る。柱穴は平面楕円又は不整形円形状を呈し、径38~76cmを測る。埋土は灰黄または黄灰色で、柱根をとどめるものはない。P1・P5より土師質土器杯が出土している。



第45回 SA1003 実測図

各柱穴と出土遺物

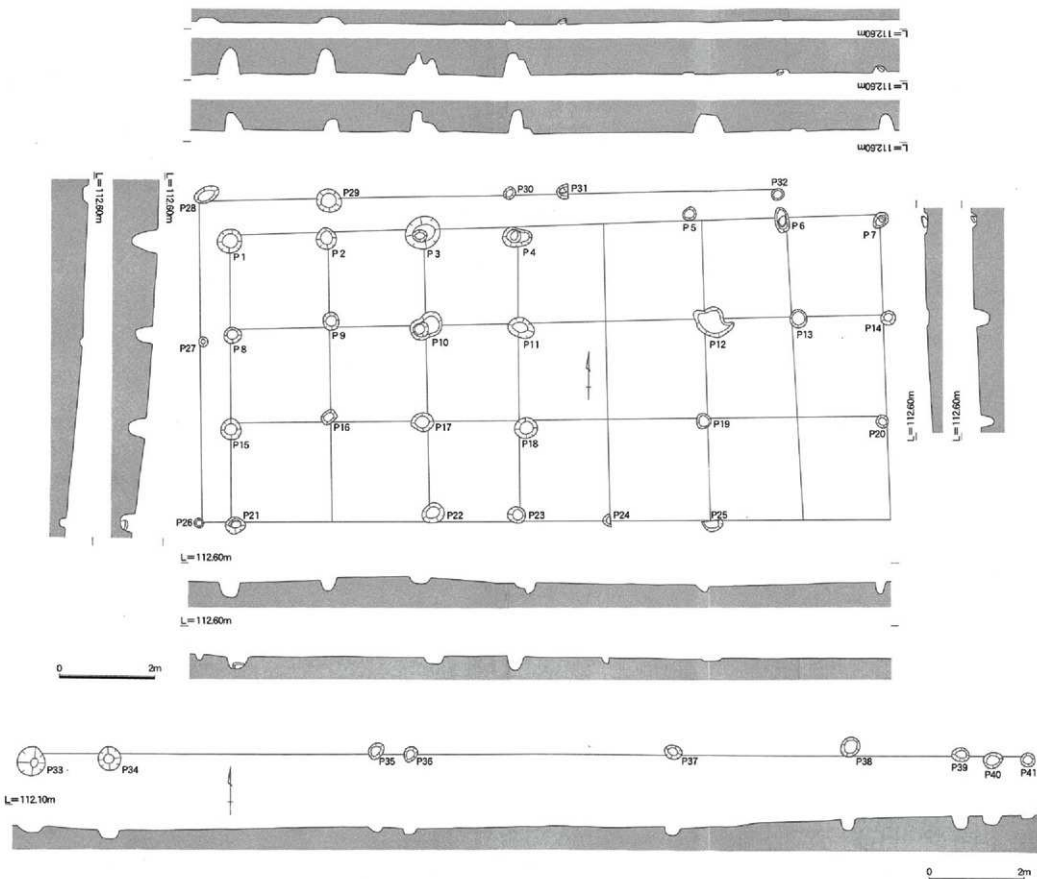
SA1002-P1 (第41・42図)

長軸56cm、短軸45cm、深さ45cmを測り、平面不整形円形を呈する。覆土は1層灰黄色砂質土である。108は土師質土器杯である。外面稜多い。SA1002-P5 (第43・44図)

長軸42cm、短軸39cm、深さ18cmを測り平面円形状を呈する。覆土は1層黄灰色砂質土である。109は土師質土器杯である。底部内面に凹凸が認められる。

掘立柱建物跡 SA1003 (第45図)

調査区南、E・F-9グリッドで検出した5基の柱穴により構成されるが、P3に対峙するピットは検出できなかった。SA1002と重複する。梁間1間(2.0m)、桁行2間(6.3m)、面積15.2㎡で棟方向N-17°-W、柱間寸法は梁間2.4m、桁行2.8m~3.2mを測



第46図 SA1004 実測図

る。柱穴は平面不整形形状を呈し、径27～65cmを測る。埋土は灰黄色砂質土で、柱根をとどめるものはない。

掘立柱建物跡 SA1004 (第46図)

調査区南東、G・H-16～19グリッドで検出した32基の柱穴により構成される建物跡であるが、田地造成等のため削平されており7基のピットは検出できていない。東側の住居SA1005と重複し、P26～32は軒部分と考える。梁間3間(6.3m)、桁行7間(14.0m)、面積87.9㎡で棟方向N-90° -W等高線に平行である。柱間寸法は、梁間2.0～2.2m、桁行1.8m～2.0mを測る。柱穴は平面楕円形又は不整形形状を呈する。軒部分を除き、重複した柱穴もあると考えられるため径は29～90 とや幅がある。埋土は1～2層、黄灰、暗黄灰、灰色で柱根をとどめる柱穴が2基確認できた。柱穴内より土師質土器の皿、須恵器片、瓦、鉄製品、青磁碗等が出土している。

各柱穴と出土遺物

SA1004-P2 (第47・48図)

長軸47cm、短軸42cm、深さ50cmを測り、平面円形状を呈する。覆土は1層黄灰色砂質土である。110は土師質土器皿で口径8.6cm、底径6.2cm、器高1.7cm、底部に回転ヘラ切り痕を残す。111・112は鉄製品で111は鉄釘と考えるが、112の器種は不明である。他に須恵器の小片1点が出土したが図化できない。

SA1004-P3 (第49・50図)

長軸78cm、短軸68cm、深さ46cmを測り、平面円形状を呈する。覆土は2層暗灰黄色砂質土・灰黄色砂質土である。113は土師質土器皿で底径4.7cm、切り離し手法は糸切りと考えるが判然としない。114は銅製品である。器種は不明、他に平瓦と土師質土器の小片12点が出土したが図化できなかった。

SA1004-P4 (第51・52図)

長軸60cm、短軸36cm、深さ56cmを測り、平面不整形楕円形を呈する。覆土は2層黄灰粘質土・暗黄灰色粘質土である。径20cmの柱痕が底面西隅より検出された。115は丸瓦の端部である。他に土師質土器、平瓦、陶器等が出土したがすべて小片であり図化できなかった。

SA1004-P7 (第53・54図)

長軸38cm、短軸29cm、深さ15cmを測り、平面不整形楕円形を呈する。覆土は1層黄灰色砂質土である。116は横幅10.8cmの丸瓦玉縁部で色調は灰白色、裏面に11条/cmの布目と縦皺痕を残している。

SA1004-P10 (第55・56図)

長軸72cm、短軸44cm、深さ44cmを測り、平面不整形楕円形を呈する。覆土は1層黄灰色粘質土である。117は横幅11.9cmの丸瓦玉縁部で色調は灰色である。裏面に布目痕を残すが判然としない。他、土師質土器と陶器の小片が5点出土したが図化できなかった。

SA1004-P14 (第57図)

長軸32cm、短軸30cm、深さ52cmを測り、平面円形状を呈する。覆土は1層灰色砂質土である。径9cmの柱痕が底面西隅より検出された。他に炭化物と土師質土器の小片1点が出土したが図化できなかった。

SA1004-P15 (第58・59図)

長軸46cm、短軸42cm、深さ30cmを測り、平面円形状を呈する。覆土は1層暗灰黄色砂質土である。118は丸瓦の玉縁部で色調は灰白色、裏面に13条/cmの布目と縦皺痕を残している。他に土師質土器の小片4点が出土したが図化できなかった。

SA1004-P16 (第60・61図)

長軸36cm、短軸26cm、深さ26cmを測り、平面不整形形状を呈する。覆土は1層暗灰黄色砂質土である。119は須恵器の把手であるが器種はわからない。



L=112.60m



0 50cm

1 黄灰色 2.5Y5/1
砂質土、鉄分、マンガ
ン、炭化物含む



L=112.60m



0 50cm

1 暗灰黄色 2.5Y5/2 砂質土、鉄分、
マンガ、炭化物含む
木柱が残存
2 灰黄色 2.5Y6/2 砂質土、鉄分、
マンガ、炭化物含む



L=112.60m



0 50cm

1 黄灰色 2.5Y5/1 粘質土、鉄分、
マンガ、炭化物含む
木柱が残存
2 暗灰黄色 2.5Y5/2 粘質土、鉄分、
マンガ、炭化物含む



L=112.60m



0 50cm

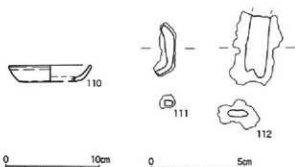
1 黄灰色 2.5Y5/1 砂質土、鉄分、
マンガ、炭化物、瓦片含む

第47図 SA1004-P2 実測図

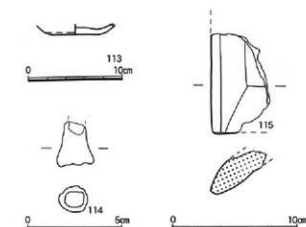
第49図 SA1004-P3 実測図

第51図 SA1004-P4 実測図

第53図 SA1004-P7 実測図

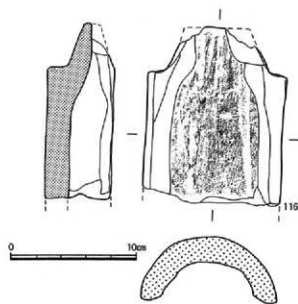


第48図 SA1004-P2 出土遺物実測図

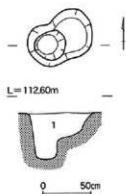


第50図
SA1004-P3 出土遺物実測図

第52図
SA1004-P4 出土遺物実測図

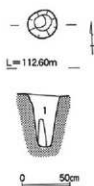


第54図 SA1004-P7 出土遺物実測図



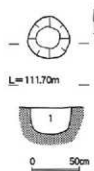
1 黄灰色 2.5Y5/1 粘質土、鉄分、マンガン、炭化物、瓦片含む

第55図 SA1004-P10 実測図



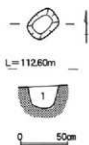
1 黄灰色 2.5Y5/1 砂質土、鉄分、マンガン、炭化物、土粒片含む
木柱残存

第57図 SA1004-P14 実測図



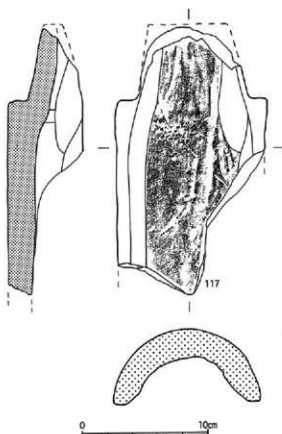
1 暗灰黄色 2.5Y5/2 砂質土、鉄分、マンガン、炭化物含む

第58図 SA1004-P15 実測図

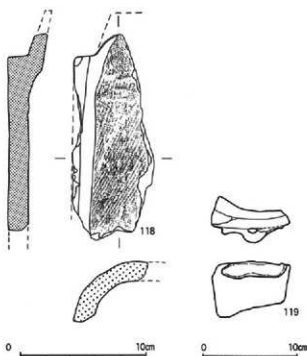


1 暗灰黄色 2.5Y5/2 砂質土、鉄分、マンガン、炭化物、瓦片含む

第60図 SA1004-P16 実測図

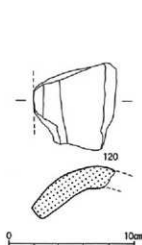
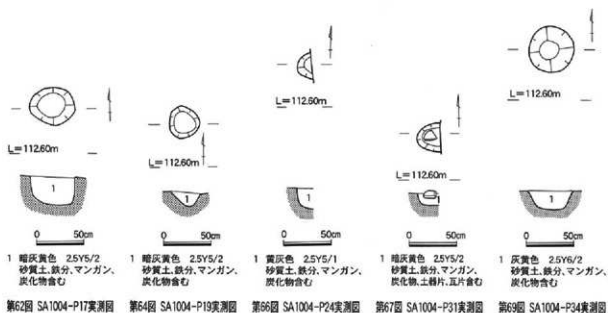


第56図 SA1004-P10 出土遺物実測図

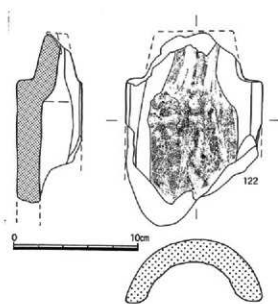


第59図 SA1004-P15 出土遺物実測図

第61図 SA1004-P16 出土遺物実測図



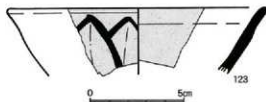
第63図 SA1004-P17
 出土遺物実測図



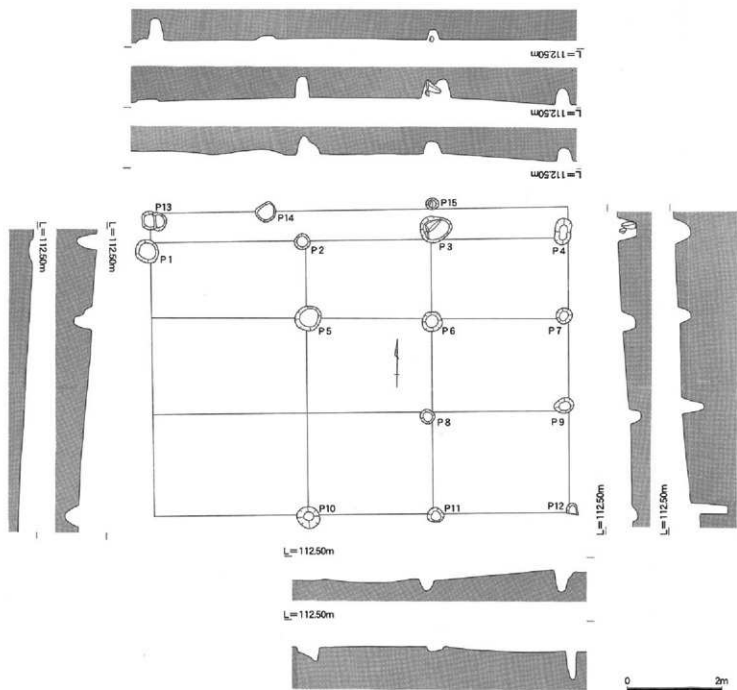
第68図 SA1004-P31 出土遺物実測図



第65図 SA1004-P19
 出土遺物実測図



第70図 SA1004-P34 出土遺物実測図



第71图 SA1005 实测图



L=112.60m



0 50cm

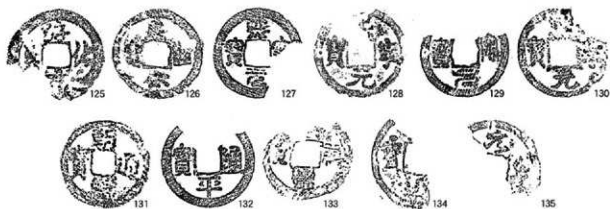
1 黄灰色 2.5YS/1
砂質土、鉄分、マンガ
ン、炭化物含む
木柱が残存



0 2cm

第73図 SA1005-P2 出土銅銭(1)

第72図 SA1005-P2 実測図



第74図 SA1005-P2 出土銅銭(2)



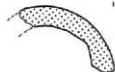
L=112.60m



0 50cm

1 黄灰色 2.5YS/1
砂質土、鉄分、マンガ
ン、土器片、炭化物含む

第75図 SA1005-P3 実測図



0 10cm

第76図 SA1005-P3
出土遺物実測図



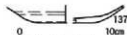
L=112.60m



0 50cm

1 黄灰色 2.5YS/1 砂質土、
鉄分、マンガ
ン、土器片、
炭化物、瓦片、土器片含む

第77図 SA1005-P5 実測図



第78図 SA1005-P5
出土遺物実測図

SA1004-P17 (第62・63図)

長軸48cm、短軸40cm、深さ28cmを測り、平面不整形円形を呈する。覆土は1層暗灰黄色砂質土である。120は丸瓦の側縁部である。

SA1004-P19 (第64・65図)

長軸34cm、短軸31cm、深さ13cmを測り、平面不整形円形を呈する。覆土は1層暗灰黄色砂質土である。121は土師質土器皿で底径8.0cm、回転ヘラ切り痕を留める。他、炭化物と土師質土器の小片が出土したが図化できなかった。東西に対峙すると考えられる柱穴は検出できていない。

SA1004-P24 (第66図)

区画のため切られた柱穴で現存値では長軸29cm、深さ20cmを測る。覆土は1層黄灰黄色砂質土である。土師質土器の小片8点出土したが図化できなかった。

SA1004-P31 (第67・68図)

区画のため切られた柱穴で、現存値では長軸33cm、深さ12cmを測る。覆土は1層暗灰黄色砂質土である。122は丸瓦の玉縁部で灰色を呈す。幅は10.9cmを測る。

柵 列

調査区南東、F-17～21グリッドで検出した9基の柱穴により構成される。柱穴の数に欠けるが東西に長く延び、SA1004・1005・1006の南側に位置する。柱穴の規模は径32～62cmを測り、平面円形状を呈する。埋土は灰黄、暗灰黄色で柱根をとどめる柱穴はない。柱穴内より磁器椀、土師質土器の小片が出土した。

柵列-P34 (第69・70図)

長軸51cm、短軸48cm、深さ18cmを測り、覆土は1層灰黄色砂質土である。他の柱穴よりやや大きく平面円形状を呈する。埋土は1層灰黄色砂質土である。123は龍泉窯系青磁碗の体部で、外面に幅の広い鎮蓮弁文を削り出し、淡緑色の釉を厚く施す。上田分類B-I類、14世紀初頭に属する。

柵列-P37

長軸38cm、短軸30cm、深さ16cmを測り埋土中より土師質土器の小片1点が出土したが図化できなかった。

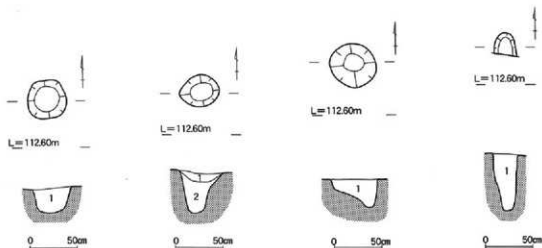
SA1005 (第71図)

調査区南東、G・H-18～20グリッドで検出した15基の柱穴により構成される建物跡であるが、SD1012・1013に切られ4基のビットは検出できなかった。西側の住居SA1004と重複部分がある。SA1004とは梁間の長さ大きな違いは見られないが、桁行の柱間の長さにおいて違いを見せ、全体に約50cm程南に寄る。P13～15は軒部分である。梁間3間(5.8m)、桁行3間(8.8m)、面積51.2㎡で横方向N-90°-W等高線に平行である。柱間寸法は、梁間1.6～1.8m、桁行2.8m～3.2mを測る。柱穴は平面不整形円形状を呈し、径32～80cmを測り、やや幅をもつ。埋土は1～2層黄灰または暗灰黄で柱根をとどめる柱穴が1基確認できた。柱穴内より土師質土器の皿、瓦、鉄製品、銅片、陶器片、須恵器片、炭化物等が出土している。

各柱穴と出土遺物

SA1005-P2 (第72～74図)

長軸42cm、短軸34cm、深さ44cmを測り、平面円形状を呈する。覆土は1層黄灰黄色砂質土である。出土遺物は土師質土器の小片、銅銭、炭化物である。出土した銭貨は、ほとんどが錆により付着したもののや熱を受け変形しており、銭種が確認されたものは7枚であった。確認できる銭種は「朝鮮通寶」1枚、北宋



1 黄灰色 2.5Y5/1 砂質土、鉄分、マンガ、炭化物含む

1 黄灰色 2.5Y5/1 砂質土、鉄分、マンガ、炭化物、土器片含む
2 黄灰色 2.5Y5/1 砂質土、鉄分、マンガ、炭化物、土器片含む

暗灰黄色 2.5Y5/2 砂質土、鉄分、マンガ、炭化物含む

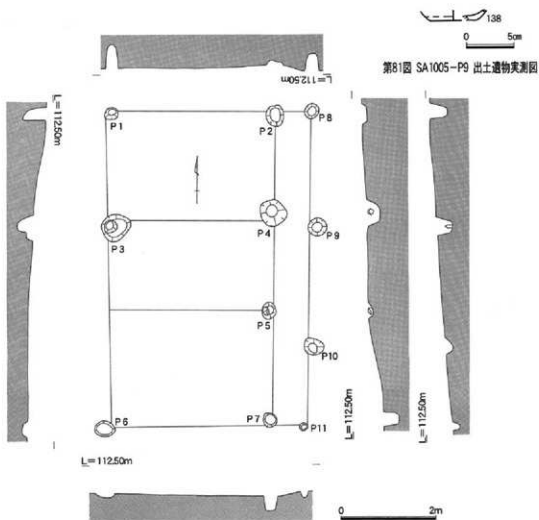
1 暗灰黄色 2.5Y5/2 砂質土、鉄分、マンガ、炭化物、瓦片、土器片含む

第79図 SA1005-P6 実測図

第80図 SA1005-P9 実測図

第82図 SA1005-P10 実測図

第83図 SA1005-P12 実測図



第84図 SA1006 実測図

銭6枚である。125は「淳化元寶」で初鑄年は990年、126は「皇宋通寶」で初鑄年は1038年である。127～130は「熙寧元寶」で127・129は篆書、128・130は真書で残存部に背文字は見られない。初鑄年は1068年である。131は「朝鮮通寶」で初鑄年は1423年である。132は上部を欠損しており平・通・寶の文字を残す。133～135は歪みのため銭種は判別できない。他に土師質土器の小片1点と炭化物、柱根が出土した。

SA1005-P3 (第75・76図)

長軸68cm、短軸54cm、深さ39cmを測り、平面円形状を呈する。覆土は1層黄灰色砂質土である。136は丸瓦の玉縁で色調は灰色、裏面に10条/cmの布目を残している。他に土師質土器の小片2点と平瓦の小片2点が出土したが図化できなかった。

SA1005-P5 (第77・78図)

長軸58cm、短軸52cm、深さ39cmを測り、平面円形状を呈する。覆土は1層黄灰色砂質土である。137は土師質土器皿である。他に土師質土器の小片4点と平瓦の小片2点、鉄片が出土したが図化できなかった。

SA1005-P6 (第79図)

長軸45cm、短軸40cm、深さ26cmを測り、平面不整形形状を呈する。覆土は1層黄灰色砂質土である。土師質土器皿の細片が出土した。

SA1005-P9 (第80・81図)

長軸43cm、短軸33cm、深さ45cmを測り、平面楕円形状を呈する。覆土は黄灰色砂質土で2層に分層できる。138は土師質土器小皿の底部である。

SA1005-P10 (第82図)

長軸50cm、短軸46cm、深さ28cmを測り、平面円形状を呈する。覆土は暗灰黄色砂質土である。土師質土器片4点と磁器片2点、平瓦の小片1点が出土したが図化できなかった。

SA1005-P12 (第83図)

区画のため切られた柱穴で、現存値では短軸22cm、深さ58cmを測る。覆土は1層暗灰黄色砂質土である。平瓦と丸瓦の小片が出土したが図化できなかった。

SA1006 (第84図)

調査区南東、G・H-19・20グリッドで検出した11基の柱穴により構成される建物跡であるが、溝に切られP5に対峙するピットは検出できなかった。住居SA1005と重複するので建て替えの可能性もあるが、SA1004・1005とは柱間の長さに違いを見せる。P8～11は軒部分である。梁間1間(3.5m)、桁行3間(6.9m)、面積23.5で棟方向N-5°-Eである。柱間寸法は、梁間3.4m、桁行2.0m～2.4mを測る。柱穴は平面円形状又は楕円形状を呈し、径35～68cmを測る。埋土は1～2層黄灰または暗灰黄色砂質土で柱痕をとどめる柱穴が1基確認できた。他の柱穴内より土師質土器の小片、瓦等が出土している。

各柱穴と出土遺物

SA1006-P1 (第85・86図)

長軸30cm、短軸25cm、深さ48cmを測り、平面円形状を呈する。覆土は1層黄灰色砂質土である柱痕が出土した。139は柱痕である。

SA1006-P4 (第87・88図)

長軸58cm、短軸50cm、深さ28cmを測り、平面不整形形状を呈する。覆土は黄灰色砂質土で2層に分層できる。140は丸瓦の玉縁、141は丸瓦の側縁、142は平瓦の側縁である。140・141は布目痕10条/cmを残す。



第86図 SA1006-P1 出土遺物実測図



L=112.60m



0 50cm



L=112.60m



0 50cm



L=112.60m



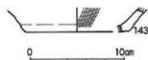
0 50cm

- 1 黄灰色 2.5Y6/1 砂質土、鉄分、マンガン、炭化物含む
 2 黄灰色 2.5Y5/1 砂質土、鉄分、マンガン、炭化物、土器片含む
- 1 暗灰黄色 2.5Y5/2 砂質土、鉄分、マンガン、炭化物、土器片含む
 2 黄灰色 2.5Y5/1 砂質土、鉄分、マンガン、炭化物、土器片含む

第87図 SA1006-P4 実測図

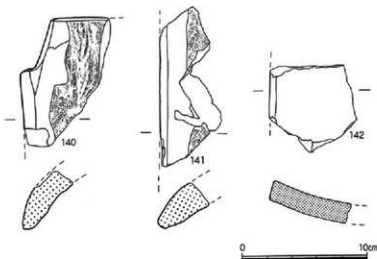
第89図 SA1006-P7 実測図

第90図 SA1006-P9 実測図



0 10cm

第91図 SA1006-P9 出土遺物実測図



0 10cm

第88図 SA1006-P4 出土遺物実測図

SA1006-P7 (第89図)

長軸34cm、短軸28cm、深さ32cmを測り、平面不整形円形を呈する。覆土は1層暗灰黄色砂質土である。土師質土器片4点、磁器の小片2点、平瓦の小片1点が出土したが図化できなかった。

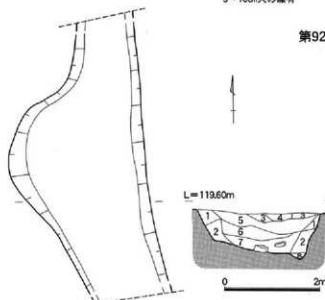
SA1006-P9 (第90図)

長軸40cm、短軸38cm、深さ34cmを測り、平面円形状を呈する。覆土は黄灰色砂質土で2層に分層できる。143は土師質土器摺鉢である。



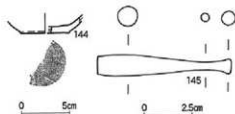
- 1 にぶい黄色 2.5Y6/4
砂質土
鉄分、マンガン、炭化物含む
5~10cm大の礫有
- 2 黄褐色 2.5Y5/3
粘質土
鉄分、マンガン、炭化物含む
5~10cm大の礫有
- 3 にぶい黄色 2.5Y6/3
砂質土
鉄分、マンガン、炭化物含む
5~10cm大の礫有

第92図 SD1001・1002実測図



- にぶい黄色 2.5YR6/3 砂質土 鉄分、マンガン、土器片、炭化物含む
 黄褐色 2.5YR5/4 砂質土 鉄分、マンガン、土器片、炭化物含む
 にぶい黄色 2.5YR6/4 砂質土 鉄分、互片含む
 黄褐色 2.5YR5/4 砂質土 鉄分を含む 50cm大の礫を多量に混入
 にぶい黄色 2.5YR6/3 砂質土 鉄分、互片、炭化物含む 10~15cm大の礫を混入
 にぶい黄褐色 10YR5/4 砂質土 鉄分、互片、炭化物含む 50cm大の礫を混入
 にぶい黄褐色 10YR5/4 粗砂 鉄分含む 20cm大の礫を混入
 にぶい黄褐色 10YR6/4 砂質土 鉄分、炭化物含む

第93図 SD1004 実測図



第94図 SD1004 出土遺物実測図(1)

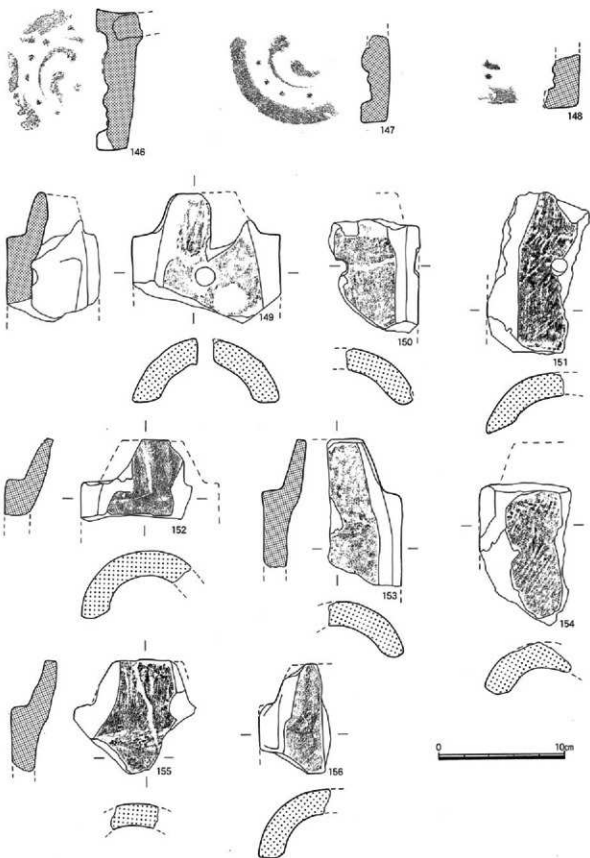
溝SD(第92~第114図)

SD1001・1002(第92図)

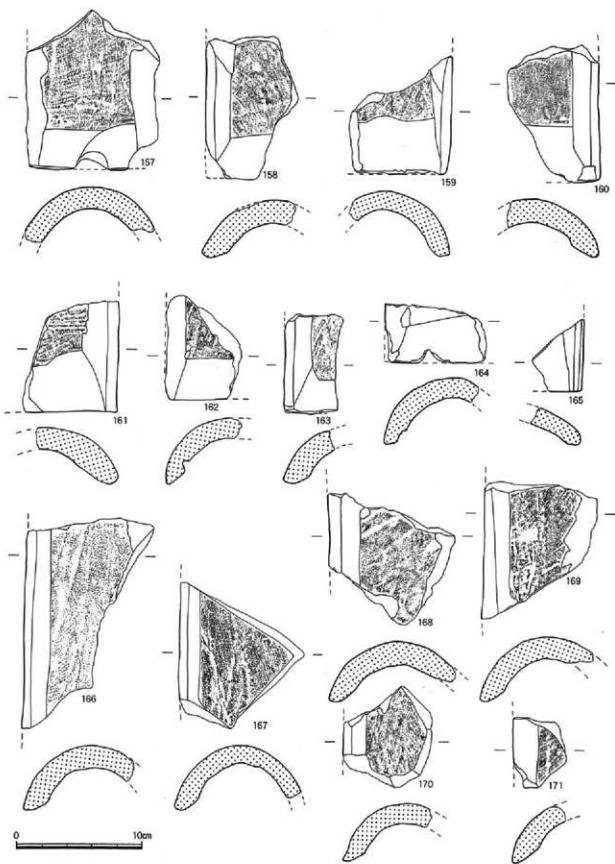
調査区北西K・L5~7グリッドで検出された溝で、南東方向に流れる。SD1001の規模は残存長7.2m、幅0.3~3.5m、深さは8cm、断面形態は浅い船底状を呈し、底には最大40cmの礫が多量に混入している。覆土は1層鉄分・マンガン・炭化物を含むにぶい黄色である。東側をSD1002に切られる。SD1002の規模は残存長6.4m、幅0.9~1.4m、深さ1.0m、断面形態は逆三角形状を呈し中央部が深い。SD1002の西側より木桶が出土しており、この溝はSD1011に続いていた溝と予想されその東に位置する木製の箱(SX1003)までこの木桶が続いていた可能性もある。出土遺物がないため詳細な時期は分からないが、SD1007同一遺構と考えれば、中世以降と推定される。

SD1004(第93図)

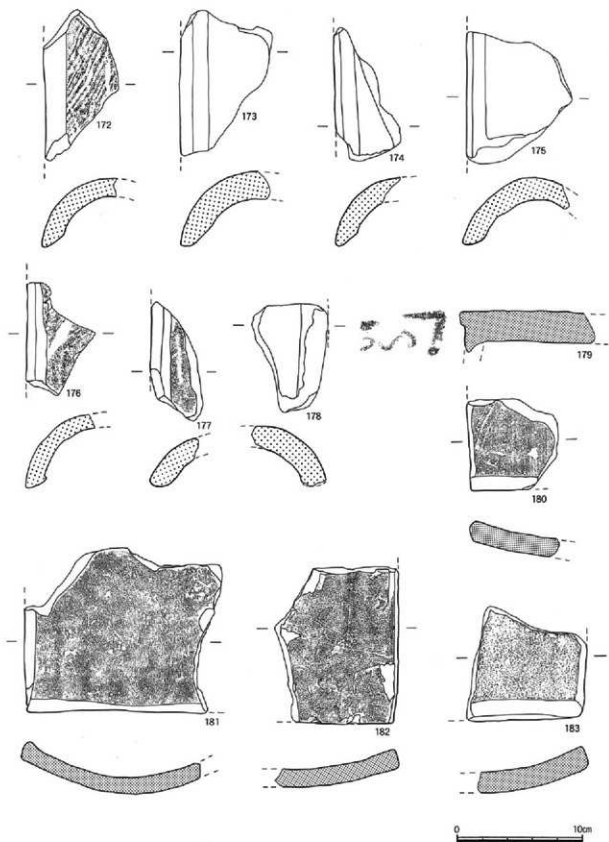
調査区北側L-7グリッド、SD1003の上層部で検出されている。規模は残存長6.0m、幅1.2~3m、深さ1.0mで北から南に流れる。南側は削平を受け、北は調査区外に伸びている。



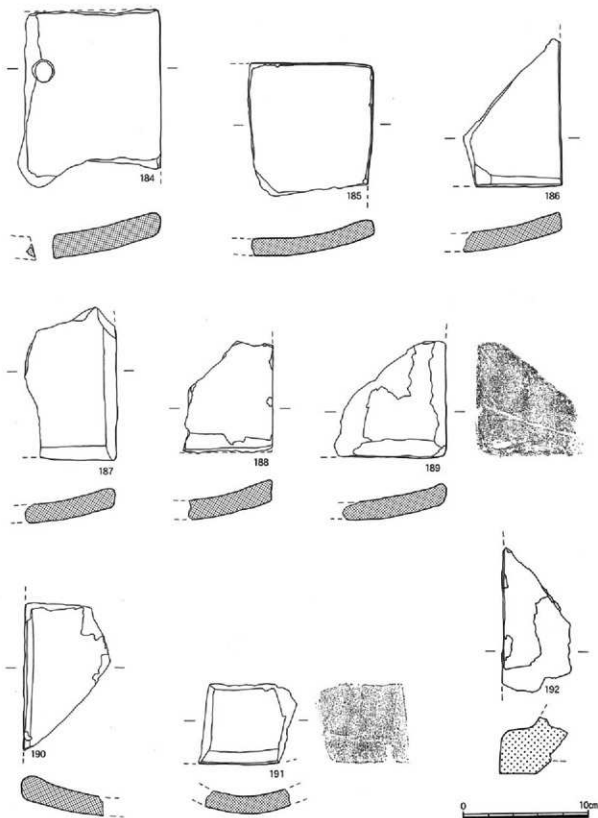
第95圖 SD1004 出土遺物実測圖 (2)



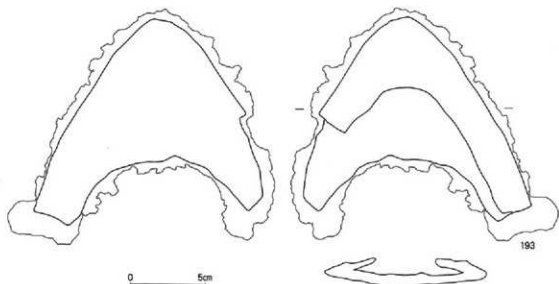
第96図 SD1004 出土遺物実測図 (3)



第97图 SD1004 出土遺物実測図 (4)



第98図 SD1004 出土遺物実測図 (5)

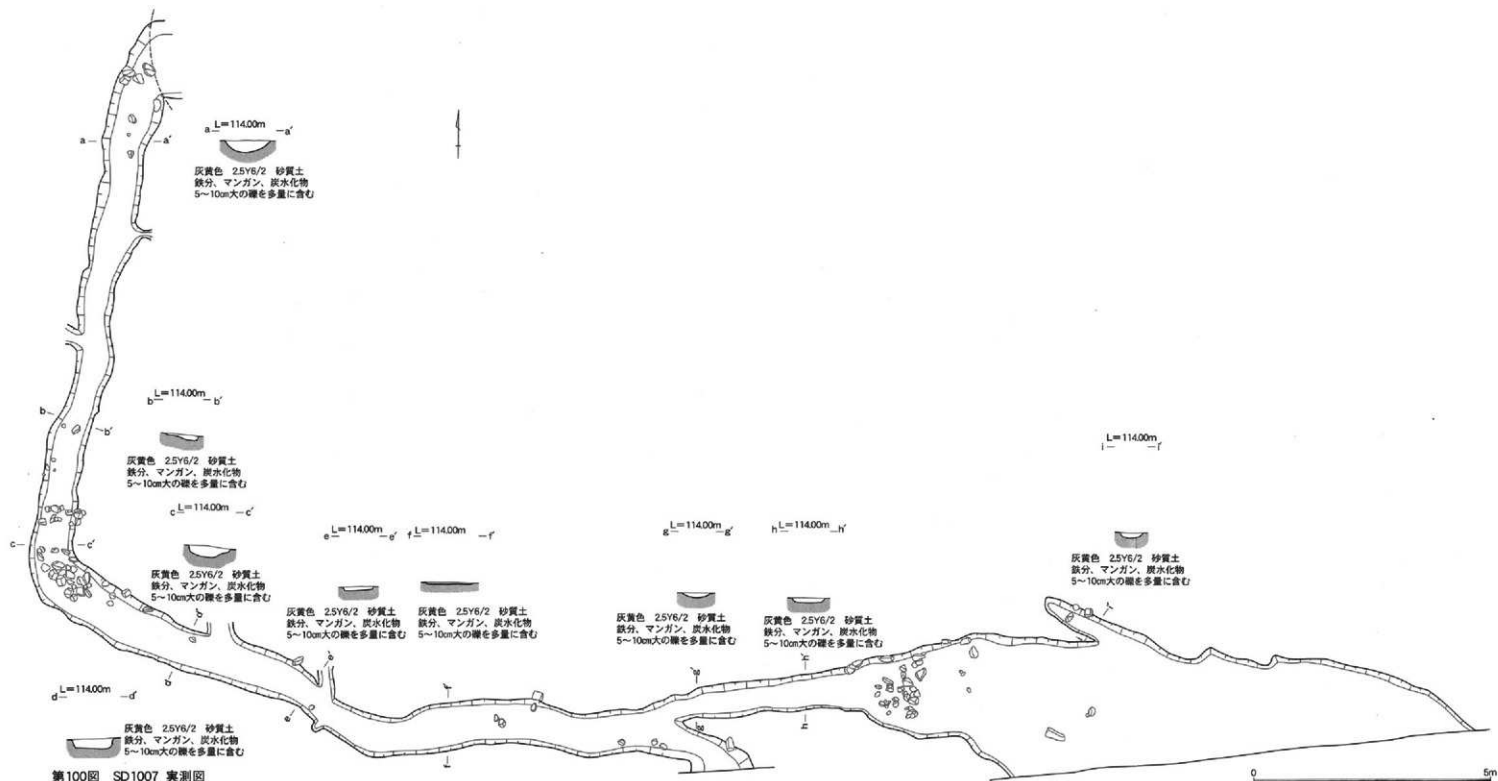


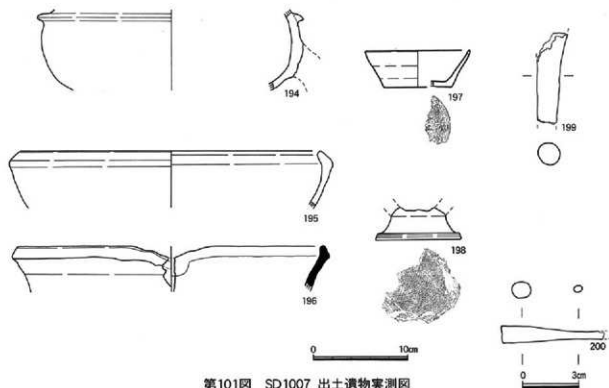
第99図 SD1004 出土遺物実測図(6)

断面形態は深い台形状を呈し、底部は平坦でやや東に傾斜する。覆土は8層にぶい黄、黄褐、にぶい黄橙砂質土である。第1・2・3・5・6層から土師質土器や瓦片が出土している。時期は中世以降と推定されるが、煙管が出土しており近世まで続いた遺構の可能性もある。

SD1004出土遺物(第94～99図)

144は土師質土器皿の底部で、切り離し方法は静止糸切りである。145は真鍮製の煙管である。146～192は瓦である。146～178は丸瓦で、146～148は軒丸瓦の瓦当部である。外縁幅15mm前後で外縁高は9～10mm、珠紋は小さく間隔は開いており、圏線はみられない。室町時代後期16世紀の所産と考えられる。149～156は丸瓦玉縁で149～151は釘穴の孔をもつ。凹面に9～12条/cmの布目痕を残す。高さは149で5.1cmである。157～165は広端部分で、凹面広端面の縦幅が狭いもので2.4cm(163)、広いもので3.9cm(159)がある。166～178は側縁部分で凹面に9～13条/cmの布目痕を残す。179～191は平瓦、179は軒平瓦である。瓦当部の文様は唐草文であり、顎凸面の幅は狭い。顎裏綿と平瓦面が直角に交わる。ナデ方向は確認できない。凹面に12条/cmの布目痕を残す。他は狭端面と広端面であり180は凹面に10条/cmの布目痕を残す。183・188・189・191は凹面に砂が多く付着する。192は鬼瓦の端部と考える。193は鉄製品端である。





第101図 SD1007 出土遺物実測図

SD1007 (第100図)

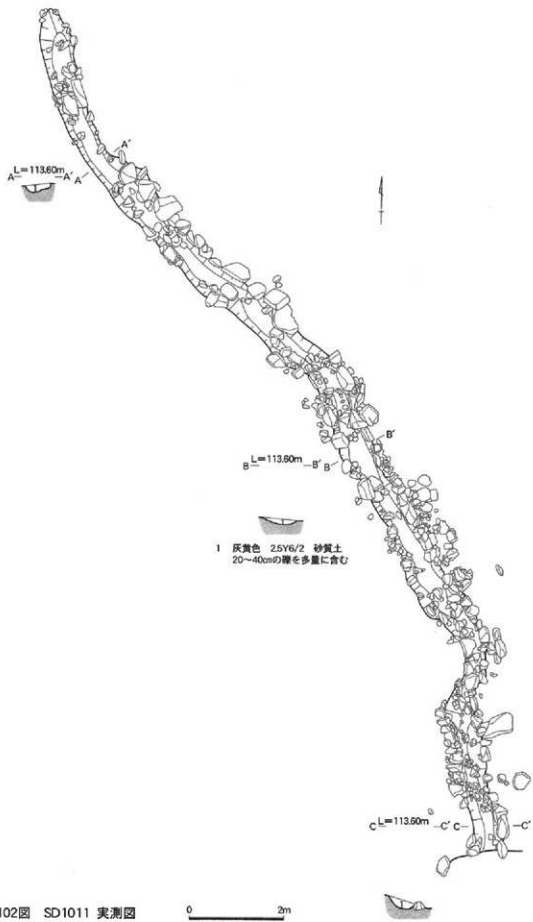
調査区南西、D～G-5～11グリッドで検出された大きい溝でSD1009・1010・1019・1020が合流する。規模は残存長43.2cm、幅0.4～2.6m、深さ0.2mで断面形態は船底状を呈する。覆土は1層灰黄色砂質土で北から南に流れD・E-6グリッドで大きく向きを変え東流する。東流する付近とD-9の地点に20cm大の礫が混入していた。北端はSX1001に切られ、南側は調査区外に延びる。土師質土器や須恵器が出土している。出土遺物より中世以降と考える。

SD1007 出土遺物 (第101図)

194・195・197～199は土師質土器である。194は鐏の体部である。体部は内彎し断面三角形の鐏が下向きに付いている。195は挿鉢の口縁部で、端部を内側へ拡張する。196は須恵器捏鉢の口縁部である。197は杯で底部切離し手法は回転糸切りである。198は不明。199は土師質土器鐏または釜の脚部で、断面円形、身部は直線的に延びている。200は銅製の煙管で吸口を破損する。

SD1011 (第102図)

調査区南側D～H-10～グリッド、SD1007の東側で検出されている。規模は残存長21.4m、幅0.8m、深さ0.1mで北から南に流れる。北側は削平を受け、南は調査区外に延びる。SD1002と続いていた溝と考えられる。断面形態は浅い船底状を呈する。覆土は1層灰黄色砂質土で20～40cmの礫を多数含む。土師質土器、鉄片、瓦片、須恵器片等が出土している。出土遺物より時期は中世以降と推定される。

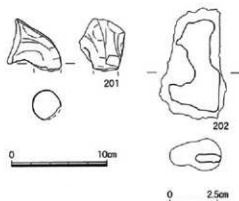


第102図 SD1011 実測図

0 2m

SD1011 出土遺物 (第101図)

201は土師質土器の脚部である。基部は屈曲し、断面は円形、ユビオサエ痕を残す。202は不明鉄片である。他に丸瓦片と須恵器片が出土したが図下できなかった。



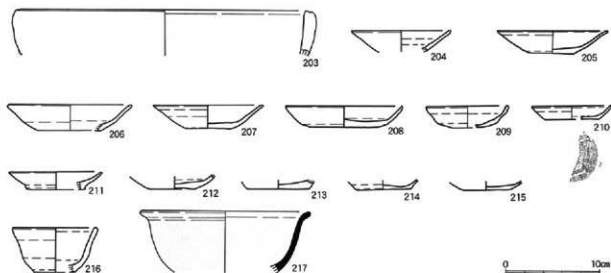
第103図 SD1011 出土遺物実測図

SD1012 (第104図)

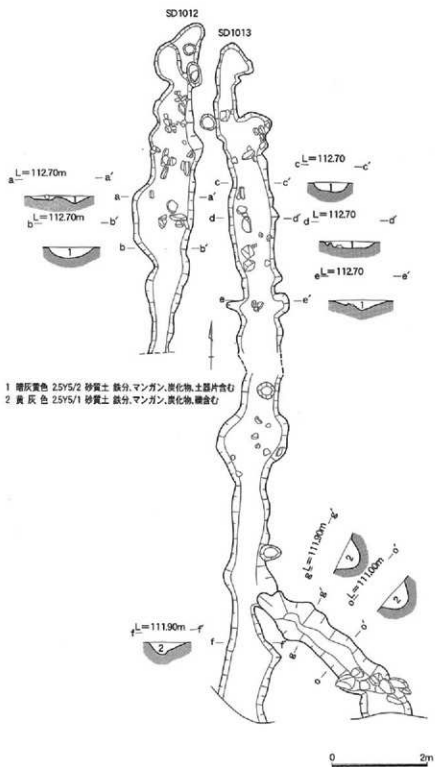
調査区南東、G・H-19グリッドで検出された溝でSD1013の西に位置する。規模は残存長7.1m、幅0.4~1.3m、深さ0.2mで断面形態は船底状を呈する。底面には10~20cm大の礫が混入している。覆土は1層暗灰黄砂質土で北から南に流れ、南端は造成のため切られている。SA1004・1005と重複関係にあり、土師質土器、青磁、瓦、鉄製品等が出土した。青磁碗は15世紀のものと考えられる。

SD1012 出土遺物 (第105~109図)

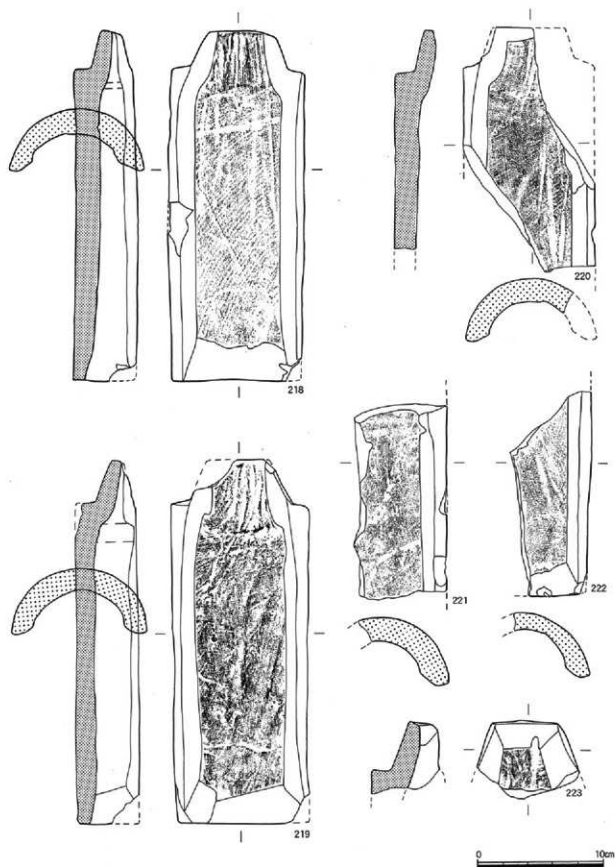
203~216は土師質土器である。203は鐏口縁部で弱い受口状を呈し、口径は29.8cmと大きい。204~215は皿で口径は最大12.6cm(206)、最小8.3cm(210)、底径が最大7.0cm(208)、最小4.6cm(205)である。口縁部は外反すものや、直線的に延びるもの、体部が内樹するもの等がある。口縁端部はほぼ丸い。底部切離し手法が静止糸切りもの(205・212・215)、回転ヘラ切りもの(206・209~211・214)である。216は碗である。217は青磁碗で上田分類 D-II、15世紀前半に属する。無文の端反碗でシャープさは無く、口縁部は外反、暗オリーブ色を呈し軸は厚い。



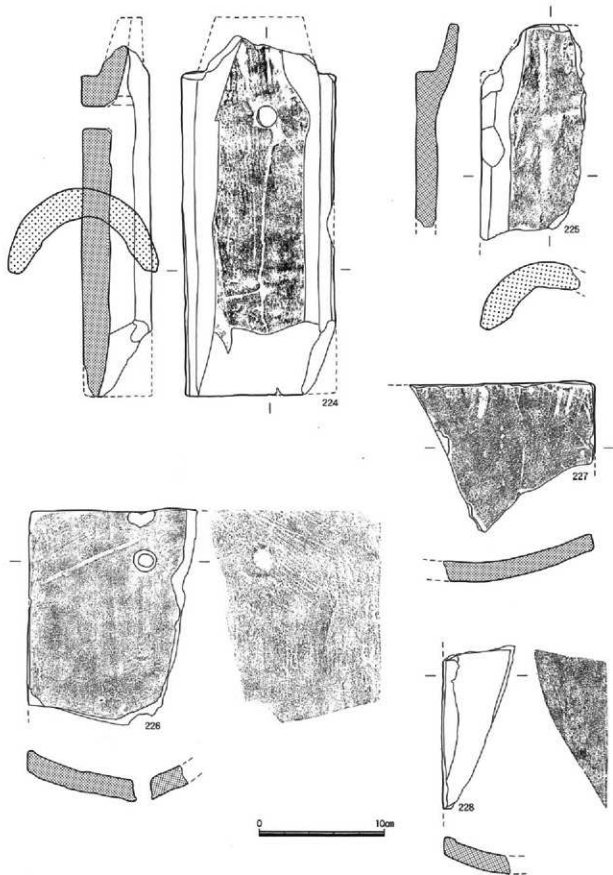
第105図 SD1012 出土遺物実測図 (1)



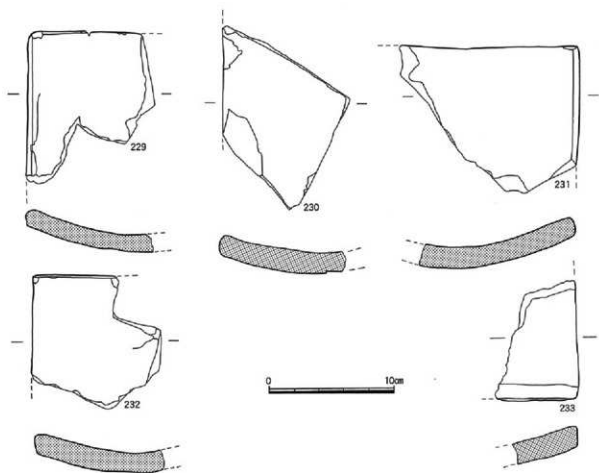
第104図 SD1012・SD1013 実測図



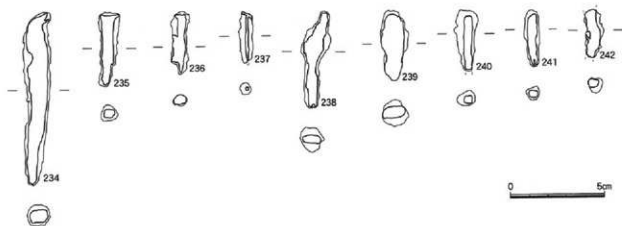
第106图 SD1012 出土遺物実測図 (2)



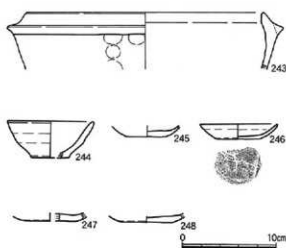
第107図 SD1012 出土遺物実測図 (3)



第108図 SD1012 出土遺物実測図 (4)



第109図 SD1012 出土鉄製品実測図 (5)



第110図 SD1013 出土遺物実測図(1)

218～233は瓦である。218～225は丸瓦で、完形品は無い。それに近いもの、218・219・224の幅は10.7～11.9cm、胴部の長さは24.8～25.5cm、高さは4.9～6.6cm、厚さは1.3～2.3cmである。224は釘穴をもち幅、長さ、高さ共に大きく凹面広端面も広い。他は玉縁、広端部、側縁部である。凹面に布目痕11～13条/cmを残す。226～233は平瓦である。226～228の凹面にはケズリ、布目痕、砂粒が見られる。厚さは1.4～1.6cmである。234～241は鉄製品で、235～237・240は鉄釘と考えるが他は不明である。

土師質土器の小片143点、丸瓦片12点、平瓦片12点が出土したが図化できなかった。

SD1013 (第104図)

調査区南東、G・H-19グリッドで検出された溝で、SD1012の東に位置し平行に流れる。規模は残存長14.5m、幅0.4～1.5m、深さ0.3mで断面形態は船底状、逆三角形、U字状と各地点で違いを見せる。底面には10～40cm大の礫が混入していた。覆土は1層暗灰黄色砂質土で北から南に流れ、南は調査区外に延びる。土師質土器、瓦、陶器、銅銭、鉄製品等が出土しているが、完形品は無く詳細な時期は決定できないが、覆土や形状からSD1012と同時期と考えるなら15世紀前半頃、また静止糸切りの皿が出土していることを考慮すると、概ね15～16世紀頃と考えられる。SA1004・1005と重複する。

SD1013 出土遺物 (第110～113図)

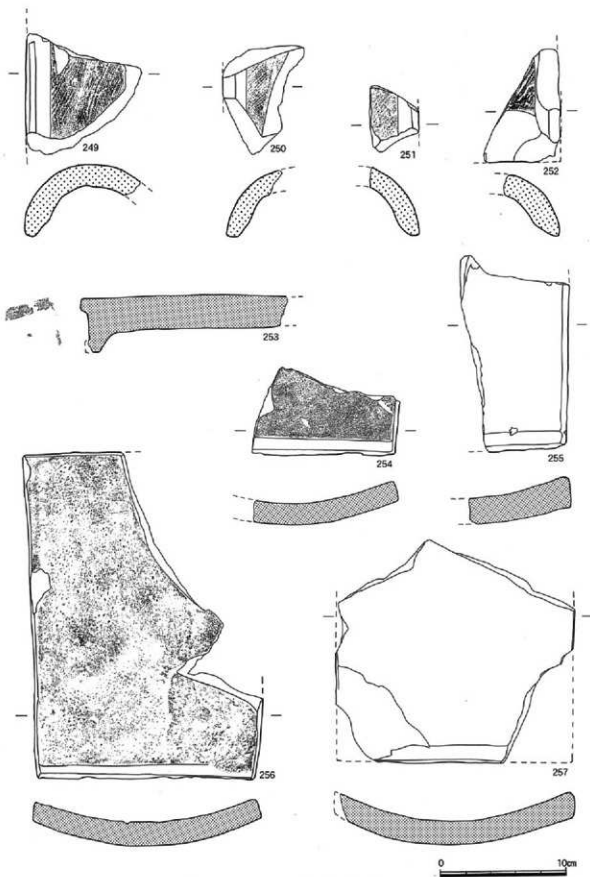
243～248は土師質土器である。243は羽釜で端部は尖り、断面三角形の鈎を張り付けている。口径は24.8cmである。244は碗で外面体部中央に段をもち口縁端部を尖り気味におさめている。口径9.0cm、底径4.0cm、器高3.9cmである。245～248は皿で246・247の底部切り離し手法は、静止糸切りである。246の口径は8.2cm、底径は4.2～5.8cmである。

249～257は瓦で249～252は丸瓦、249～251は側縁、252は広端部である。253は軒平瓦で文様は唐草文、顎裏面と平瓦面が鈍角を呈し、凹面に12条/cmの布目痕を残す。圏線はみられない。254～257は平瓦で、凹凸面に砂粒が付着する。厚さは1.7～2.0cm、256の縦長は25.6cm、横幅は狭端面で16.9cm、257で横幅18cm余りになるものと思われる。

258～261は銅銭である。258・259は北宋銭「祥符元寶」「元豊通寶」で初鑄年はそれぞれ1009年・1078年である。260は明銭「洪武通寶」で初鑄年は1368年である。261は判読不能である。

262～272は鉄製品で、262～267は鉄釘と考える。268～272は不明棒状鉄片である。

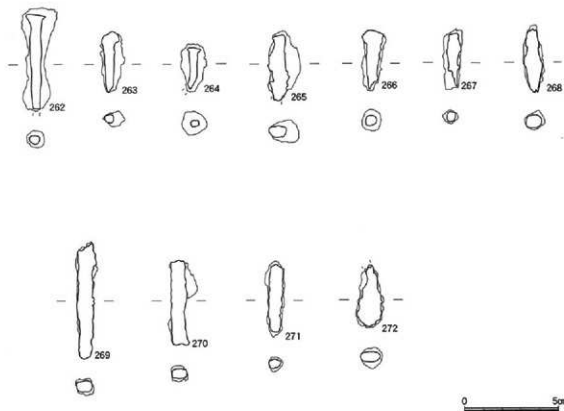
他、土師質土器の小片42点、丸瓦片17点、平瓦片12点、陶器片5点、銅銭の小片が出土している。



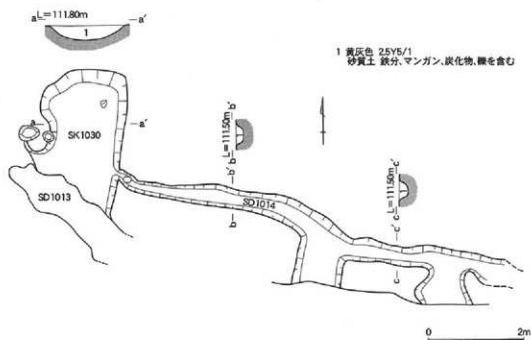
第111図 SD1013 出土遺物実測図 (2)



第112図 SD1013 出土銅銭 (3)



第113図 SD1013 出土鉄製品実測図 (4)



第114図 SK1030・SD1014 実測図



第115図 SD1014 出土遺物実測図

SD1014 (第114図)

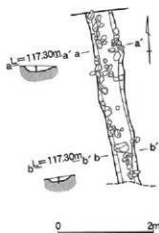
調査区南東、F-19～21グリッドで検出された溝で、SD1013の東に位置する。規模は残存長8.4m、幅0.3～1.5m、深さ0.2mで断面形態は船底状である。覆土は1層黄灰色砂質土で西から東に流れ、西はSK1030に切られ南は調査区外に延びる。土師質土器が出土しているが時期を決定付ける遺物はない。

SD1014 出土遺物 (第115図)

273は土師質土器椀の底部である。底径5.0cm、胎土は精良で内外面に丁寧なナデを施す。

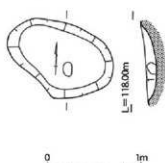
SD1017 (第116図)

調査区北西、K・L-2グリッドで検出された溝である。規模は残存長3.7m、幅0.4～0.6m、深さ0.2mで断面形態は船底状を呈する。底には5～10cm大の礫が混入している。覆土は1層にぶい黄色砂質土で北から南に流れ、北は調査区外に延び南は削平を受けている。平瓦の小片2点、丸瓦の小片が3点出土したが図化できなかった。



1 にぶい黄色 25Y6/4 砂質土
鉄分、マンガン、炭化物含む 5～10cm大の礫有

第116図 SD1017実測図



1 にぶい黄色 25%6/4
砂質土、鉄分、マンガ、炭化物含む

第117図 SK1007 実測図

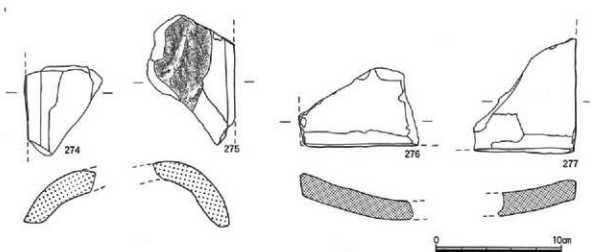
土坑 SK (第117~143図)

SK1007 (第117図)

中央高台、K-12・13グリッドで検出した土坑である。規模は長軸1.2m、短軸0.7m、深さ0.1mで平面楕円形状を呈し南側に弱い突出をもつ。断面は浅い船底状で、覆土は鉄分・マンガ・炭化物を含む1層にぶい黄色砂質土である。覆土中より丸瓦、平瓦が出土している。時期は不明である。

SK1007 出土遺物 (第118図)

274~277は瓦である。274は丸瓦の玉縁、275は側縁部で凹面に13条/cmの布目痕がある。276・277は平瓦の狭端部である。



第118図 SK1007 出土遺物実測図

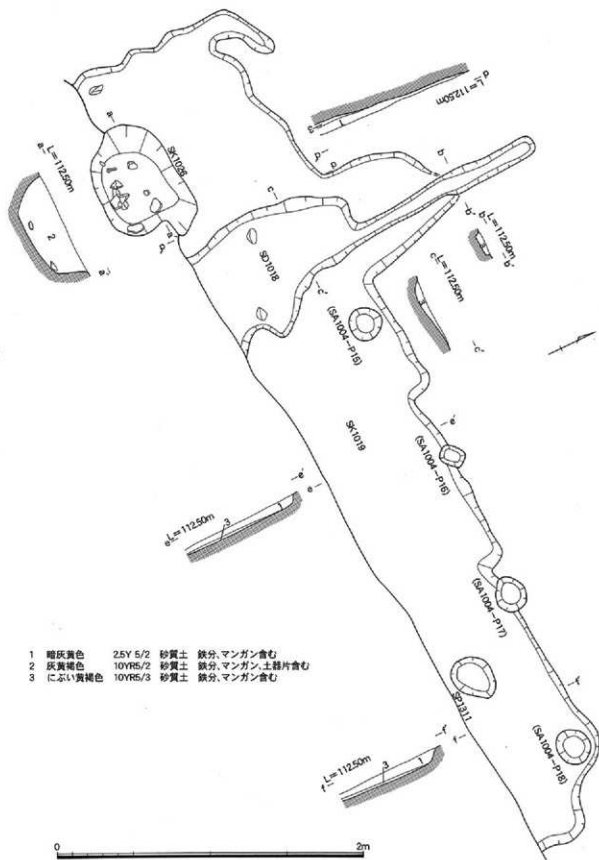
SK1019 (第119図)

調査区南東、G・H-15~18グリッドで検出した土坑である。規模は残存長で長軸12.0m、短軸1.3m、深さ0.15mで平面不整長方形を呈し北西部に1.6m×1.6mの突出部をもつ。断面は浅い船底状で、覆土は鉄分・マンガ・炭化物を含む2層暗灰黄色、にぶい黄褐色砂質土であり、覆土中より土師質土器、青磁、陶器片等が土している。時期は出土遺物の青磁碗、土師質土器碗等から概ね15世紀前半~16世紀頃と考えられる。SA1004-P15~P18, SD1018, SK1026に切られ、南側は水田の区画による削平を受けている。

SK1019 出土遺物 (第120図)

278は土師質土器碗の底部で、静止糸切り痕を残し内外面に丁寧なヨコナデを施す。底径は4.9cm、浅黄橙色を呈する。16世紀頃の所産と考える。279は不明棒状鉄製品である。280は青磁碗の口縁部で口径は17.2cmで弱く外反する。比較的シャープな作りで回転ヘラ削り痕が見られ、灰味のある透明感の強い釉を薄くかける。また漆の接合痕が2辺にみられる。上田分類D-I、15世紀前半に属する。

他、陶器の小片1点、須恵器片1点、磁器片1点、丸瓦の小片4点、平瓦5点が出土している。



第119図 SK1019・SD1018 実測図

SK1023・1024 (第121図)

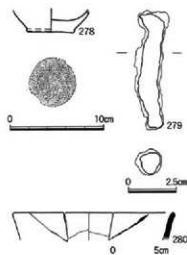
調査区南東、F-16・17グリッドで検出した土坑である。SK1023の規模は長軸1.4m、短軸0.6m、深さ0.2mで平面不長方形を呈し、断面は船底状、覆土は1層にぶい黄色砂質土である。覆土中より須恵器捏鉢が土している。SK1024の規模は残存長3.2m、深さ0.3mで西側を水田の区画による削平を受け、南は調査区外に延び西側のSK1025を切る。覆土は暗灰黄色砂質土である。断面は船底状、覆土中より土師質土器羽釜、丸瓦が出土している。時期を決定付ける遺物は無いが、概ね中世以降と考える。

SK1023 出土遺物 (第122図)

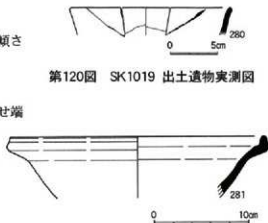
281は須恵器捏鉢である。口径26.6cm、体部上位で外傾させ口縁端部を上方に拡張し外方に平坦面を作っている。

SK1024 出土遺物 (第123図)

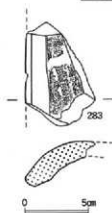
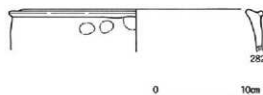
282は土師質土器羽釜の口縁部である。口縁部を内傾させ端部を丸くおさめ、断面半円形状の鈎を上向きに張り付けている。283は丸瓦の側縁部である。他、土師質土器の小片13点と丸瓦片2点が出土したが図化できなかった。



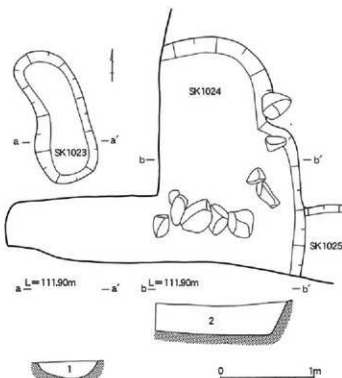
第120図 SK1019 出土遺物実測図



第122図 SK1023 出土遺物実測図

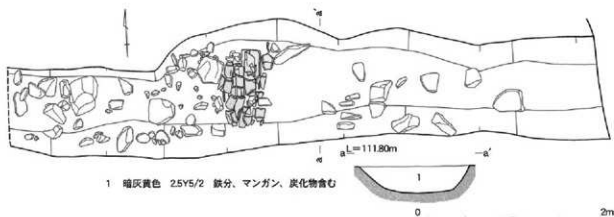


第123図 SK1024 出土遺物実測図



- 1 にぶい黄色 2.5Y6/4 砂質土、鉄分、マンガ、炭化物含む
- 2 暗灰黄色 2.5Y5/2 砂質土、鉄分、マンガ、炭化物含む

第121図 SK1023・SK1024 実測図



第124図 SK1025 実測図

SK1025 (第124図)

調査区南東、E-17・18グリッドで検出した土坑で西側のSK1024に切れ、南は調査区外に延びている。規模は残存長で長軸6.3m、短軸0.9~1.3m、深さ0.3m、平面不整形長方形を呈し北側に弱く突出する細長い土坑と考えられる。断面は船底状で底は平坦である。覆土は鉄分・マンガ・炭化物を含む1層暗灰黄色砂質土で、遺構中央よりやや西寄りで完形に近い丸瓦が重なった状態多く出土した。瓦の廃棄土坑と考えられる。平瓦と鉄製品も検出されたが、時期を決定付ける遺物は無い。

SK1025 出土遺物 (第125~137図)

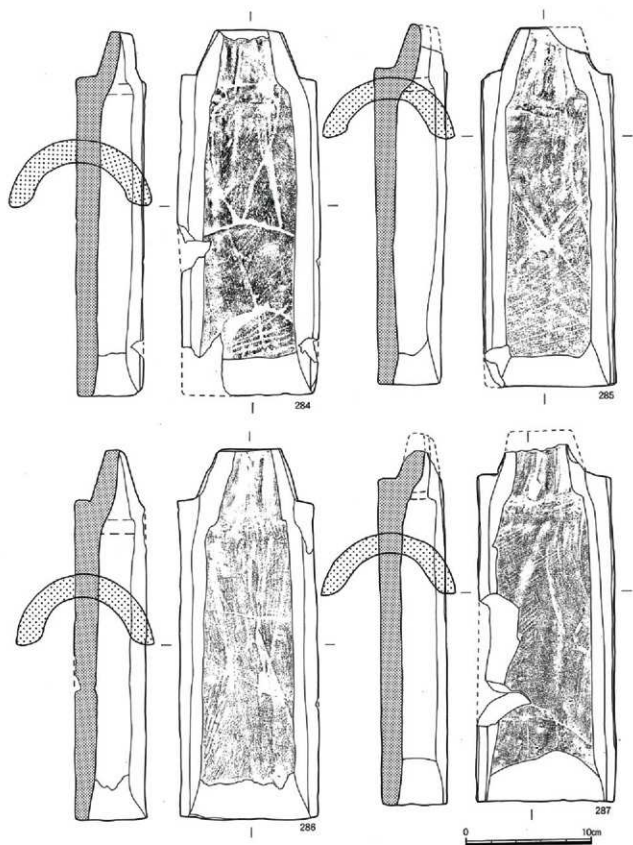
284~337は瓦である。335までが丸瓦で、336・337は平瓦である。

丸瓦は完形に近いものが多い。法量は、横幅最小10.4cm(285)~最大12.4cm(310)、胴部側縁長最小23.2cm(309)~最大26.1cm(287)、高さ最小4.8cm(285・297・303・313)~最大6.6cm(309・310)、厚さ最小1.4cm(297・319)~最大2.4cm(321)、玉縁端面横幅最小5.1cm(286・296・304・319)~最大5.9cm(298)、玉縁側縁長は3.6cm程度のもが多く最大で6.0cm(306)、凹面の広端面縦長は3cm前後が多いが最小1.3cm前後(297・299・330)~最大7cm前後(308・320・321)である。凹面側縁においてはすべて玉縁から胴部にかけて面取りが見られる。玉縁端面の面取りはあるものとなないものに分かれる。凹面には殆どが細かい布目痕(9~13条/cm)を残す。また、粘土角材から粘土板を切り取る時にできる斜め方向の緩弧線コピキや布皺の見られるものが多い。凸面にはナデ調整を行うものの、網目痕の見られるものもある。釘穴を残すものは(309・310・323)で310はやや玉縁寄りに穿つ。

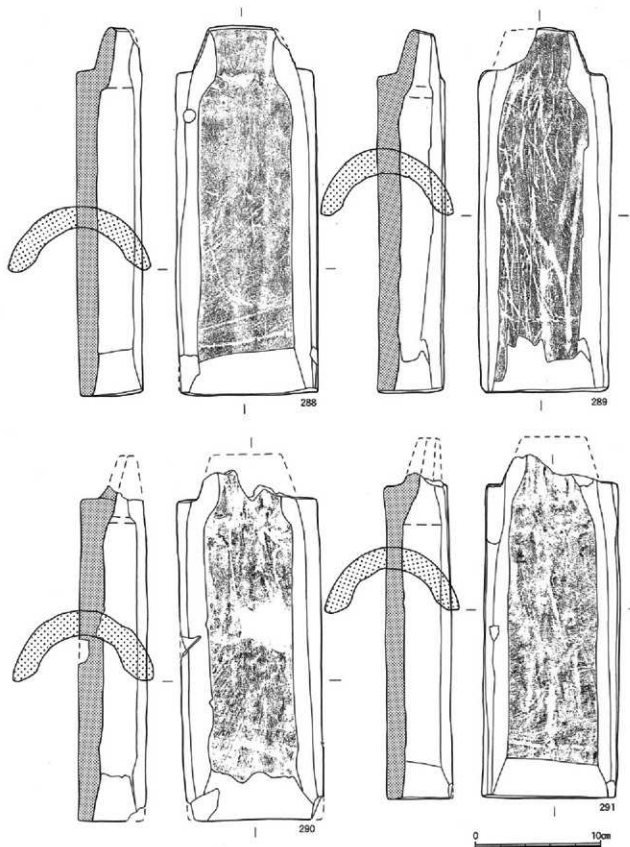
336・337は平瓦で共に凹面に砂粒が付着している。336の狭端部幅は18.2cmである。

338・339は鉄製品で338は鉄釘、339は不明環状鉄である。

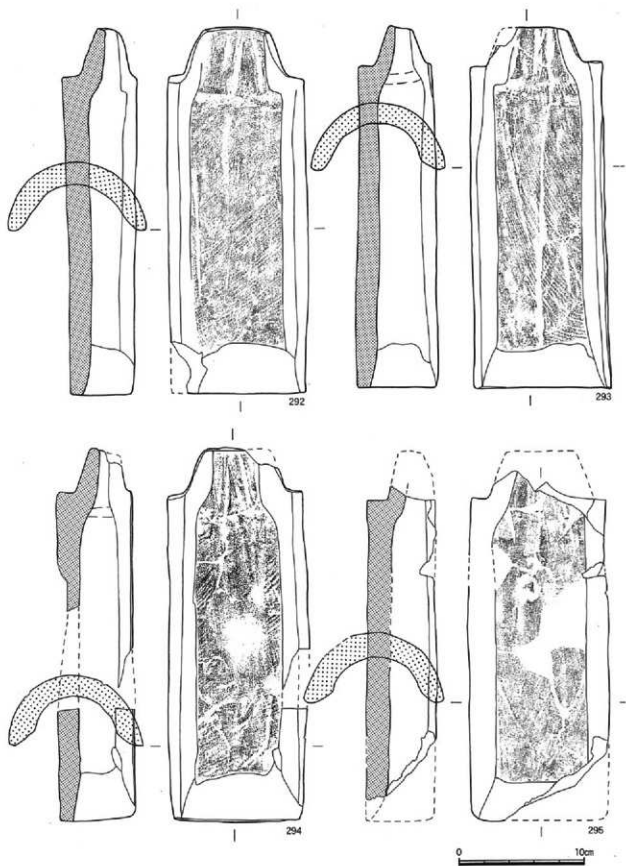
他、平瓦の小片35点土師質土器の小片13点、須恵器片1点、磁器片1点が出土している。



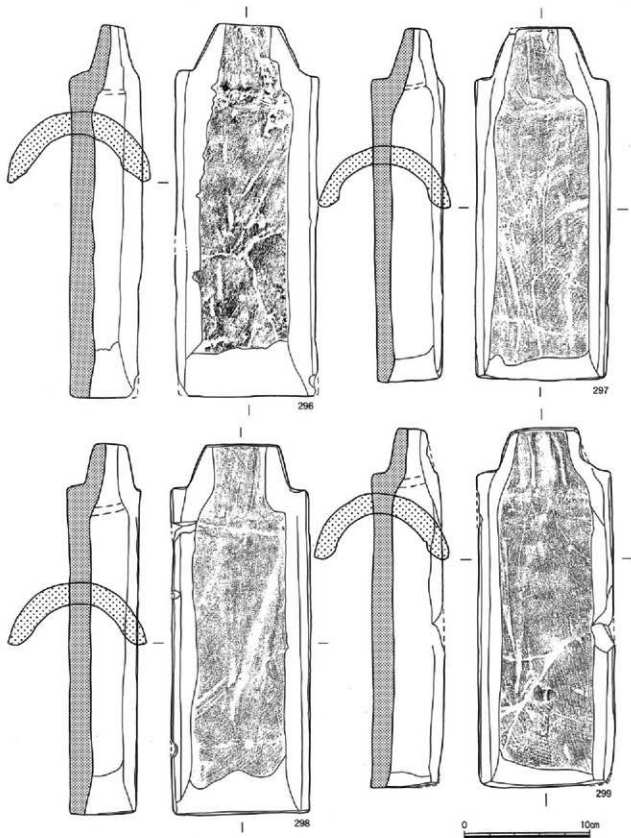
第125図 SK1025 出土遺物実測図(1)



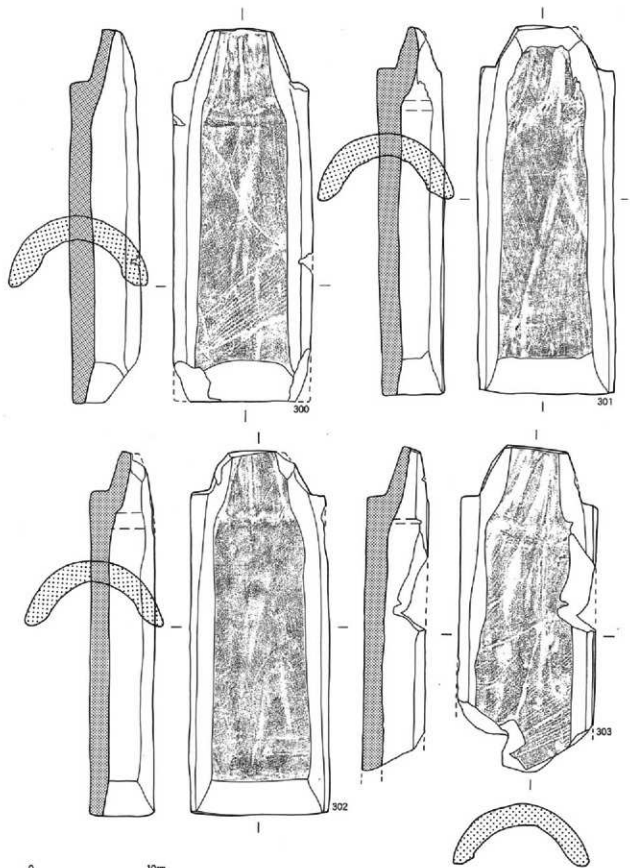
第126図 SK1025 出土遺物実測図(2)



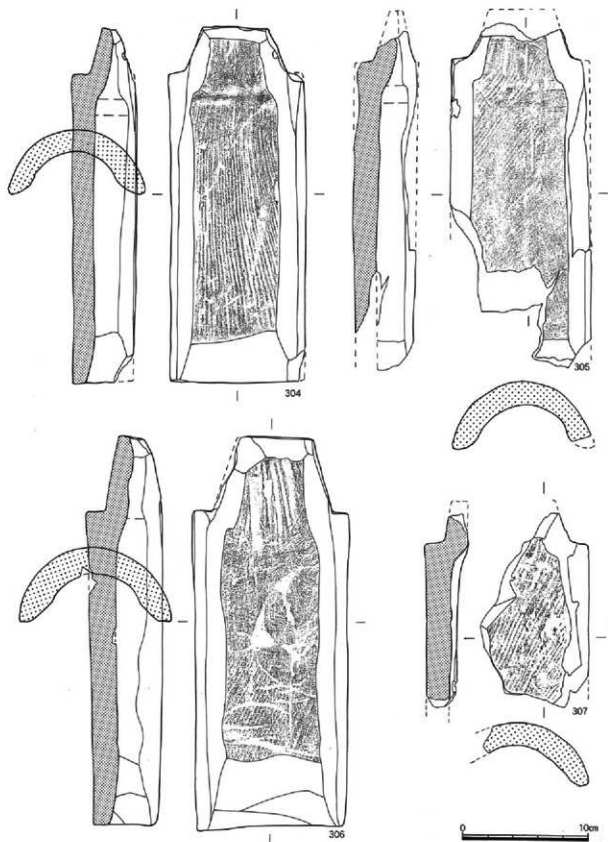
第127図 SK1025 出土遺物実測図 (3)



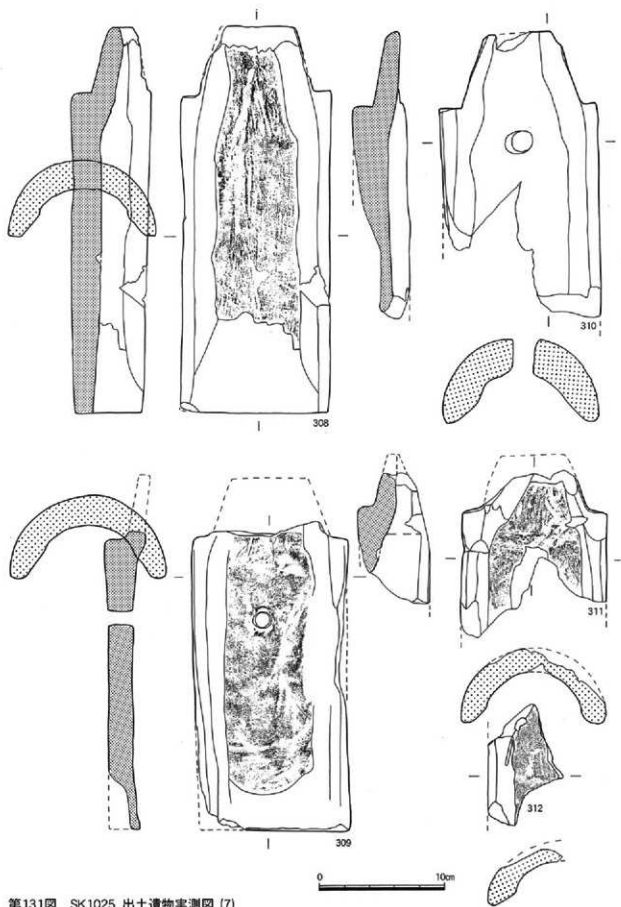
第128图 SK1025 出土物実測図 (4)



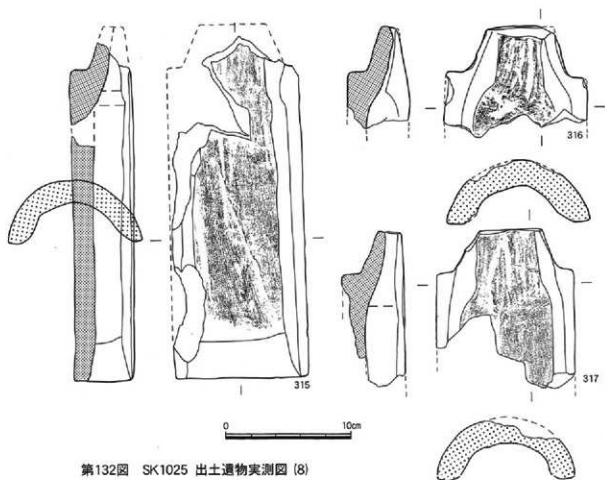
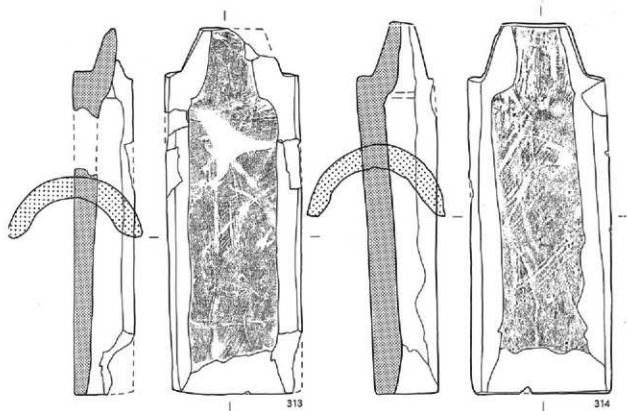
第129図 SK1025 出土遺物実測図 (5)



第130图 SK1025 出土文物素描图 (6)

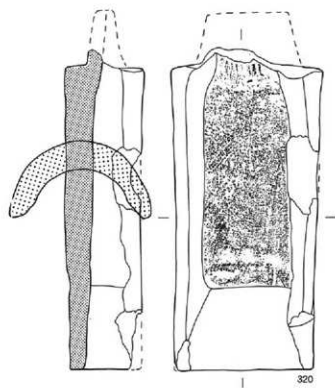
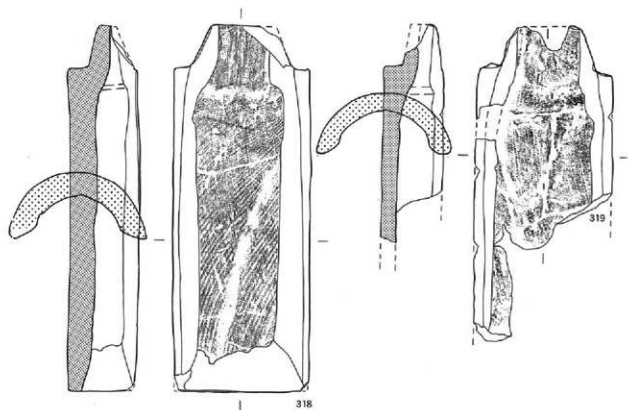


第131图 SK1025 出土遺物実測図(7)

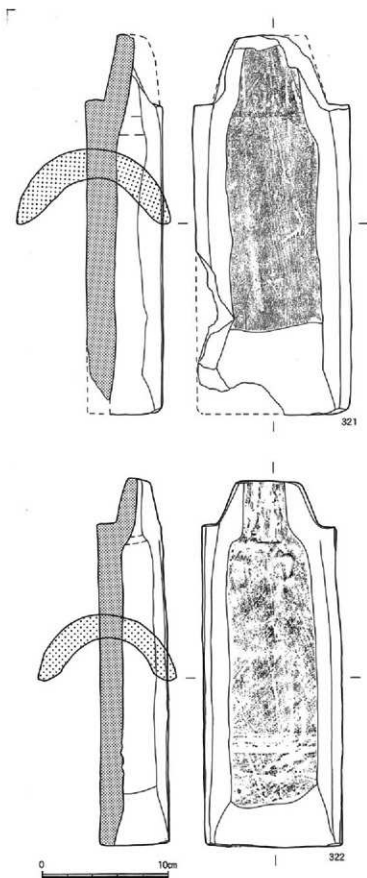


0 10cm

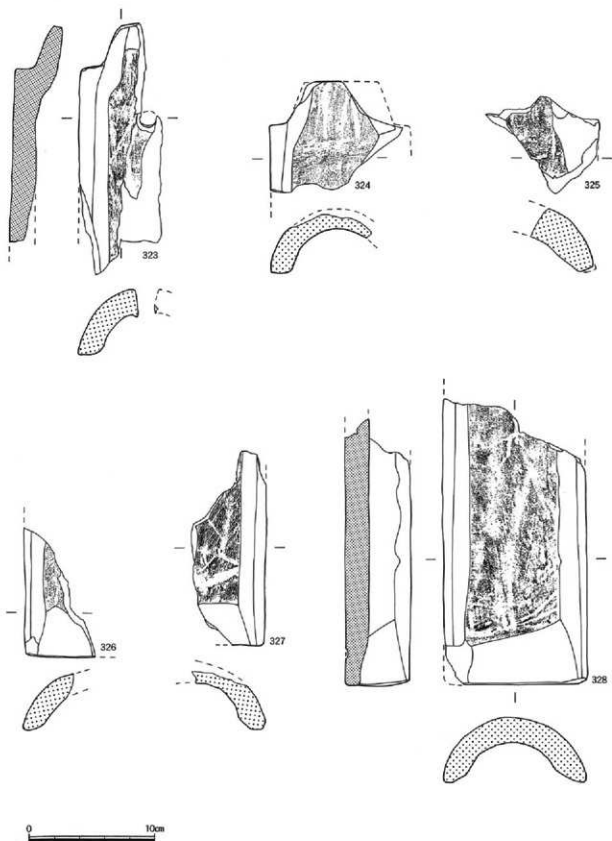
第132图 SK1025 出土物实测图 (8)



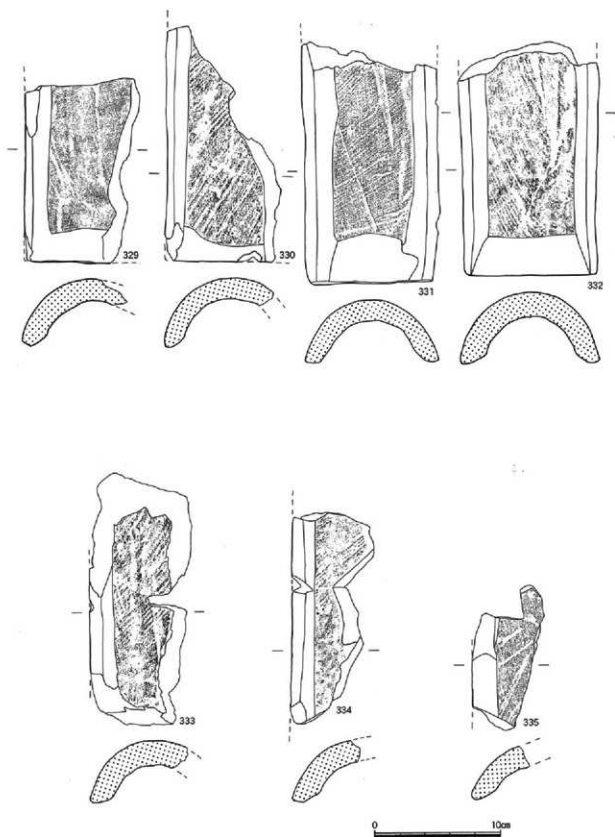
第133图 SK1025 出土遺物実測図(9)



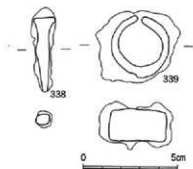
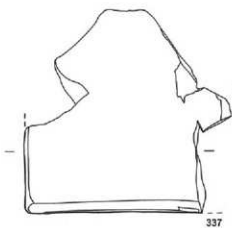
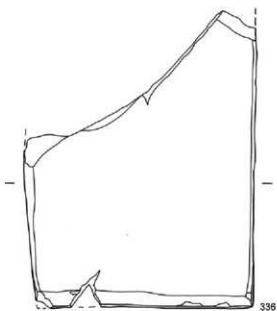
第134图 SK1025 出土文物实测图 (10)



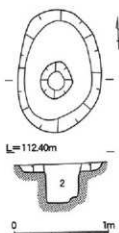
第135圖 SK1025 出土遺物実測図 (11)



第136図 SK1025 出土遺物実測図 (12)



第137图 SK1025 出土遺物実測図 (13)



- 1 暗灰黄色 2.5Y5/2 砂質土、鉄分、炭化物含む
2 黄灰色 2.5Y5/1 砂質土、鉄分、炭化物含む
木柱が残存

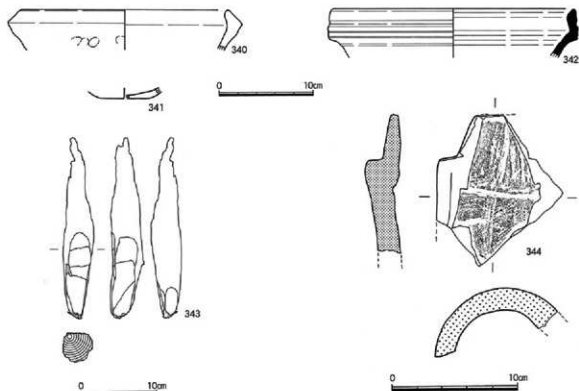
第138図 SK1029 実測図

SK1029 (第138図)

調査区南東、G・H-20グリッドで検出した土坑で、規模は長軸1.3m、短軸0.9m、深さ0.08mで平面楕円形状を呈する。埋没後にSP1382が重なっているが、断面は船底状で底は平坦と考えられる。覆土は鉄分・マンガン・炭化物を含む1層暗灰黄色である。比較的浅めの土坑であるが覆土中より土師質土器、陶器、瓦、木製品等が出土した。時期は16世紀と考えられる。

SK1029 出土遺物 (第139図)

340・341は土師質土器で、340は鍋の口縁部で逆く字状に屈曲する。口径は21.8cmである。341は小皿の底部で底径は5.2cmである。342は備前焼播鉢の口縁部で、直立し縁帯が広い。外面に凹線状の窪みを3条施している。V期(古)16世紀後葉に属するものと考えられる。343は木製品である。344は丸瓦の玉縁で凹面側縁に面取りが見られ、11条/cmの布目痕を残す。



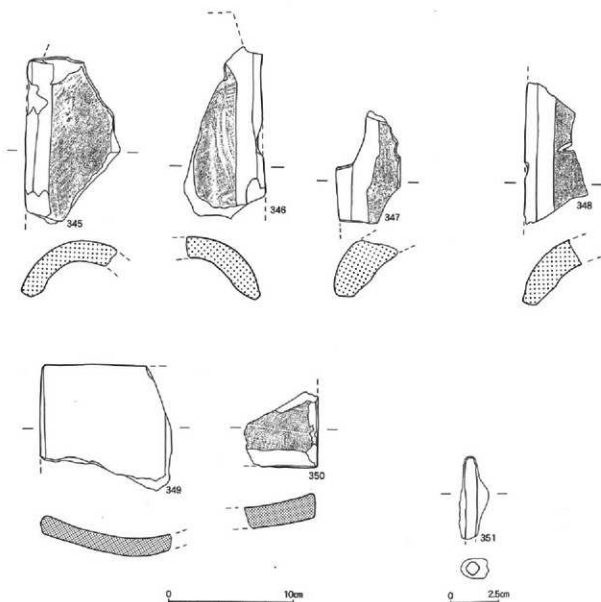
第139図 SK1029 出土遺物実測図

SK1030 (第114図)

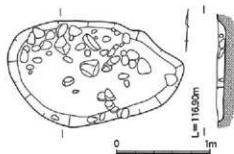
調査区南東、F-19グリッドで検出した土坑で、規模は残存長で長軸2.8m、短軸1.6m、深さ0.3mを測る。東側のSD1014を切る。覆土は1層黄灰色砂質土である。瓦、土師質土器、鉄製品等が出土している。

SK1030 出土遺物 (第140図)

345～350は瓦で、348までが丸瓦である。345～347は玉縁で348は側縁と考える。凹面側縁に面取りを施し、11～13条/cmの布目痕を残している。349・350は平瓦の広・狭端部である。351は不明棒状鉄である。



第140図 SK1030 出土遺物実測図



1 灰黄色 2.5Y7/2 砂質土、鉄分、炭化物含む
10~20cm次の礫を混入

第141図 SK1031 実測図

SK1031 (第141図)

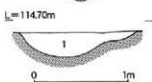
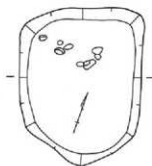
調査区北西、K-1・2グリッドで検出した土坑である。規模は長軸1.8m、短軸1.1m、深さ0.08mで平面不整楕円形を呈する。断面は船底状で底面は平坦である。覆土は鉄分・マンガン・炭化物を含む1層灰黄色砂質土である。比較的浅めの土坑で、10~20cmの礫が多く混入されていた。覆土中より土師質土器の小片47点、丸瓦の小片4点、平瓦の小片5点、陶器・須恵器・磁器それぞれの小片が1点ずつ出土したが図化できるものはない。

SK1033 (第142図)

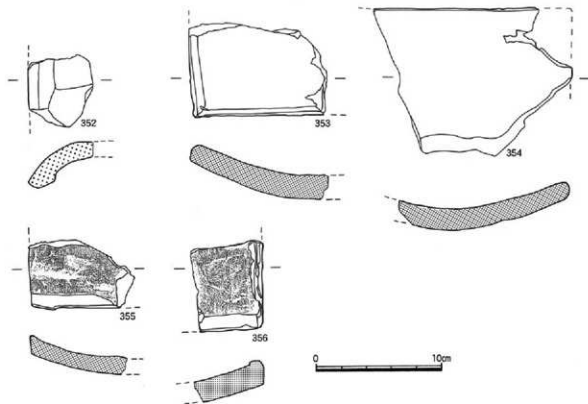
調査区中央、I-12グリッドで検出した土坑である。規模は長軸1.7m、短軸1.3m、深さ0.3mで平面不整形を呈し南側が突出する。断面では東が弱い段状になる。覆土は炭化物を多量に含む1層にぶい橙色砂質土である。覆土中より瓦片が出土した。

SK1033 出土遺物 (第143図)

352～356は瓦である。352は丸瓦の広端部である。353～356は平瓦で厚さは355が1.3cm、他は1.8cmである。355は凹面に10条/cmの布目痕、凸面にはケズリ痕を残し砂粒が付着する。56は平瓦の端部である。



1 にぶい橙色 7.5V6/4 砂質土、焼土
残った瓦片を含む 炭化物を多量に含む
第142図 SK1033 実測図

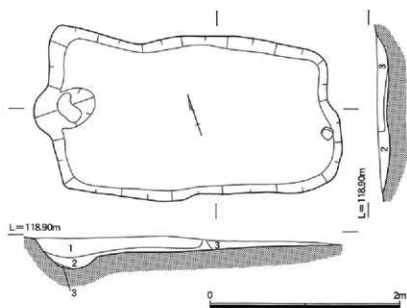


第143図 SK1033 出土遺物実測図

木炭焼成窯 SO (第144・145図)

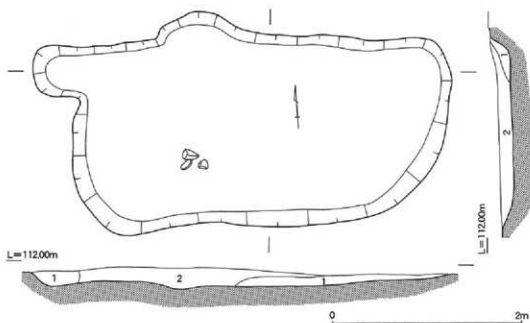
SO1001 (第144図)

中央高台K-9グリッドで検出された土坑で、長軸3.5m、短軸2.1m、深さ20cmを測る。平面両丸長方形で西側縁の肩が張り、16×52cmの煙道又は焚口と考えられる半円形突出部をもつ。小孔は認められなかった。長軸方向はN-74°-W、東西底面のレベル差は12cm、平坦な坑底で東方向に緩やかに上るが半円形の突出部のみが深さ30cm程の落ち込みをもつ。覆土は3層に分層でき、どの層も炭化物を含むが特に第3層に多く見られる。遺物の出土が無いので詳細な時期の決定はできないが、類例から考えて中世以降のものであると考えられる。



- 1 オリーブ褐色 25Y4/3 砂質土、鉄分、炭化物含む
- 2 黒褐色 25Y3/2 砂質土、鉄分、炭化物含む
- 3 黒色 25Y2/1 粘性砂質土、鉄分、炭化物(多量)含む

第144図 SO1001 実測図



- 1 黒色 25Y2/1 粘性砂質土、鉄分(少量)、マンガ(少量)、炭化物(多量)含む
- 2 黒褐色 25Y3/1 砂質土、鉄分、マンガ、炭化物(1より少ない)含む

第145図 SO1002 実測図

SO1002 (第145図)

調査区南、F-13グリッドで検出された土坑で、長軸4.8m、短軸2.4m、深さ22cmを測る。平面隅丸長方形で西側縁の北隅に48×48cmの方形の突出部をもつが、SO1001のような深い落ち込みは見られず位置も違うが、煙道又は焚口であろう。小孔は検出されていない。長軸方向はN-86°-Wでほぼ東西方向に向いており東西底面のレベル差は12cm。平坦な坑底であるが中央部よりやや西に弱い窪みをもっており、東方向に緩やかに上る。覆土は2層で、SO1001と同様西側の突出部と北東隅に炭化物が多く見られる。覆土中より土師質土器の小片20点、丸瓦片2点が出土したが図化できるものなかった。

不明遺構 SX (第146～153図)

SX1001 (第146図)

調査区南西、G-6・7グリッドで検出。規模は長軸8.12m、短軸2.0m、深さ0.12mで東西に細長い遺構である。SD1007を切る。覆土は1層灰黄色砂質土で5cm大の礫が混入されていた。出土遺物は無い。

SX1002 (第147図)

調査区北東、k-17・L-16・17グリッドで検出。長軸6.5m、短軸3.84m、深さ0.34mである。鉄製品が出土している。

SX1002 出土遺物 (第148図)

357は不明棒状鉄製品である。

SX1003 (第149図)

調査区中央南、k-17・L-16・17グリッドSD1011の東側で検出された桶状の遺構である。SD1011に付随するSJまたはSEとも考えられる。堀り片の規模は径1.1～1.2m、深さ74cmである。平坦な坑底に厚さ約3cm、幅20cm余りの板を合わせ円形状に作り、厚さ約2cm、幅6～15cmの長方形の板で囲んでいる。出土遺物は礫と木片である。

SX1003 出土遺物 (第150～153図)

358～362は木桶の底板で363～387は側板である。388～390は木桶内から出土した木片である。

柱穴 SP (第154～209図)

SP1142 (第154図)

K-4グリッドで検出。長軸0.44m、短軸0.3m、深さ0.1mである。土師質土器の羽釜1点と炭化物が出土。

SP1142 出土遺物 (第173図)

391は土師質土器羽釜の口縁部である。口径18.2cm、口縁部内傾、断面三角形の鐮を上向きに付ける。

SP1167 (第155図)

I-3グリッドで検出。長軸0.34m、短軸0.28m、深さ0.08mである。土師質の脚部2点と小片が1点出土。

SP1167 出土遺物 (第174図)

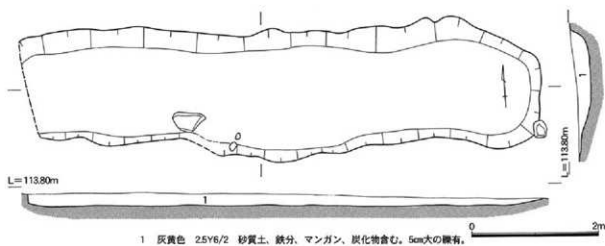
392・393は土師質土器鍋又は釜の脚部である。肩部は直線的に延び、断面は円形である。

SP1222 (第156図)

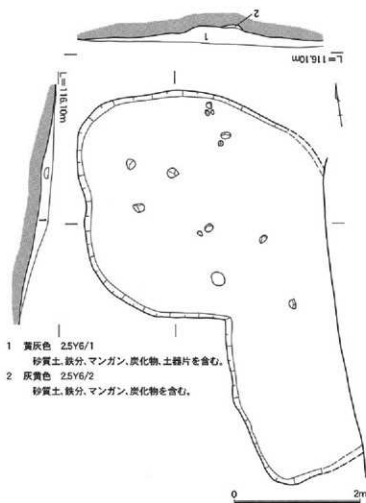
F-7グリッドで検出。長軸0.48m、短軸0.28m、深さ0.1mである。土師質土器杯2点、皿2点、脚部1点が出土。

SP1222 出土遺物 (第175図)

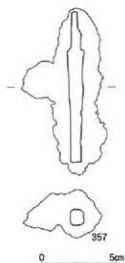
394～398は土師質土器で394・395が杯、396・397が皿、398は鍋または釜の脚部と考える。



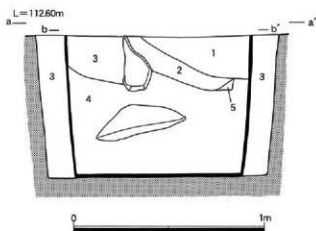
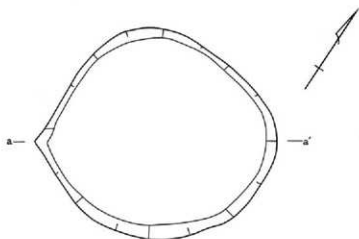
第146図 SX1001 実測図



第147図 SX1002 実測図

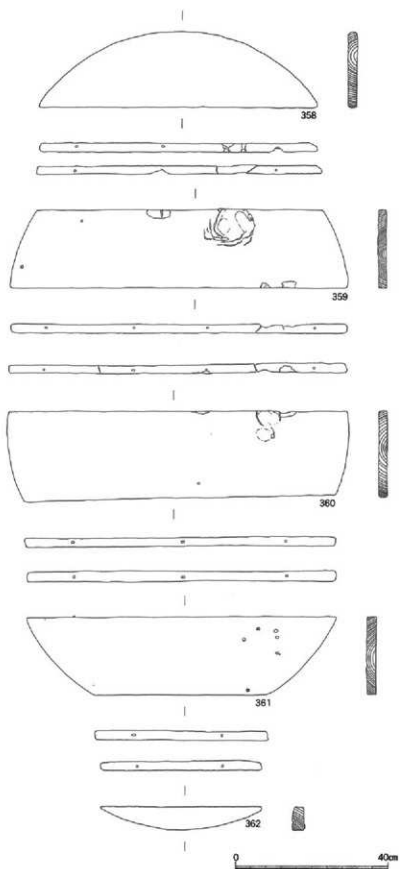


第148図
SX1002 出土鉄製品実測図

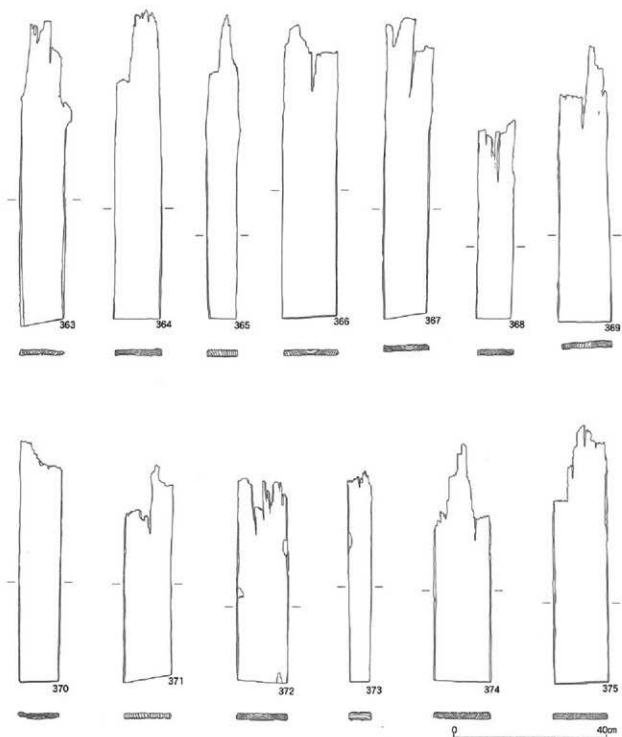


- | | | | |
|---|-------|---------|-----------------|
| 1 | にぶい黄色 | 2.5Y6/3 | 粗砂、鉄分含む |
| 2 | 灰黄色 | 2.5Y6/2 | 砂礫層、鉄分、2cm大の礫含む |
| 3 | 灰黄色 | 2.5Y6/2 | 粗砂、鉄分含む |
| 4 | 黄褐色 | 2.5Y5/3 | 粗砂、鉄分含む |
| 5 | 黄褐色 | 2.5Y5/4 | 細砂、鉄分含む |

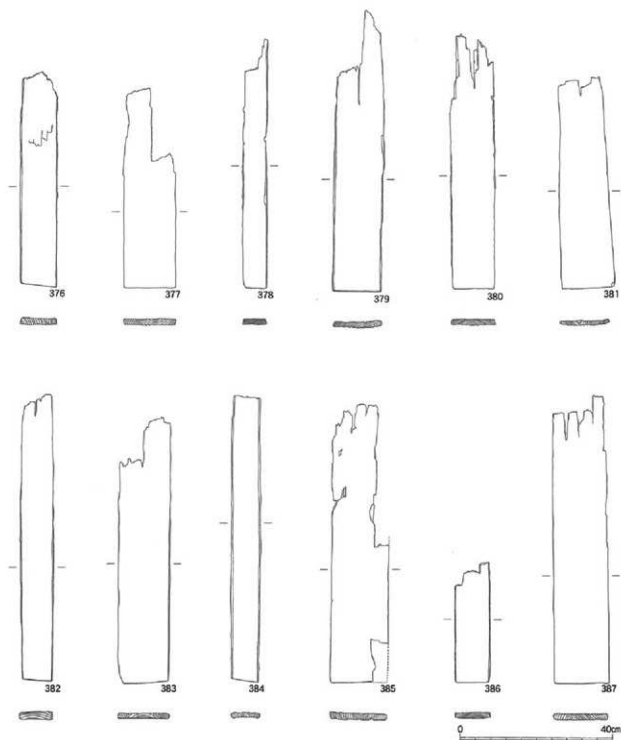
第149図 SX1003 実測図



第150図 SX1003 出土木製品実測図 (1)



第151図 SX1003 出土木製品実測図 (2)



第152図 SX1003 出土木製品実測図 (3)

SP1236 (第157図)

F-9グリッドで検出。長軸0.4m、短軸0.36m、深さ0.06mである。土師質土器杯1点、小片が7点出土。

SP1236 出土遺物 (第176図)

399は土師質土器の杯で外面ナデによる凹凸がある。口縁端部は丸く、底面に回転ヘラ切り痕を残す。

SP1357 (第158図)

G-19グリッドで検出。長軸0.42m、短軸0.18m、深さ0.42mである。平瓦の側縁部が1点、小片が1点、土師質土器の小片が5点出土。

SP1357 出土遺物 (第177図)

400は平瓦の側縁部である。凹凸面共に砂粒が見られる。

SP1379 (第159図)

H-19・20グリッドで検出。長軸0.44m、短軸0.28m、深さ0.12mである。平瓦が1点、小片が1点、丸瓦の側縁部が1点、小片が1点、土師質土器の小片が1点、陶器の小片が1点出土。

SP1379 出土遺物 (第178図)

401は丸瓦の側縁部、402は軒平瓦の瓦当部である。402の瓦当幅は狭い。文様は連珠文で上下に圈線を有し、顎裏面と平瓦面は曲線を呈する。顎裏面は横方向のナデ、珠は小さく径4~5cmである。凹面に9条/cmの布目痕を残している。室町時代前期に属すると考えられる。

SP1385 (第160図)

H-20グリッドで検出。長軸0.76m、短軸0.38m、深さ0.34mである。土師質土器播鉢が1点出土。

SP1385 出土遺物 (第179図)

403は土師質土器播鉢で4条/cmの櫛条線を残している。口縁部を内傾させ、外面に平坦面を作る。

SP1403 (第161図)

H-21グリッドで検出。長軸0.36m、短軸0.33m、深さ0.4mである。丸瓦の広端部が1点出土。

SP1403 出土遺物 (第180図)

404は丸瓦の広端部で9条/cmの布目痕を残す。横幅11.0cm、高さ5.2cm、厚さ2.1cmである。

SP1409 (第162図)

G-21グリッドで検出。長軸0.15m、短軸0.14m、深さ0.04mである。銅銭の「熙寧元寶」が1点出土。

SP1409 出土遺物 (第181図)

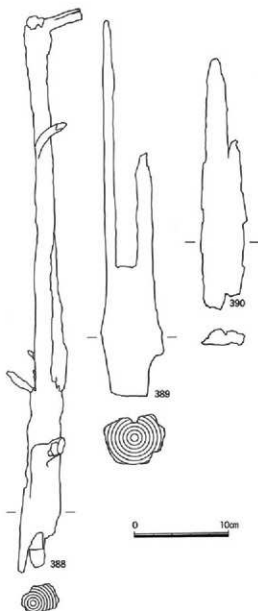
405は北宋銭「熙寧元寶」真書で初鑄年は1068年である。

SP1412 (第163図)

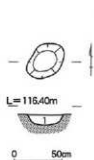
G-21グリッドで検出。長軸0.58m、短軸0.44m、深さ0.11mである。丸瓦の広端部が1点出土。

SP1412 出土遺物 (第182図)

406は丸瓦の広端部である。広端面の縦幅3.9cm、厚さ1.5cmである。

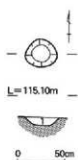


第153図 SX1003 出土木製品実測図 (4)



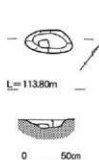
1 灰黄色 2.5Y6/2 砂質土

第154図 SP1142 実測図



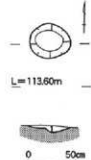
1 灰黄色 2.5Y6/2 砂質土、鉄分、マンガ、炭化物、土器片含む

第155図 SP1167 実測図



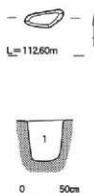
1 灰黄色 2.5Y6/2 砂質土、鉄分、マンガ、炭化物含む

第156図 SP1222 実測図



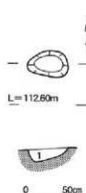
1 灰黄色 2.5Y6/2 砂質土

第157図 SP1236 実測図



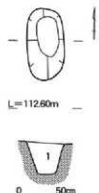
1 暗灰黄色 2.5Y5/2 砂質土、鉄分、マンガ、炭化物含む

第158図 SP1357 実測図



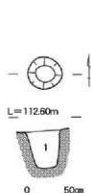
1 暗灰黄色 2.5Y5/2 砂質土、鉄分、マンガ、炭化物含む

第159図 SP1379 実測図



1 黄灰色 2.5Y5/1 砂質土、鉄分、マンガ、炭化物含む

第160図 SP1385 実測図



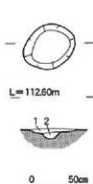
1 暗灰黄色 2.5Y5/2 砂質土

第161図 SP1403 実測図



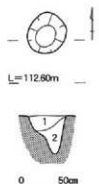
1 黄灰色 2.5Y6/1 砂質土、鉄分、マンガ、炭化物含む

第162図 SP1409 実測図



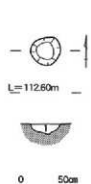
1 黄灰色 2.5Y6/1 砂質土、鉄分、マンガ含む
2 黄灰色 2.5Y5/1 砂質土、鉄分、マンガ、炭化物含む

第163図 SP1412 実測図



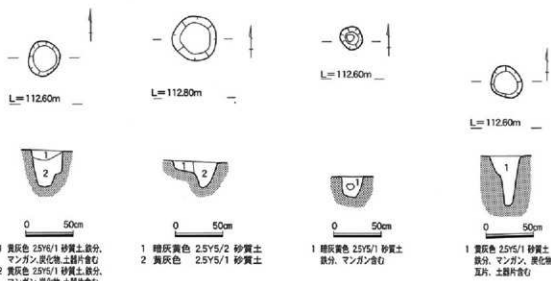
1 黄灰色 2.5Y6/1 砂質土、鉄分、マンガ、炭化物含む
2 黄灰色 2.5Y5/1 砂質土、鉄分、マンガ、炭化物、土器、瓦片含む

第164図 SP1413 実測図

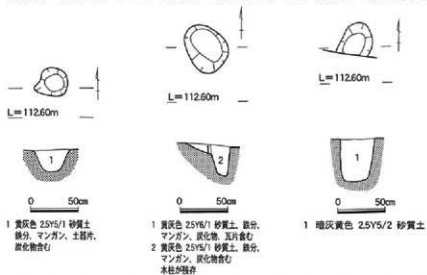


1 暗灰黄色 2.5Y5/2 砂質土、鉄分、マンガ、炭化物含む

第165図 SP1414 実測図



第166図 SP1417 実測図 第167図 SP1418 実測図 第168図 SP1443 実測図 第169図 SP1448 実測図



第170図 SP1479 実測図 第171図 SP1480 実測図 第172図 SP1485 実測図

SP1413 (第164図)

G-21グリッドで検出。長軸0.44m、短軸0.39m、深さ0.4mである。丸瓦の広端部が1点出土。

SP1413 出土遺物 (第183図)

407は丸瓦の広端部である。広端面の縦幅2.1cm、厚さ1.3cmである。

SP1414 (第165図)

G-21グリッドで検出。長軸0.32m、短軸0.28m、深さ0.1mである。丸瓦の側縁部が1点出土。

SP1414 出土遺物 (第184図)

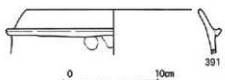
408は丸瓦の側縁部である。厚さ1.9cmである。

SP1417 (第166図)

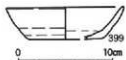
G-20・21グリッドで検出。長軸0.38m、短軸0.32m、深さ0.38mである。鉄製品が1点出土。

SP1417 出土遺物 (第185図)

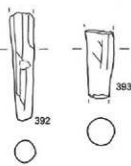
409は鉄製品釘と考える。



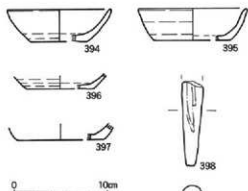
第173图 SP1142 出土遺物実測図



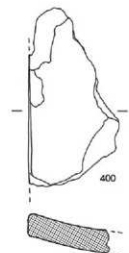
第176图 SP1236 出土遺物実測図



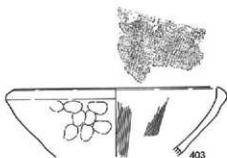
第174图 SP1167 出土遺物実測図



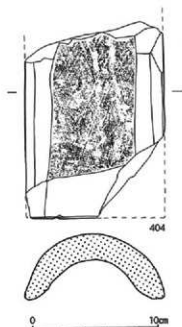
第175图 SP1222 出土遺物実測図



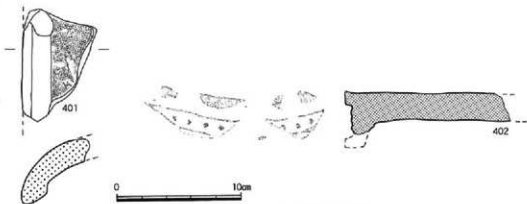
第177图 SP1357 出土遺物実測図



第179图 SP1385 出土遺物実測図



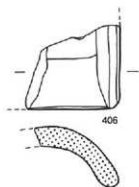
第180图 SP1403 出土遺物実測図



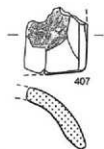
第178图 SP1379 出土遺物実測図



第181図 SP1409 出土銅銭



第182図
SP1412 出土遺物実測図



第183図
SP1413 出土遺物実測図



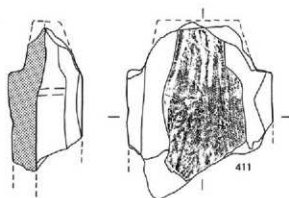
第184図
SP1414 出土遺物実測図



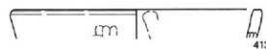
第185図
SP1417 出土鉄製品



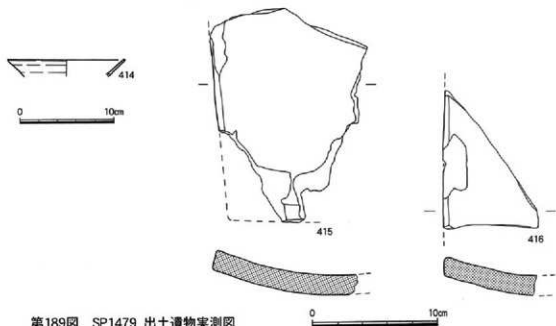
第186図
SP1418 出土鉄製品



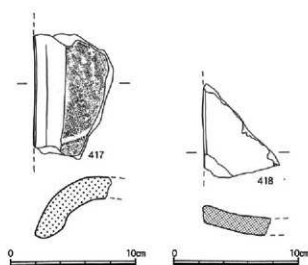
第187図 SP1443 出土遺物実測図



第188図 SP1448 出土遺物実測図



第189図 SP1479 出土遺物実測図



第190図
SP1480 出土遺物実測図

第191図
SP1485 出土遺物実測図

SP1418 (第167図)

G-21グリッドで検出。長軸0.48m、短軸0.46m、深さ0.27mである。棒状鉄片と土師器土器小片が出土。

SP1418 出土遺物 (第186図)

410は鉄製品釘と考える。

SP1443 (第168図)

F-19グリッドで検出。長軸0.24m、短軸0.22m、深さ0.22mである。丸瓦が2点出土。

SP1443 出土遺物 (第187図)

411は丸瓦の玉縁である。胴部横幅11.4cm、高さ5.3cm、厚み1.9cmである。

SP1448 (第169図)

H-19グリッドで検出。長軸0.37m、短軸0.31m、深さ0.54mである。土師質土器鍋2点と平瓦が出土。

SP1448 出土遺物 (第188図)

412・413は鍋の口縁部である。412は内彎させ端部は丸く、413は端部を凹面に仕上げている。

SP1479 (第170図)

H-19グリッドで検出。長軸0.36m、短軸0.28m、深さ0.22mである。土師質土器杯(皿)1点、平瓦2点が出土。

SP1479 出土遺物 (第189図)

414は土師質土器杯または皿の口縁部である。415・416は平瓦で、凹凸面共に砂粒が多く付着している。

SP1480 (第171図)

G-20グリッドで検出。長軸0.52m、短軸0.4m、深さ0.32mである。丸瓦の側縁部が1点出土。

SP1480 出土遺物 (第190図)

417は丸瓦の側縁部である。凹面に11条/cmの布目痕を残す。厚さ1.7cmである。

SP1485 (第172図)

G-20グリッドで検出。長軸0.52m、短軸0.34m、深さ0.44mである。南側を造成のため削平される。平瓦の側縁部が1点、小片が1点、土師質土器の小片が4点出土。

SP1485 出土遺物 (第191図)

418は平瓦の側縁部である。凹凸面共に砂粒が付着している。

以下のSPについては出土遺物が図化できなかつたため遺構のみ掲載した。

SP1093 (第192図)

L-13グリッドで検出。長軸0.24m、短軸0.14m、深さ0.1mである。土師質土器の小片が10点出土。

SP1112 (第193図)

N-15グリッドで検出。長軸0.32m、短軸0.3m、深さ0.34mである。土師質土器の小片が1点出土。

SP1250 (第194図)

L-10グリッドで検出。長軸0.56m、短軸0.5m、深さ0.1mである。土師質土器の小片3点、瓦片2点が出土。

SP1265 (第195図)

D-8グリッドで検出。長軸0.18m、短軸0.14m、深さ0.08mである。丸瓦の小片が2点出土。

SP1288 (第196図)

E-13グリッドで検出。長軸0.76m、短軸0.60m、深さ0.16mである。平瓦の小片が1点出土。

SP1311 (第197図)

G-17グリッドで検出。長軸0.66m、短軸0.46m、深さ0.21である。土師質土器の小片が3点出土。

SP1378 (第198図)

H-19・20グリッドで検出。長軸0.26m、短軸0.22m、深さ0.38mである。土師質土器の小片が2点出土。

SP1389 (第199図)

G・H-20グリッドで検出。長軸0.36m、短軸0.32m、深さ0.1mである。平瓦の小片が2点出土。

SP1398 (第200図)

G-20グリッドで検出。長軸0.4m、短軸0.37m、深さ0.1mである。土師質土器の小片が2点出土。

SP1404 (第201図)

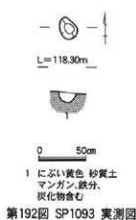
H-21グリッドで検出。長軸0.32m、短軸0.28m、深さ0.28mである。土師質土器の小片が2点出土。

SP1405 (第202図)

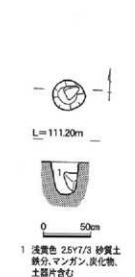
H-21グリッドで検出。長軸0.42m、短軸0.36m、深さ0.32mである。土師質土器の小片が3点、磁器片が3点出土。

SP1410 (第203図)

G-21グリッドで検出。長軸0.30m、短軸0.26m、深さ0.28mである。土師質土器の小片が1点、磁器の小片が1点、炭化物が出土。



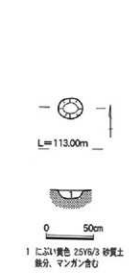
第192図 SP1093 実測図



第193図 SP1112 実測図



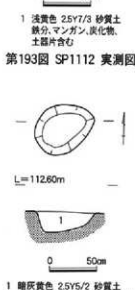
第194図 SP1250 実測図



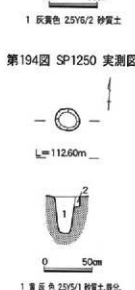
第195図 SP1265 実測図



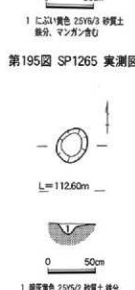
第196図 SP1288 実測図



第197図 SP1311 実測図



第198図 SP1378 実測図



第199図 SP1389 実測図

SP1419 (第204図)

G-21グリッドで検出。長軸0.44m、短軸0.42m、深さ0.42mである。土師質の小片が1点、丸瓦の小片が1点出土。

SP1444 (第205図)

G-20グリッドで検出。長軸0.26m、短軸0.22m、深さ0.14mである。平瓦の小片が1点出土。

SP1454 (第206図)

L-13グリッドで検出。長軸0.42m、短軸0.41m、深さ0.23mである。丸瓦の小片が2点出土。

SP1473 (第207図)

F-22グリッドで検出。長軸0.32m、短軸0.32m、深さ0.26mである。土師器の小片が1点出土。

SP1478 (第208図)

K-13グリッドで検出。長軸0.25m、短軸0.21m、深さ0.12mである。丸瓦の小片が3点出土。

SP1483 (第209図)

G-21グリッドで検出。長軸0.36m、短軸0.32m、深さ0.3mである。平瓦の小片が1点出土。



L=112.60m



0 50cm

1 黄灰色 2.5Y5/1 砂質土
鉄分、マンガン含む

第200図 SP1398 実測図



L=112.60m



0 50cm

1 暗灰黄色 2.5Y5/2 砂質土
鉄分、マンガン、炭化物含む

第201図 SP1404 実測図



L=112.60m



0 50cm

1 暗灰黄色 2.5Y5/2 砂質土
鉄分、マンガン、炭化物、土器片含む

第202図 SP1405 実測図



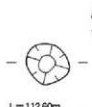
L=112.60m



0 50cm

1 暗灰黄色 2.5Y5/1 砂質土
鉄分、マンガン、炭化物、土器片含む

第203図 SP1410 実測図



L=112.60m



0 50cm

1 黄灰色 2.5Y5/1 砂質土
鉄分、マンガン、炭化物含む
2 暗灰黄色 2.5Y5/2 砂質土
鉄分、マンガン、炭化物、土器片含む

第204図 SP1419 実測図



L=112.60m



0 50cm

1 暗灰黄色 2.5Y5/2
鉄分、マンガン、炭化物含む

第205図 SP1444 実測図



L=112.60m



0 50cm

1 暗灰黄色 2.5Y5/2 砂質土
鉄分、マンガン、炭化物、土器片含む

第206図 SP1454 実測図



L=112.60m



0 50cm

1 暗灰黄色 2.5Y5/2 砂質土
鉄分、マンガン、炭化物、土器片含む

第207図 SP1473 実測図



L=112.60m

0 50cm

1 暗灰黄色 2.5Y5/2 砂質土
鉄分、マンガン、炭化物、瓦片含む

第208図 SP1478 実測図



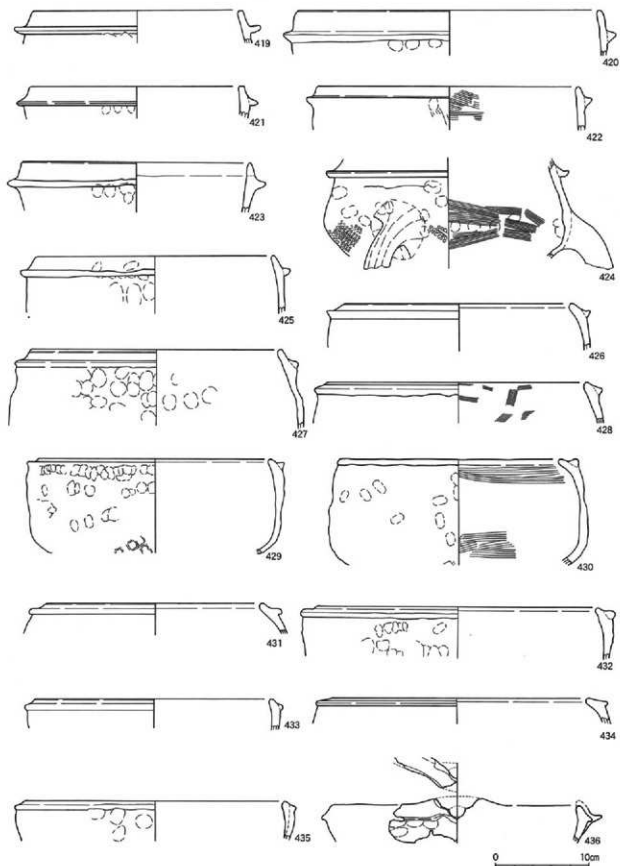
L=112.60m



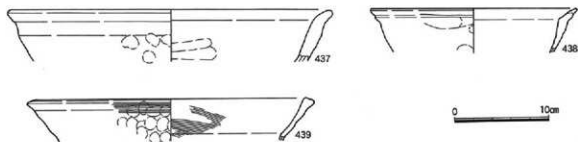
0 50cm

1 暗灰黄色 2.5Y5/2 砂質土
鉄分、マンガン、炭化物、土器片含む

第209図 SP1483 実測図



第210図 包含層出土遺物実測図(1)



第211図 包含層出土遺物実測図(2)

(4) 包含層出土遺物② (第210~153図)

土師質土器 (第210~213図)

釜 419~435は釜である。口縁部外面に鈿を持ち、断面方形のしっかりとした鈿をもつものから、口縁部の上端近くに痕跡程度に形骸化した鈿をもつものまでを含めて釜とした。口径は最小22.0cm(419)~最大31.8cm(420)である。口縁部の形態は内傾するものが多い。僅かに内傾するもの(419・420・422・425)、大きく内傾するもの(424・426~432・434)がある。直立するものは(421・423・433・435・436)である。端部は断面が方形のもの(419・421・424・427)、丸いもの(420・422・425・426・429~433・436)、尖り気味のもの(423)、凹面や平坦面に近いもの(428・434・435)が見られる。鈿の形状は方形で長い(419)、短い(431)、三角形状(420~423・426~429)、半円形状(425・430・432・433)、退化したもの(435)等がある。体部においては、外面底部近くにタタキ目を残すもの(324・429)、外面にユビオサエを残すもの(419~425・427・429・430・432・435・436)、内面にハケ目を残すもの(422・424・428・430)等である。424は屈曲した基部をもち、436は基部に円孔のある把手をもつ。

鍋 437~439は鍋である。437は口縁部が外反、438は口縁部を拡張させ緩やかに外反させる。439は直線的に延び、端面を平坦に作る。内外面にユビオサエやハケ目が見られる。

脚部 440~464は脚部である。440~463は土師質土器釜または鍋の脚であるが、464は胎土、形状共に違いを見せる。仏具燭台等の脚とも考えられる。440~449は基部が屈曲し、身部は直線的に延びる。ユビナデ、ユビオサエ、ケズリが見られる。身部上位の径は2.4~3.6cmである。450~463は身部のみで基部の形状は分からない。身部中位の径は1.6~2.7cmである。

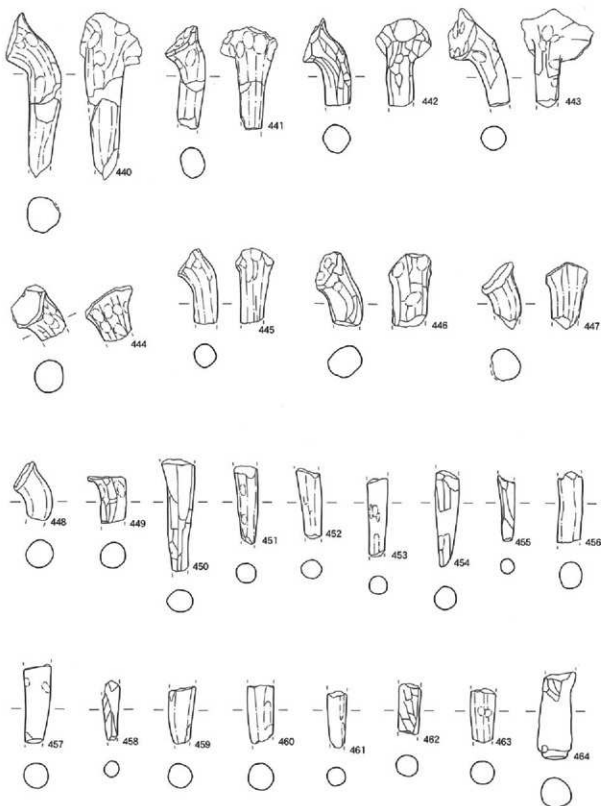
搦鉢 465~469は搦鉢で、468までが口縁部、469が底部である。口径は23.2cm(468)~33.0cm(465)と幅がある。内面には櫛描条痕を残す。口縁部の形態は上方に延びるもの(465・466・468)、内傾するもの(467)がある。

杯 470~479は杯である。口径は9.8cm(476)~13.1cm(474)、底径は5.0cm(479)~8.1cm(470・474)、器高は2.4cm(479)~4.2cm(477)である。口縁端部の形態は丸いものが多いが、尖り気味のもの(472・474・477)がある。体部においては、直線的に延びるものが多いが内彎気味(478・479)もある。

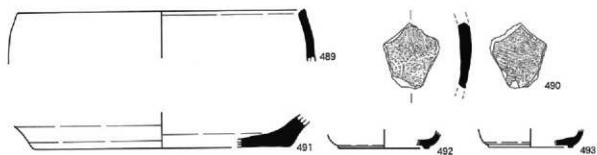
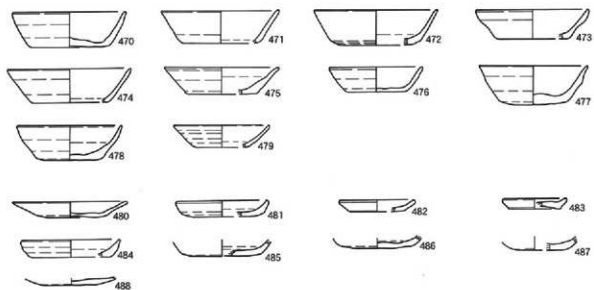
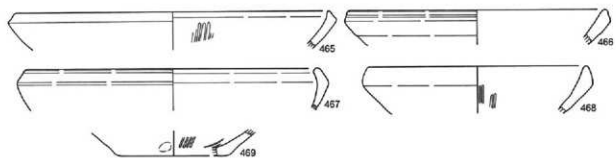
皿 480~488は皿である。残存状態が悪く、全体の形状を明らかにできるものは少ない。底径は5.0cm(487)~8.2cm(484)、器高は480~484までで1.1cm(483)~1.9cm(484)である。

須恵器 (第213図)

鉢・甕・杯(皿) 489~493は須恵器である。489は鉢で口径が30.8cm、490・491は甕で490は内面に同心円の当具痕がある。492・493は杯(皿)と考える。

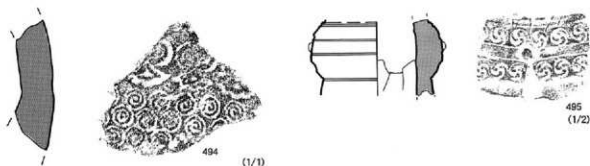


第212図 包含層出土遺物実測図(3)



0 10cm

第213图 包含層出土遺物実測図(4)



瓦質土器 (第213図)

花瓶・火鉢 494～496は瓦質土器である。494は厚さ0.9cmの体部片であるが、器種は不明である。495は花瓶である。外面に径1cmの右巻き三巴が見られる。496は火鉢である。外面に菊花紋を施す。



瓦 (第215～257図)

第214図 包含層出土遺物実測図 (5)

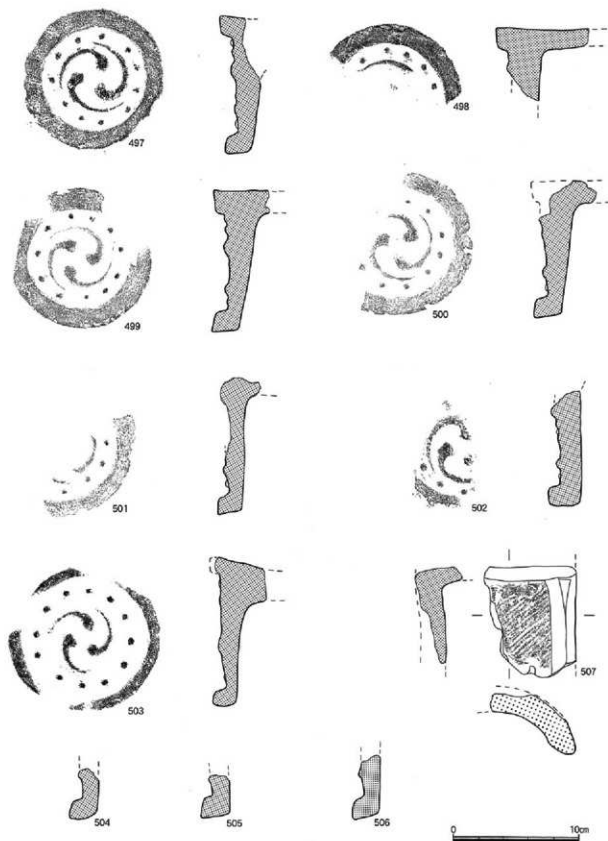
瓦類は多量に出土した。図化できた瓦を種類別に見ると軒丸瓦14点、丸瓦300点、軒平瓦17点、平瓦192点、熨斗瓦28点、雁振瓦5点、鬼瓦9点である。

軒丸瓦 (第215図)

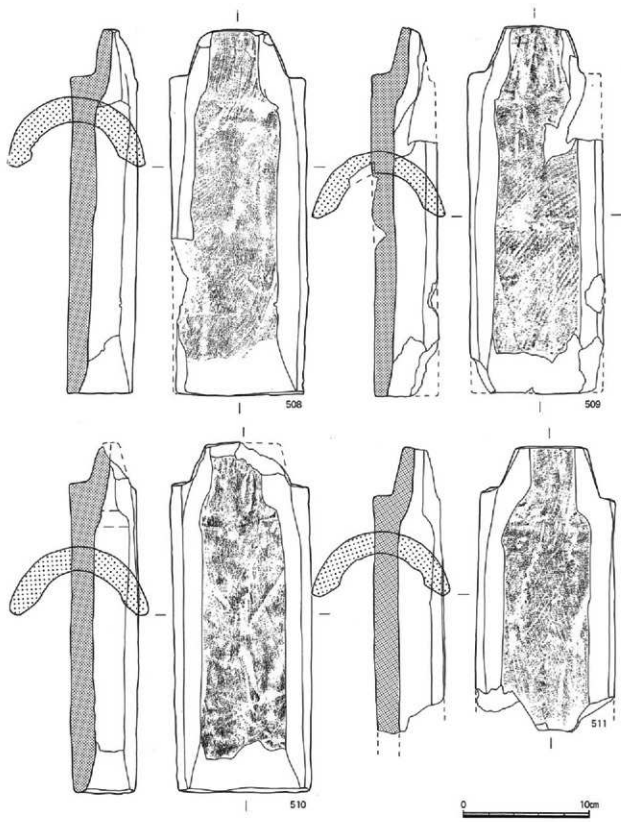
497～507は軒丸瓦である。瓦当部が欠損したものや小片のものも含めて掲載した。珠紋数は497・499が11、503が12である。外縁幅は1.8cm前後、外縁高は0.9～1.0cmである。珠紋は小さく間隔は開いており、巴頭部は丸みがありくびれをもつものがある。尾は短く、圏線はない。室町時代後期16世紀の所産と考えられる。497は灰色を呈し珠紋数11、径11.1cm、外縁高0.9cm、下部瓦当厚1.9cm、巴頭部は丸くくびれが見られ、尾は短い。498は灰色で外縁高1.0cmで瓦当裏面にナデが見られ、凹面に布目痕を残す。499は暗灰色で珠紋数11、径11.3cm、外縁高1.0cm、下部瓦当厚2.1cm、巴頭部は丸くくびれが見られ、尾は短い。500は暗灰色で径11.1cm、外縁高1.0cm、下部瓦当厚2.1cm、巴頭部は丸くくびれが見られ、尾は短い。501は暗灰色で外縁高1.0cm、下部瓦当厚1.9cm、巴部は摩滅しているが尾は短いものと思われる。502は灰色で外縁高1.0cm、下部瓦当厚2.4cm、巴頭部は丸くくびれが見られ、尾は短い。503は径11.8cm、外縁高1.0cm、下部瓦当1.8cm、巴頭部は丸く尾は短い。504～506の外縁高は1.1～1.2cm、瓦当厚は2.1～2.3cmである。507は瓦当部は剥離し凹面にコビキ痕を残す。

丸瓦 (第216～233図)

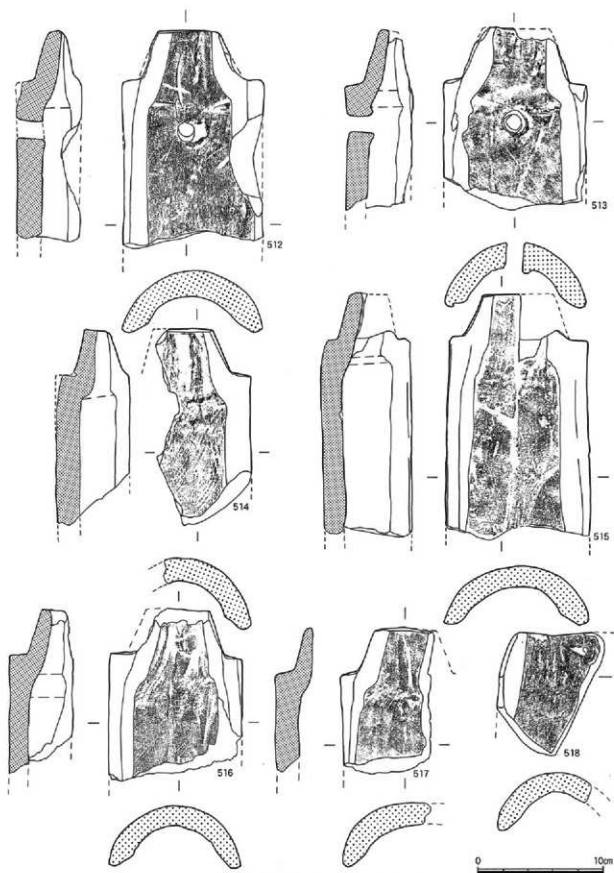
508～695は丸瓦である。508～510は完形に近い。横幅10.5cm(509)～11.0cm(510)、胴部側縁長22.8cm(509)～25.0cm(508)、高さ5.2cm(509)～5.5cm(508)、厚さ1.7cm(509)～2.0cm(508)、玉縁端面横幅4.6(508)、4.9(509)、玉縁側縁長は3.3(510)～4.2(508)である。凹面には11～12条の布目痕、凸面には縄目痕を残している。511～577は胴と広端部が欠損したものである。割れるもので胴部の横幅は最小10.4(516・539)～最大11.9(528・531)、高さ最小4.7(515)～最大6.0(531)、厚さ最小1.4(567)～最大2.4(536)、玉縁端面横幅最小5.1(542)～最大5.7(511・552)、玉縁側縁長1.0(539)～1.5(524・542)、凹面側縁においてはすべて玉縁から胴部にかけて面取りが見られる。玉縁端面の面



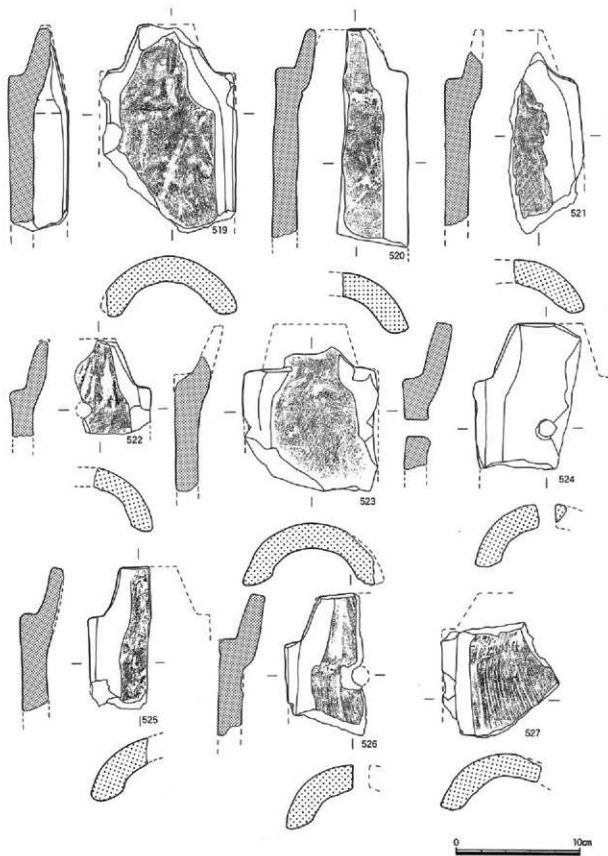
第215図 包含層出土遺物実測図 (6)



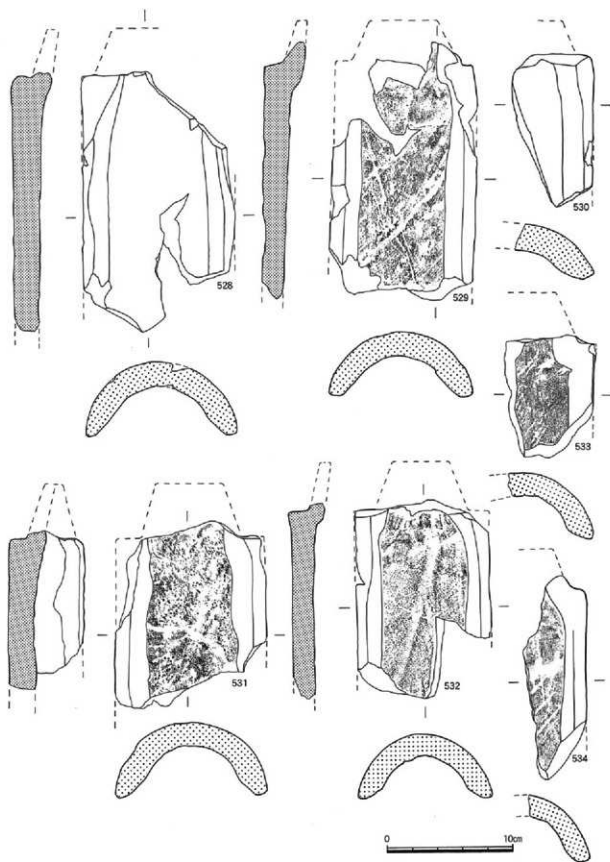
第216図 SK1025 出土遺物実測図 (7)



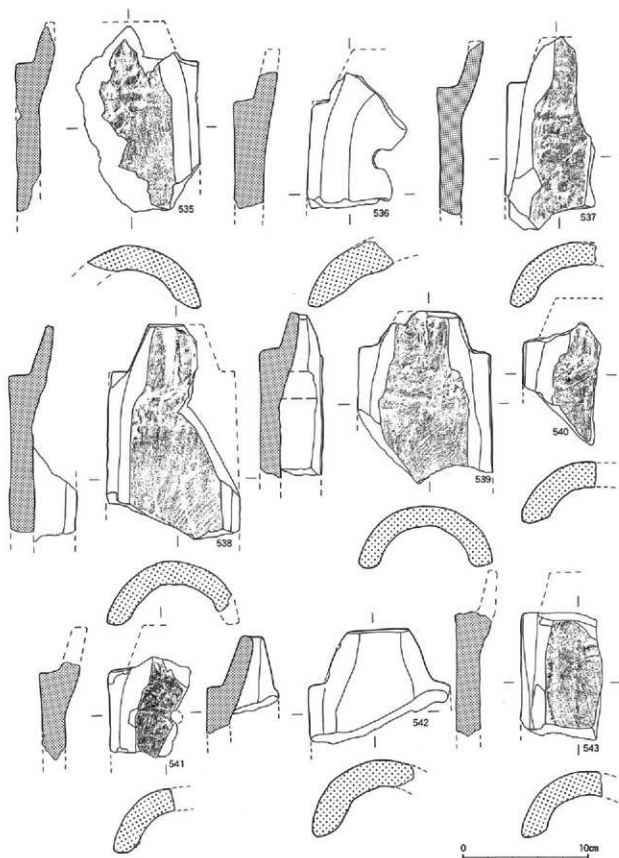
第217图 包含層出土遺物実測図(8)



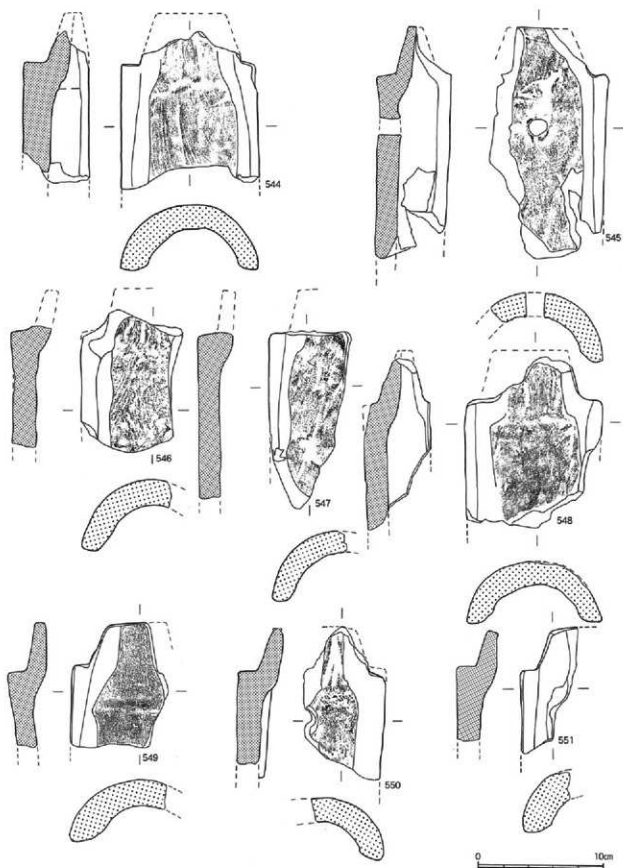
第218图 包含層出土遺物実測図 (9)



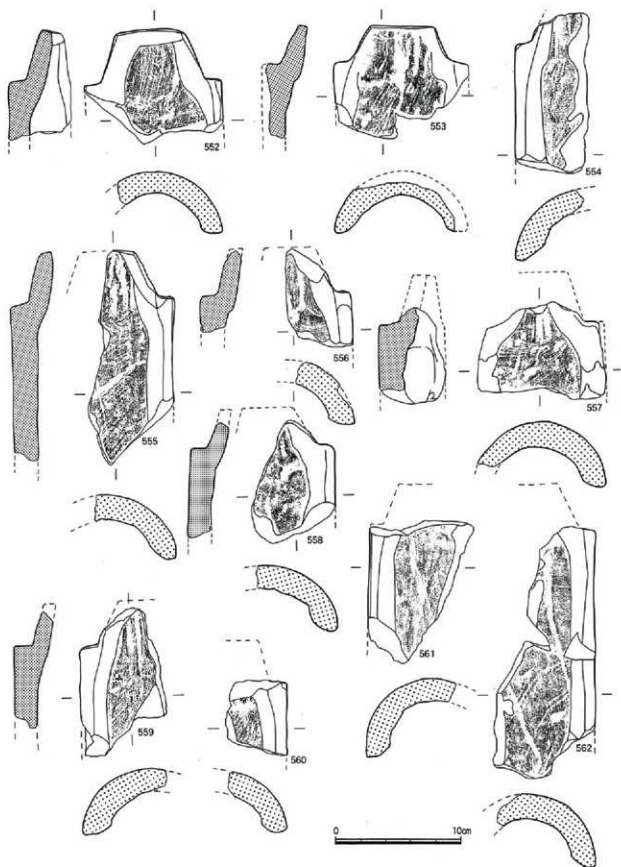
第219图 包含层出土遗物实测图 (10)



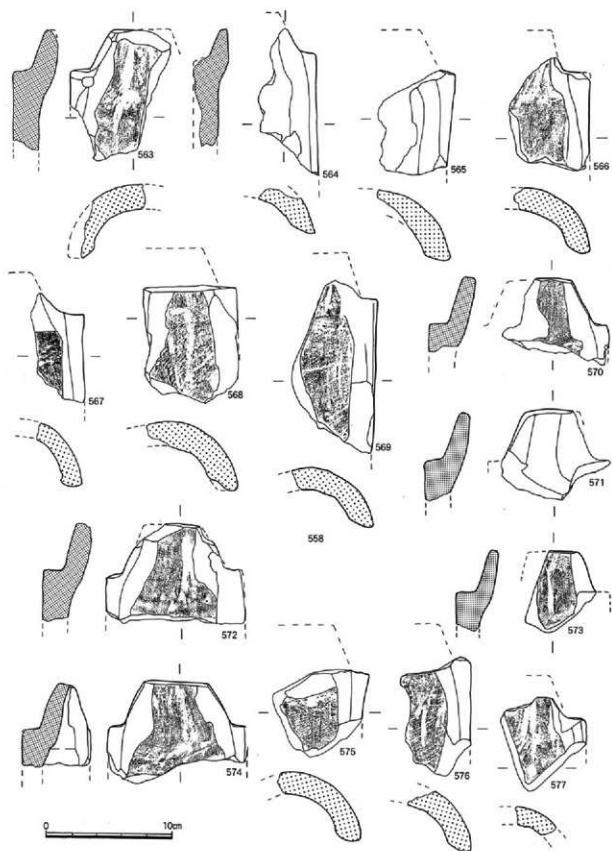
第220図 包含層出土遺物実測図 (11)



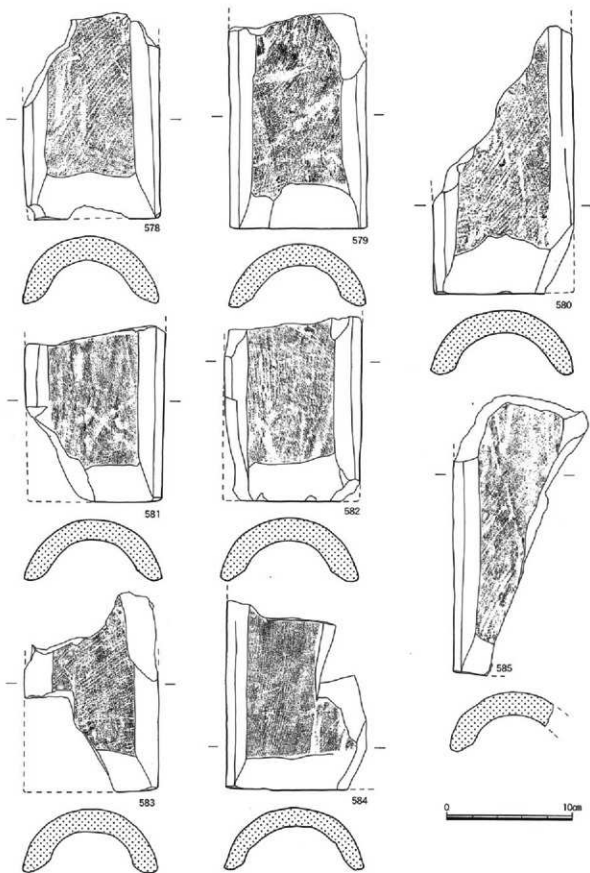
第221図 包含層出土遺物実測図 (12)



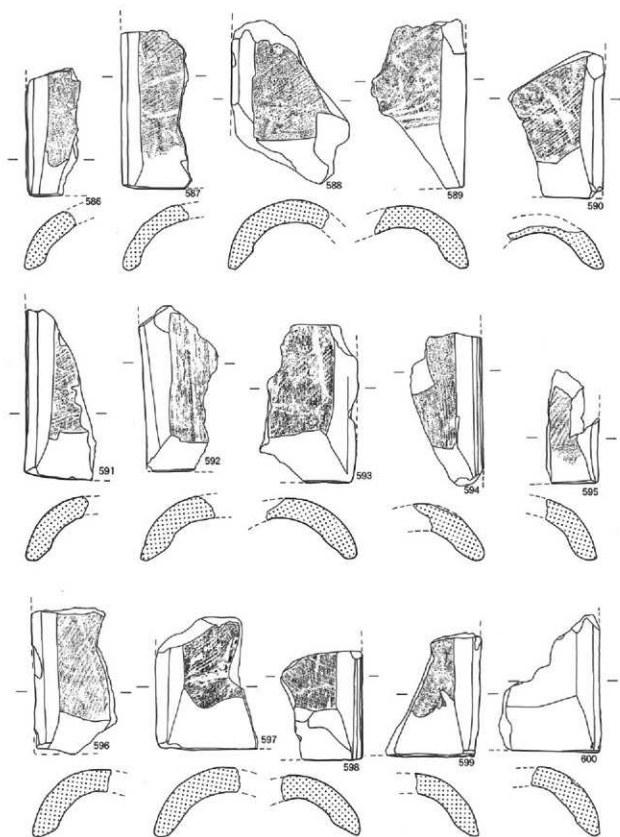
第222図 包含層出土遺物実測図 (13)



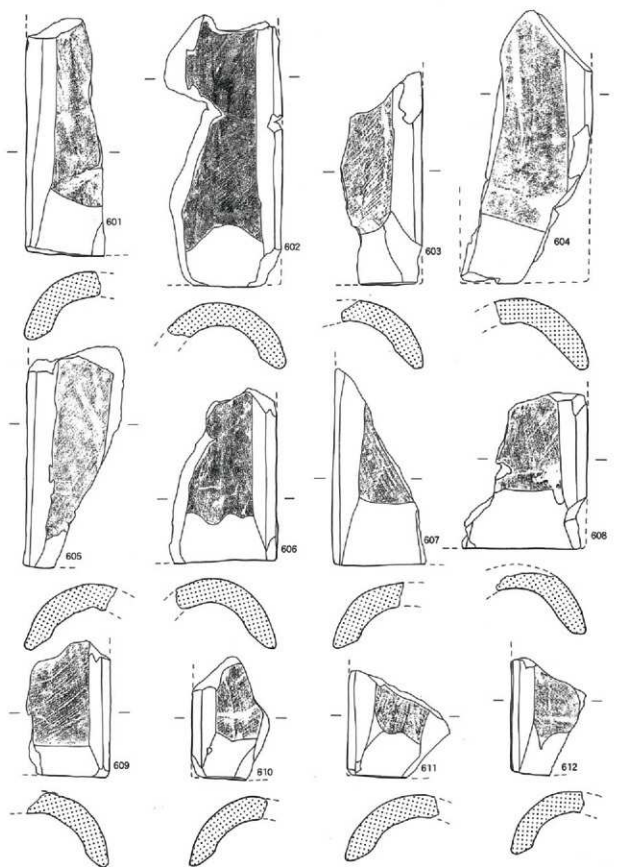
第223圖 包含層出土遺物実測図 (14)



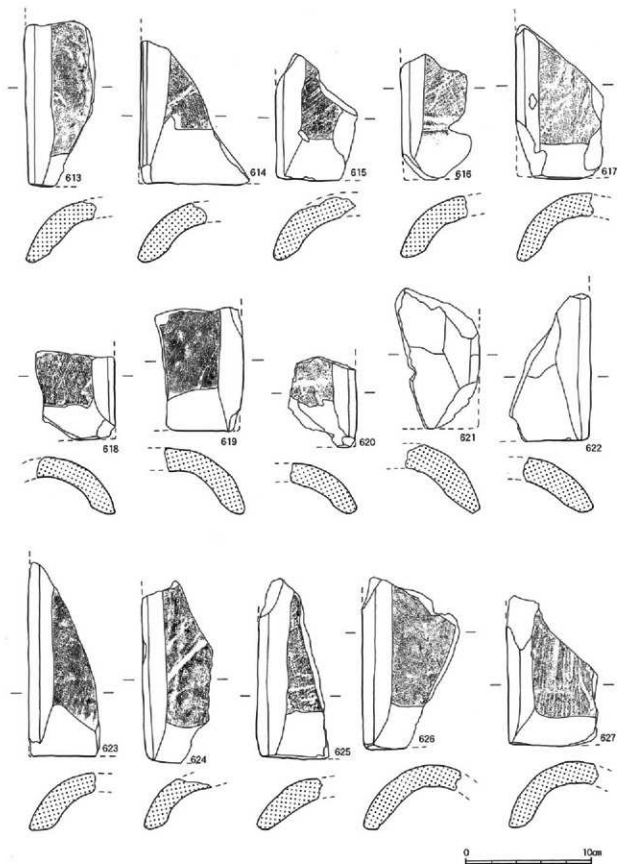
第224图 包含层出土物实测图 (15)



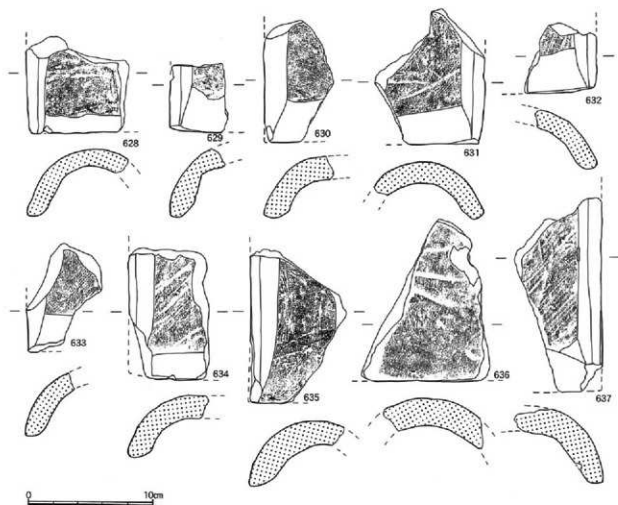
第225図 包含層出土遺物実測図 ⑩



第226図 包含層出土遺物実測図 (17)

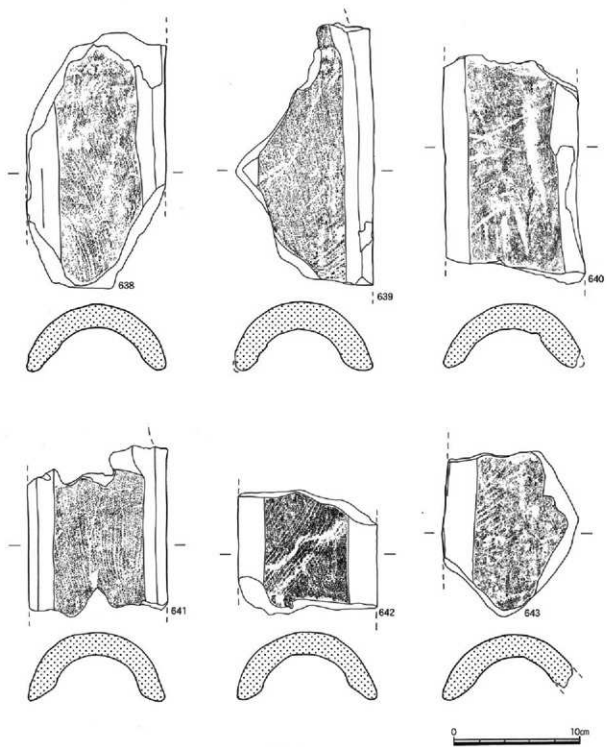


第227図 包含層出土遺物実測図 08

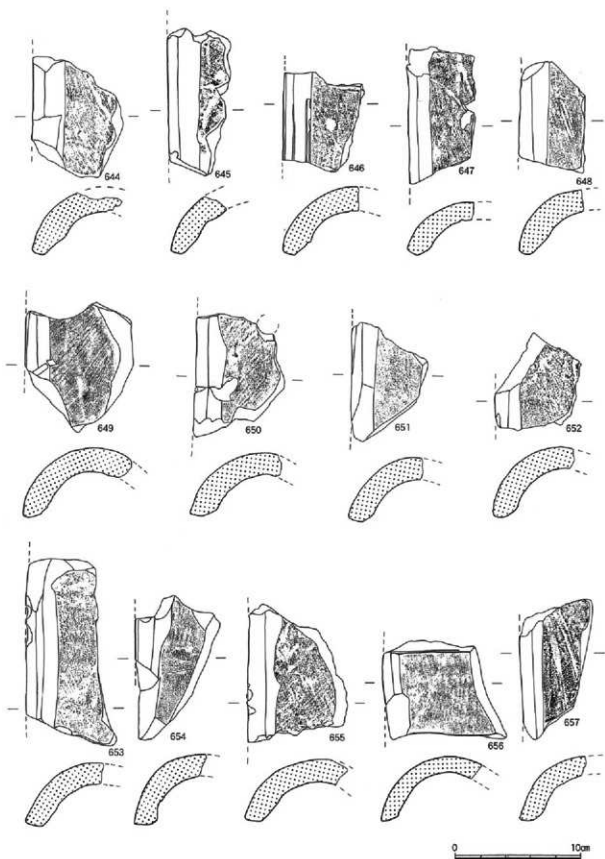


第228図 包含層出土遺物実測図 19

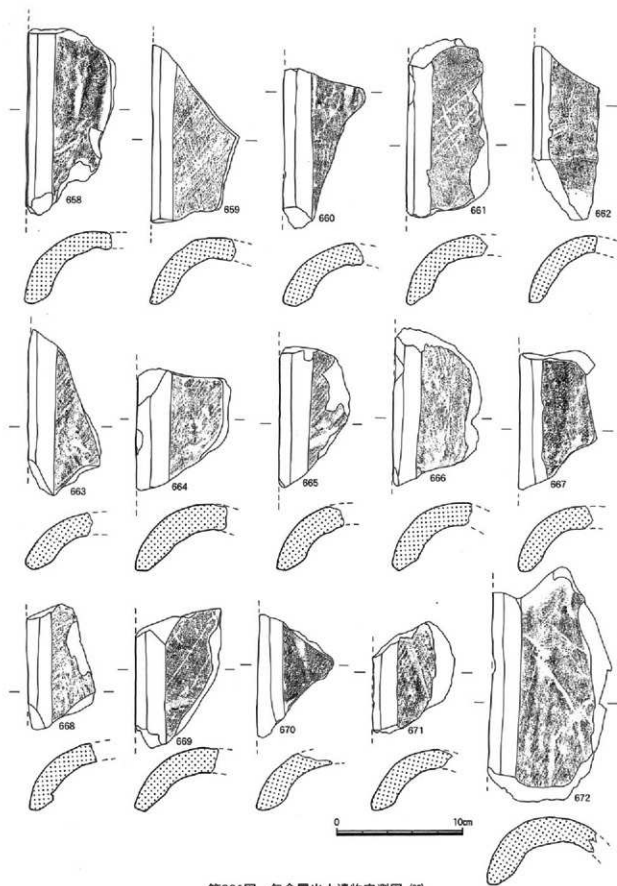
取りはあるものとないものに分かれる。凹面には殆どが細かい布目痕(9~13条/cm)を残す。また、粘土角材から粘土板を切り取る時にできる斜め方向の緩弧線コビキや布皺の見られるものが多い。釘穴を残すものは(512・513・522・524・526・536・541・545・550)である。578~637は丸瓦の広端部である。法量を計測できるものは少ないが、横幅は最小10.6cm(583)~最大11.1cm(580)、高さ最小4.9cm(579・581)~最大5.3cm(578)、厚さ最小1.3cm(587)~最大2.2cm(636)、凹面の広端面縦長は最小2.1cm(634)~最大6.0cm(621)である。広端面の面取りは殆どが行われているが見られないもの(635・636)、側縁部において面取りが見られないもの(583・589・619・630)がある。凹面には細かい布目痕(9~14条/cm)を残し、粘土角材から粘土板を切り取る時にできる斜め方向の緩弧線コビキや布皺の見られるものがある。638~695は胴、側縁部分である。横幅が計測できたものは4点で10.5cm~11.0cmで、厚さは最小1.4cm(656)、最大2.2cm(673)である。凹面には細かい布目痕(8~14条/cm)を残し、コビキや布皺の見られるものが多い。側縁を面取りするものが殆どだが、しないもの(640・642・643・662・688・690)がある。凸面にはナデ調整や、縄目痕の見られるものがある。



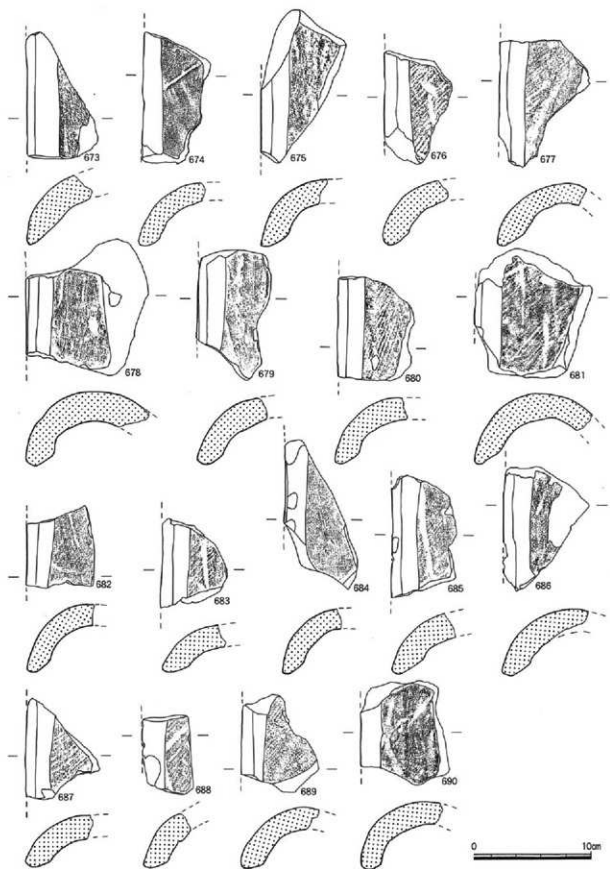
第229圖 包含層出土遺物実測図 ㉒



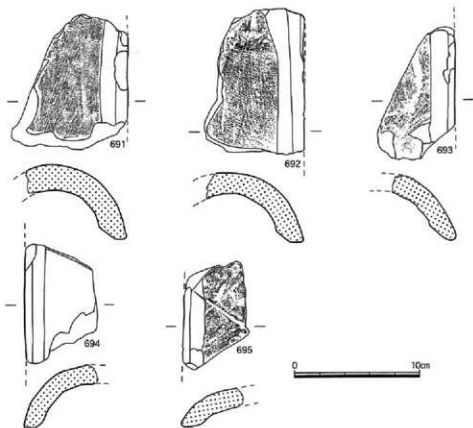
第230图 包含層出土遺物実測図 (21)



第231図 包含層出土遺物実測図 (2)



第232圖 包含層出土遺物実測圖 (23)

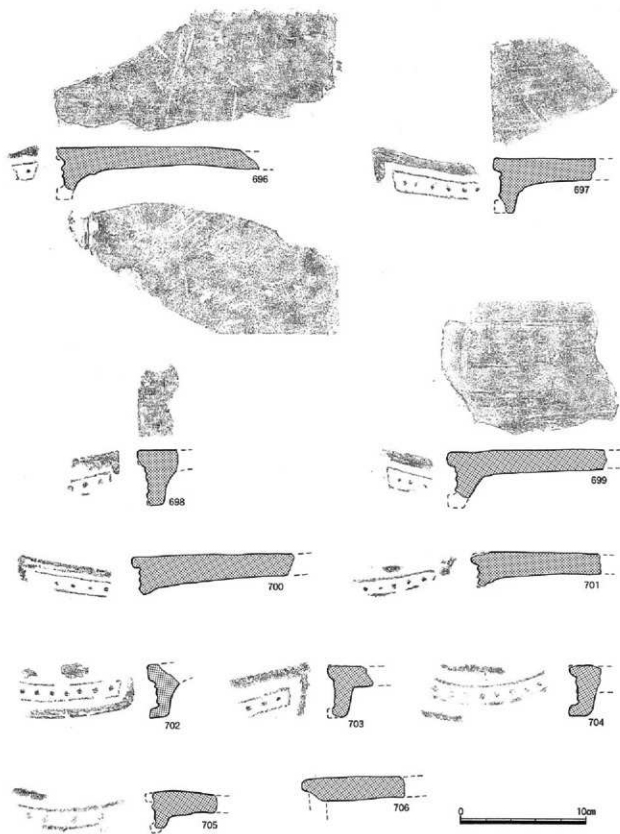


第233図 包含層出土遺物実測図 (24)

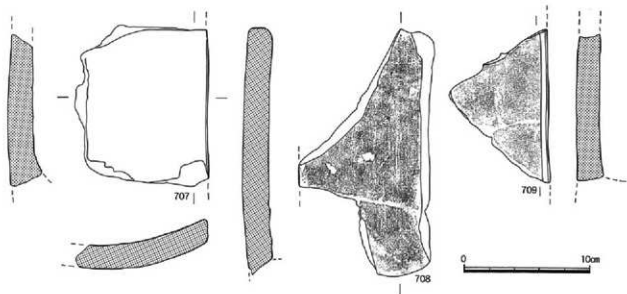
軒平瓦 (第234～252図)

696～709は軒平瓦である。瓦当部が欠損したものと小片のものも含めて掲載したが、軒平瓦の出土数は少なく完成品がないため時期を特定することはできないが概ね、13～16世紀、鎌倉～室町時代と考えられる。包含層からの出土で実測できたものは小片も含めて14個体、うち瓦当文様は連珠紋10、不明4である。瓦当面の縦幅は最小のもので3.0cm(700)最大4.4cm(697)、また顎形態では、凸面の幅は狭く1.5cm前後であり、顎裏面と平瓦面は曲線を呈するもの、直角を呈するもの、鈍角を呈するものに分かれる。

696は瓦当部の破損は大きいが平瓦部は全長22.3cmを測る。凹面には布目痕10条/cm、凸面にはハケ目を残している。瓦当面には径4mmの珠紋と圏線が見られる。顎凸面の幅は狭いものと考えられ、顎裏面と平瓦面は曲線を呈し連続した縦方向のナデである。697は凹面に布目痕10条/cm、瓦当面には径5mmの珠紋と圏線があり、瓦当幅は4.4cm、外縁幅(上)は上0.9cm、左0.9cmと狭い。顎凸面の幅は狭く顎凸面と裏面は屈曲し、顎裏面と平瓦面は曲線を呈する。顎裏面は横方向のナデである。698は凹面に布目痕11条/cm、瓦当面には径5mmの珠紋と圏線が見られ、外縁幅(上)は1.2cmである。顎凸面の幅は狭く、顎凸面と裏面は屈曲し、顎裏面と平瓦面は曲線を呈するものと考えられる。顎裏面は横方向のナデである。699は凹面には布目痕11条/cm、瓦当面には径4mmの珠紋と圏線が見られ、外縁幅(上)は0.9cmである。顎凸面の幅は狭く、顎裏面と平瓦面は曲線または鈍角を呈し、連続した縦方向のナデである。700は瓦当面に径5mmの珠紋と圏線が見られ、外縁幅(上)は0.9cmである。顎は剥離しており凸面と裏面の形状は分



第234图 包含层出土遗物实测图(25)



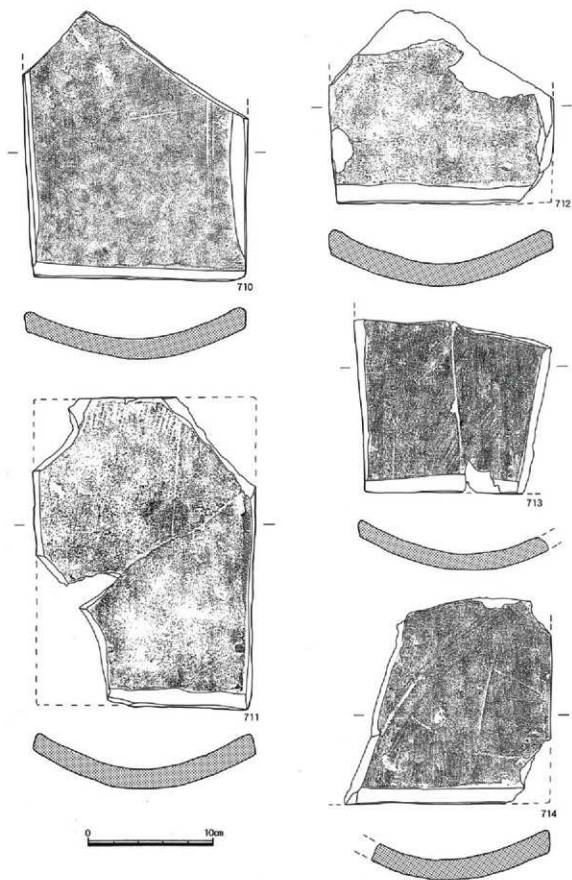
第235図 包含層出土遺物実測図(26)

からない。顎裏面と平瓦面は鈍角であろう。701は凹面に布目痕9条/cm、瓦当面には径5mmの珠紋と圏線が見られる。顎裏面と平瓦面は曲線と思われる。702の瓦当面は径4mmの珠紋と圏線がある。瓦当幅4.2cm、顎凸面の幅は狭く1.6cm、顎凸面と裏面は屈曲し、顎裏面と平瓦面は曲線を呈するものと考えられる。顎裏面は横方向のナデである。703は凹面に布目痕10条/cm、瓦当幅4.0cm、瓦当面には径5mmの珠紋と圏線が見られる。顎凸面の幅は狭く、顎裏面と平瓦面は直角を呈し、顎裏面は横方向のナデである。704は凹面には布目痕10条/cm、瓦当面には径5mmの珠紋と圏線が見られる。瓦当幅4.0cm、外縁幅(下)は0.9cmである。顎凸面の幅は狭く1.7cm、顎裏面は横方向のナデが見られる。705は凹面に布目痕10条/cm、瓦当面には径4mmの珠紋と圏線が見られる。顎裏面と平瓦面は曲線または鈍角と考えられる。706~709は瓦当部が欠落する。707は凹面に布目痕9条/cm、708は11条/cm、709は10条/cmを残す。

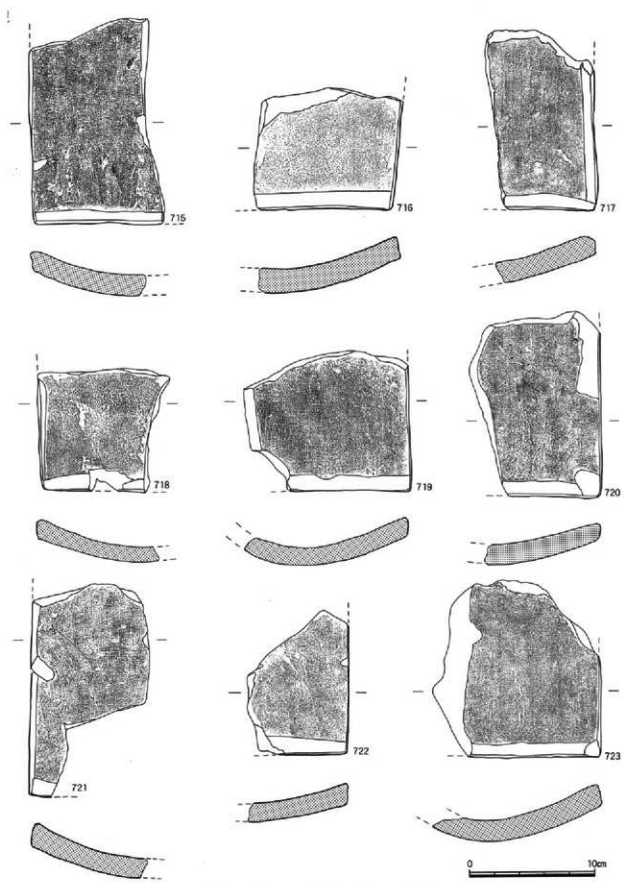
平瓦 (第236~252図)

710~863は平瓦である。完形品はなくすべて欠損部をもつ。縦全長が計測できるのは3点で、24.3cm(711)・24.7cm(729)・24.3cm(730)、横幅は6点で16.7cm(710)・17.6cm(711)・17.7cm(712)・17.9cm(795)・17.1cm(796)・18.3cm(798)で、高さも6点で4.0cm(710)・4.6cm(711)・4.5cm(712)・3.5cm(795)・4.1cm(796)・4.1cm(798)であり、厚さは1.2~2.4cmと幅がある。尚、凹凸面に調整痕を鮮明に残すものについては拓本をとり貼付した。

710~794は凹面に面取りがあり、その一辺を狭端部として実測・図化した。710は凹凸面に砂粒が付着し、凸面にケズリ痕がある。711は凹面に砂粒、凸面にハケ目を残す。712は面取りが鮮明である。713は凹面に11条/cmの布目痕がある。714は凹面にハケ目が縦横に見られ、凸面にケズリ痕を残す。715は凹面に9条/cmの布目痕、凸面にケズリ痕がある。716は凹面に砂粒が付着する。717は凹面に10条/cmの布目痕がある。718は凸面のハケ目が鮮明である。719は凹面に10条/cmの布目痕、凸面にはハ



第236图 包含层出土遗物实测图 (27)



第237图 包含層出土遺物実測図 (28)